山形県埋蔵文化財センター調査報告書第103集

北小屋屋敷遺跡

発 掘 調 査 報 告 書

２００２

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

北小屋屋敷遺跡

きたこややしき

発掘調査報告書

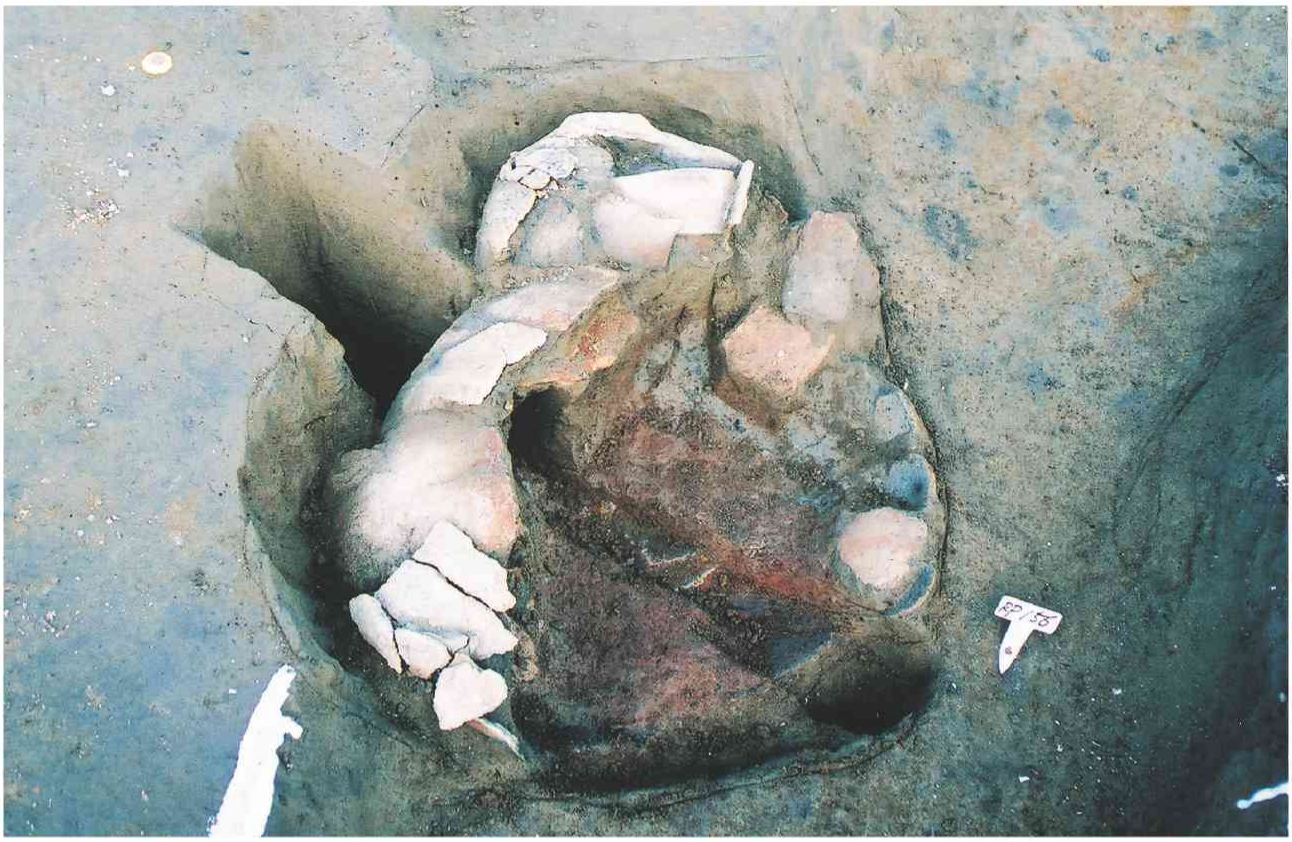
平成14年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

調査区鳥瞰写真（↑W）

周溝墓検出状況（↑上空）

巻頭図版２



SU156土器棺墓内の赤色顔料検出状況（↑S）

SK14土坑墓内の人骨・土師器片出土状況（↑S）

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、北小屋屋敷遺跡の調査結果をまとめたものです。

北小屋屋敷遺跡は米沢市の北部、高畠町と隣接する窪田地区に位置しています。米沢市は古くから城下町として発展し米沢盆地の中心地として今日に至っています。

遺跡のすぐ東を東北中央自動車道（南陽米沢自動車道）が走り、田園地帯も大きくその様相を変えつつあります。

この度、県営担い手育成基盤整備事業に伴い、工事に先立って北小屋屋敷遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、古墳時代の周溝墓、土器棺墓、土坑墓、竪穴式住居跡、中・近世の堀跡、掘立柱建物跡、井戸跡などが検出されました。

特に周溝墓を主とする多様な墓形態が検出されたことで、置賜地方の古墳の成立過程などを知る貴重な資料を得る事ができました。

近年、高速自動車道やバイパス工事、農業基盤整備事業、その他開発が進み、これに伴い発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で想像し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査において御協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成14年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター
理事長　　木　村　　宰

例　　言

1　本書は、県営担い手育成基盤整備事業（外の内地区）に係る「北小屋屋敷遺跡」の発掘調査報告書である。

2　調査は置賜総合支庁産業経済部農村整備課の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3　調査要項は下記の通りである。

遺　跡　名	北小屋屋敷遺跡　（DYZKG）　遺跡番号J-495（米沢市遺跡番号）	
所　在　地	山形県米沢市窪田町窪田字北小屋屋敷	
調 査 主 体	財団法人山形県埋蔵文化財センター	
受 託 機 関	平成13年４月１日～平成14年３月31日	
現 地 調 査	平成13年５月７日～平成13年８月３日	
	平成13年10月15日～平成13年10月26日（水路部分）	
調査担当者	調 査 第 一 課 長	野尻　侃
	主任調査研究員	黒坂　雅人
	調 査 研 究 員	植松　暁彦（調査主任）
	副　調　査　員	黒沼　幹男

4　発掘調査及び本書を作成するにあたり、置賜総合支庁産業経済部農村整備課、置賜教育事務所、米沢市教育委員会、米沢平野土地改良区等の関係諸機関の協力を得た。また、発掘調査にあたって、土坑墓の剥ぎ取りを松井敏也氏（東北芸術工科大学）、遺跡の地理環境を阿子島　功氏（山形大学）、人骨の鑑定を大澤資樹氏（山形大学）からご指導を賜った。比較資料の実見については、吉田博行氏（会津坂下町教育委員会）、柳沼賢治氏・佐久間正明氏（郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団）、吉田功氏・青山博樹氏（福島県文化振興事業団）からご協力、ご指導を賜った。ここに記して感謝申し上げます。

5　本書の作成・執筆は、植松暁彦・黒沼幹男が担当した。編集は、佐竹弘嗣・須賀井新人が担当し、全体については野尻　侃が監修した。

6　委託業務は下記の通りである。

遺構の写真測量・実測	㈱国際航業
基準点測量	㈱寒河江技術コンサルタント
試料の理化学分析（土壌分析）	㈱パリノ・サーヴェイ
木製品の保存処理	㈱吉田生物

7　出土遺物・調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

目　次

Ⅰ　調査の経緯
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　調査の経過 …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と環境
　1　地理的環境 …… 4
　2　歴史的環境 …… 4
Ⅲ　遺跡の概観と層序 …… 7
Ⅳ　検出遺構
　1　周溝墓 …… 10
　2　土器棺墓 …… 12
　3　土坑墓 …… 12
　4　竪穴住居跡 …… 13
　5　土坑跡 …… 14
　6　落ち込み状遺構 …… 14
　7　河川跡 …… 14
　8　堀跡・溝跡 …… 26
　9　掘立柱建物跡 …… 26
　10　性格不明遺構 …… 27
　11　井戸跡 …… 27
Ⅴ　出土遺物
　1　古墳時代の土器 …… 33
　2　古墳時代の人骨 …… 35
　3　中～近世の土器・陶磁器 …… 40
　4　古銭 …… 41
　5　石製品 …… 41
　6　板碑 …… 41
Ⅵ　まとめ …… 48

報告書抄録 …… 51

付編１「北小屋屋敷遺跡理化学分析業務報告」
付編２「北小屋屋敷遺跡の立地環境」

表

出土遺物観察表 ……46

挿　図

第１図　遺跡位置図 ……2
第２図　調査概要図 ……3
第３図　遺構配置図 ……5
第４図　基本層序（１） ……8
第５図　基本層序（２） ……9
第６図　SU1・2周溝墓 ……15
第７図　SU1・2周溝墓断面図 ……17
第８図　SU3周溝墓 ……18
第９図　SU4・58周溝墓 ……19
第10図　SU5周溝墓 ……21
第11図　SU156土器棺墓、SK12～15・59土坑墓 ……23
第12図　ST503・504竪穴住居跡・SK505・509土坑跡 ……24
第13図　ST506竪穴住居跡・SX73・74落ち込み状遺構・SG7河川跡 ……25
第14図　SD11・46堀跡 ……28
第15図　SB600・601a・b掘立柱建物跡 ……29
第16図　SD50溝跡・SX33・51性格不明遺構 ……30
第17図　SE39・40・42・64井戸跡 ……31
第18図　SE23・37・38井戸跡 ……32
第19図　遺物実測図（１） ……36
第20図　遺物実測図（２） ……37
第21図　遺物実測図（３） ……38
第22図　遺物実測図（４） ……39
第23図　遺物実測図（５） ……42
第24図　遺物実測図（６） ……43
第25図　遺物実測図（７） ……44
第26図　遺物実測図（８） ……45
第27図　北小屋遺跡遺構変遷図 ……50

図　版

巻頭図版１　調査区鳥瞰写真他
巻頭図版２　SU156土器棺墓内の赤色顔料検出状況他
図版１　調査区全景完掘状況
図版２　調査区遠景他
図版３　Ａ区近景他
図版４　SU1・2周溝墓完掘状況他
図版５　SU2周溝西土層断面他
図版６　SU2周溝北西・SU3周溝土層断面他
図版７　SU3周溝墓検出状況他
図版８　SU4周溝墓完掘状況他
図版９　SU4周溝墓検出状況他
図版10　SU5周溝墓完掘状況他
図版11　SU156土器棺墓土層断面他
図版12　SK12土坑墓土層断面他
図版13　ST503竪穴住居跡貼床土土層断面他
図版14　SD11・46堀跡・SB600・601掘立柱建物跡完掘状況他
図版15　SD50溝跡土層断面他
図版16　出土遺物（１）
図版17　出土遺物（２）
図版18　出土遺物（３）
図版19　出土遺物（４）
図版20　出土遺物（５）
図版21　出土遺物（６）
図版22　出土遺物（７）

凡　　例

1　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記の通りである。

ＳＵ…墳墓・土器棺墓	ＳＴ…竪穴住居跡	ＳＢ…掘立柱建物跡
ＳＫ…土坑墓、土坑	ＳＥ…井戸跡	ＳＧ…河川跡
ＳＤ…溝跡・堀跡	ＳＰ…ピット	ＳＸ…性格不明遺構
ＥＰ…遺構内柱穴	ＥＫ…遺構内土坑	ＥＬ…遺構内炉跡
ＲＰ…土器・土製品	ＲＱ…石製品	ＲＭ…金属製品
Ｐ……土器	Ｓ……石	Ｗ……木

2　遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま踏襲した。

3　報告書執筆基準は下記の通りである.

（１）　遺跡概要図・遺構配置図に付す座標値は、平面直角座標系第Ｘ系による。図中の方位は座標北を示す。

（２）　遺構実測図は1/20～1/300の縮尺で採録し、挿図毎にスケールを付した。なお、実測図中の●は遺物の出土地点を表す。

（３）　遺物実測図・拓影図は、原則的に1/3を標準として採録し、それ以外の場合には個々に表示した。種別・器種は遺物観察表に付した。

（４）　遺物観察表中の計測値欄は、現存値を示す。(　) は推定値、残存高である。出土地点欄の層位では「Ｆ」は遺構覆土内出土､「Ｙ」は遺構底面出土を示し、ローマ数字「Ⅰ～Ⅳ」等は遺跡を覆う土層（基本層序）を表している。

（５）　遺物図版については、任意の縮尺とした。

（６）　遺物番号は、遺物実測図を基に遺物観察表・遺物図版ともに共通したものである。遺構挿図中に図示している遺物も同様である。

（７）　遺構覆土の色調の記載については、1999年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に拠った。

Ⅰ　調査の経緯

１　調査に至る経過

北小屋屋敷遺跡は、米沢市北部の窪田地区に位置し、米沢盆地を流れる最上川左岸の自然堤防上の水田地帯に立地する。周辺には数々の遺跡も確認されている。

今回の発掘調査は、県営担い手育成基盤整備事業（外の内・窪田地区）に伴って実施されたものである。

本遺跡は平成10年度に米沢市教育委員会により、字切り図等の検討から中世の約90m四方の方形館跡として遺跡登録（米沢市遺跡番号№495）された。

平成13年度事業予定地区のうち、事業計画と遺跡保護の調整に資するため、平成11年10月６～７日に県教育委員会による工事区内の試掘調査が行われた。試掘調査では柱穴・溝跡などの遺構や古墳時代の土師器などの遺物が検出された。

しかし、米沢市教育委員会で登録された館跡の中世の遺構・遺物は確認されず、それ以前の古墳時代のものが検出されたため、古墳時代の集落跡として再登録されたものである。

調査結果をもとに関係機関による遺跡の取扱について協議を行い、現状保存の可能性や工事施工方法なども含めた調整協議が行われた。その結果、事業区内について緊急発掘調査を実施して記録保存を図ることになり、財団法人山形県埋蔵文化財センターが県の委託を受けて発掘調査を実施することになったものである。

２　調査の経過

現地調査は平成13年５月７日から８月３日、及び、10月15日から10月26日までの２期間に渡って実施した。調査面積は遺跡範囲のうち事業に係る約4,700㎡である。５月８日に発掘器材の搬入、現地事務所の設営など、発掘作業のための諸準備をした。

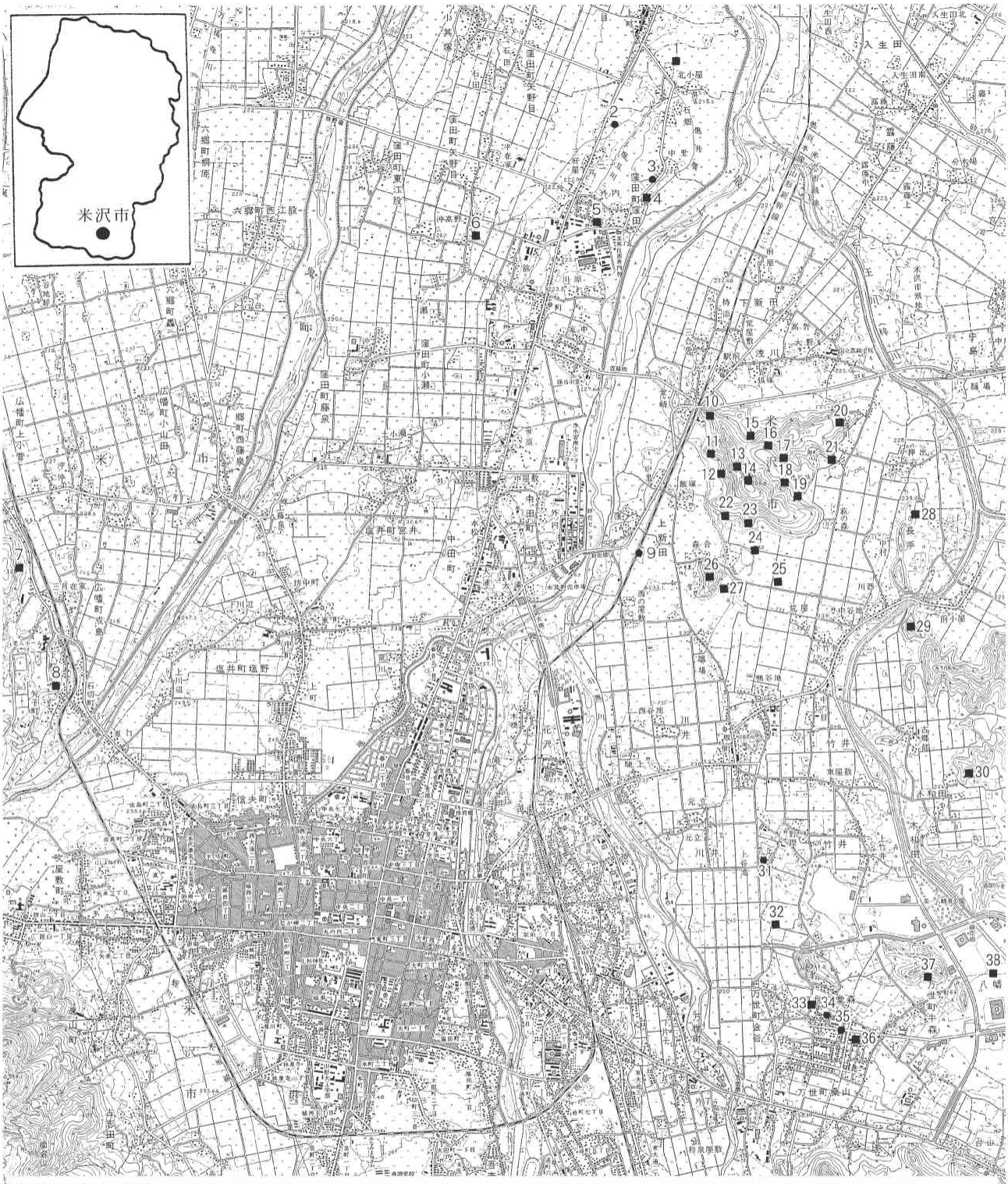
遺構検出面の深さ等を確認するために試掘を行い、重機を用いて表土を除去、併行して面整理を繰り返しながら、遺構検出・マーキング・遺構登録・遺構精査を行った。また、面精査の段階で同溝墓等の遺構が検出されたため検出時の空中撮影も行い、土層ベルト等を残した。

遺構の精査に合わせ、遺構の平面図・断面図の作成、遺物の検出・及び登録、写真撮影、土層注記等の記録作業、遺物取り上げなどを行った。６月13日、８月２日、10月25日には空中撮影による写真実測を行った。

調査区を覆う座標は、基準点測量による平面直角座標を設置し、５m四方の方眼（グリット）を設定した。南北軸は北から南にアルファベットによる記号を、東西軸は西から東にアラビア数字による番号を付して、「Ａ－１」のように表記した。方眼の南北軸は真北を表す。

なお、７月27日に調査結果を公表し、埋蔵文化財に対する理解と保護思想の啓発・普及を目的として現地説明会を実施し、８月３日器材の撤収を行って現地調査を終了した。

その後、整理作業に入り、遺物水洗・ネーミング・実測・拓本・トレース・版組などの作業、報告書作成を行った。



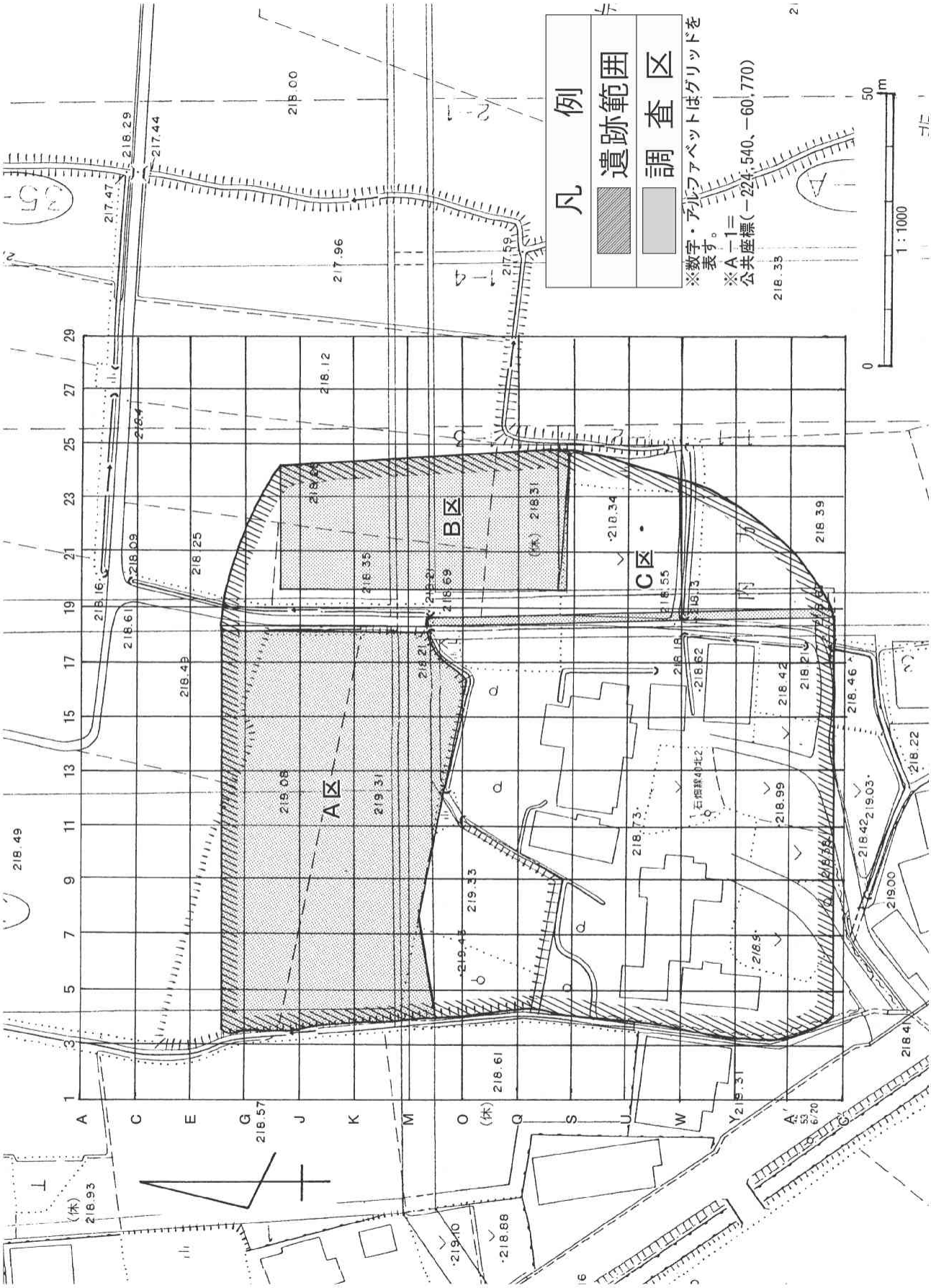
古墳時代の遺跡

1	北小屋屋敷遺跡	2	南原遺跡	3	中里遺跡	4	窪田古墳	5	八幡塚古墳	6	賓領塚古墳
7	成島古墳群	8	窪平古墳	9	上新田ａ遺跡	10	金ヶ崎古墳群	11	飯塚北古墳群	12	飯塚南古墳群
13	戸塚山石切跡	14	山頂古墳群	15	戸塚山北古墳	16	上浅川堤入a古墳群	17	上浅川堤入b古墳群	18	堤入細石塚ａ遺跡
19	堤入細石塚ｂ遺跡	20	上浅川ａ遺跡	21	山崎古墳群	22	森合西古墳群	23	森合東古墳群	24	薬師山古墳群
25	堂田古墳	26	皇太神社古墳群	27	西光寺古墳群	28	天神裏古墳	29	長千古墳群	30	木和田古墳
31	上谷地ｂ遺跡	32	比丘尼平遺跡	33	八幡堂遺跡	34	ニタ俣ａ遺跡	35	柿の木遺跡	36	大清水遺跡
37	牛森山古墳	38	牛森古墳								

（■は古墳、●は集落を表す）

国土地理院発行　１：50,000地形図「米沢北部」「糠野目」「米沢」「米沢東部」を使用

第１図　遺跡位置図


凡　例
遺跡範囲
調　査　区
※数字・アルファベットはグリッドを表す。
※A－1＝公共座標（－224,540、－60,770）
A区
B区
C区
1：1000
0
50
m

第２図　調査概要図

Ⅱ　遺跡の立地と環境

１　地理的環境

本遺跡は米沢盆地のほぼ中央にあり、JR奥羽本線高畠駅の南西約1.5kmの国道13号沿い、行政的には米沢市と高畠町の境界、米沢市窪田町にある。

米沢盆地の東部は奥羽山脈、南部は吾妻山地、西部は笹野山地・玉庭丘陵、北部の南陽市と高畠町は低い山地と丘陵地が占めている。米沢盆地の広がりは東西約15km、南北約23kmである。

中央部から北半部は平坦地で、北半部には吾妻山地を源流とする最上川（松川）やその支流の羽黒川・天王川（梓川）・鬼面川等によって形成された扇状地群が広がる。

この遺跡は、米沢盆地を流れる最上川と鬼面川の合流点に近い、両河川に挟まれた地域にあたり、最上川によって形成された自然堤防（微高地）にある。遺跡東側約1.5kmを最上川が北流する。本遺跡の地目は水田、畑地、宅地等である。その標高は218mを測る。

遺跡西～北側の堀立川に沿って市町境界が弧をなすのは最上川の蛇行跡である。遺跡の立地する自然堤防やその中でも墳墓等が構築される一段高い地形は、これら最上川やその支流等の河川によって運ばれた土砂により中洲状に形成された結果と考えられる。

遺跡東側のＢ区では旧河川跡が検出され、土層や出土遺物等からは概ね古墳時代にはほとんど埋もれきり、同時期には低湿地を呈していたと推測される。

遺跡西側は、最上川左岸の氾濫原で自然堤防が区切られ、近世事業の「黒井堰」が北流する。

２　歴史的環境

米沢市内には約600を超える遺跡が登録され、本遺跡周辺にも縄文から中世に至るまで多くの遺跡が自然堤防上に点在する。本遺跡の主体である古墳時代の遺跡は約40遺跡を数える。

最上川と鬼面川に挟まれた本遺跡周辺の古墳時代の墳墓としては、本遺跡の南西約４kmに宝領塚古墳があり、同前期の長軸長70mの前方後方墳である。米沢市教育委員会の試掘により周濠や二段構築等が確認された。

更に、本遺跡の南側約２～３kmに八幡塚古墳、窪田古墳が分布する。特に八幡塚古墳は本遺跡と同時期の同中期の直径約27mの円墳で、周溝等から遺物が確認されている。

同時期の集落遺跡では、近年発掘調査が行われた南原遺跡、中里遺跡等があげられ、本遺跡とほぼ同時期の遺跡群である。本遺跡南西約1.5kmの南原遺跡は、同中期後葉の最も新しい時期とされ、竪穴住居が30棟以上が確認され、古代の可能性もあるが製鉄遺構も検出された。

中里遺跡は、本遺跡から南に約２kmにあり、同中・後期の竪穴住居跡が10棟以上確認され、出土遺物の検討から福島県会津地方との類似性を指摘している。

一方、本遺跡でも検出された中～近世では、出土遺物が少なく時期は特定されていないが、本遺跡に南接して飯塚館跡がある。方形の主郭部が東西約80m×南北約60m、外堀まで含めると東西約170m×南北約180mの規模である。調査は外堀の一部に限られるが、幅10m以上の堀が二重に廻り、曲輪や土塁、柵列跡等が確認されている。他に前述、中里遺跡でも掘立柱建物跡や溝跡から青磁や珠洲系・瓷器系陶器が出土したが、遺跡全体では判然としない。

凡　例
古墳時代の主な遺構
中～近世の堀跡
旧河川跡
A区
B区
C区
SK58
SK15
SK59
SU156
SK14
SK75
SK13
SK12
SU4
SK16
SK60
SD11
SX51
SB600
SX33
SU46
SU5
SU3
SU2
SU1
SX48
SX44
SD6
SD9
SB601b
SX23
SB601a
SE37
SE38
SE39
SE64
SE41
SE42
SD50
SD82
SE22
公共座標
A－1＝（－224,540 －60,770）
0
20m
1：300
SG7
SX53
SD56
SX54
SX73
SX74
ST506
ST504
SK509
SK505
ST503
SE507
SX501
SD502

第３図　遺構配置図

Ⅲ　遺跡の概観と層序

今回の北小屋屋敷遺跡の調査区は、遺跡範囲全体から見れば概ね遺跡の北半部にあたる。北小屋遺跡は最上川西岸に位置し、旧河川に囲まれた中州状の自然堤防（微高地）に立地する。調査区中の東側のＢ区では旧河川跡（SG7）が検出された。

Ａ区は遺跡の北半部にあたり、本遺跡の中でも最も標高が高い。地山層は砂礫層の上に灰黄褐色シルト層が堆積している。Ａ区の中でも最も標高の高い南東部分（標高約219m）に古墳時代の大型の周溝墓(SU1・2)が構築され、それよりやや低い中央～北西部分に中型の周溝墓(SU3・4・5）が構築されている。更に小型の土器棺墓や土坑墓がこれら周溝墓の外側、遺跡北西の最縁部に構築されている。最も高いSU1・2との比高差は約0.4mを測る。

Ｂ区はＡ区の東側に位置し、標高ではＡ区より一段低い地形で、標高は約218mを測り、Ａ区との比高差は約１ｍある。前述の旧河川跡は本遺跡の東～北方向へ蛇行し遺跡東を区切る。

Ｃ区はＡ・Ｂ区の南側にあり、水田等の耕作で削平を受けるが、標高はＡ・Ｂ区の中間で約218.30mを測る。古墳時代の竪穴住居（ST503・504・506）や土坑等が検出された。

これらを概括すれば、旧河川（Ｂ区）等による自然堤防（微高地）の最も高い部分に、古墳時代の大型の周溝が構築され、その周囲に中型の周溝墓や土器棺墓・土坑墓からなる墓域（Ａ区）が形成され、その下位の地域に墓域を囲む様に集落（Ｃ区）が営まれる様相が窺える。

中～近世においても、最も標高の高いＡ区南東部に掘立柱建物跡や井戸跡群が確認され、その周囲を方形状の堀跡で囲む様相が認められた。

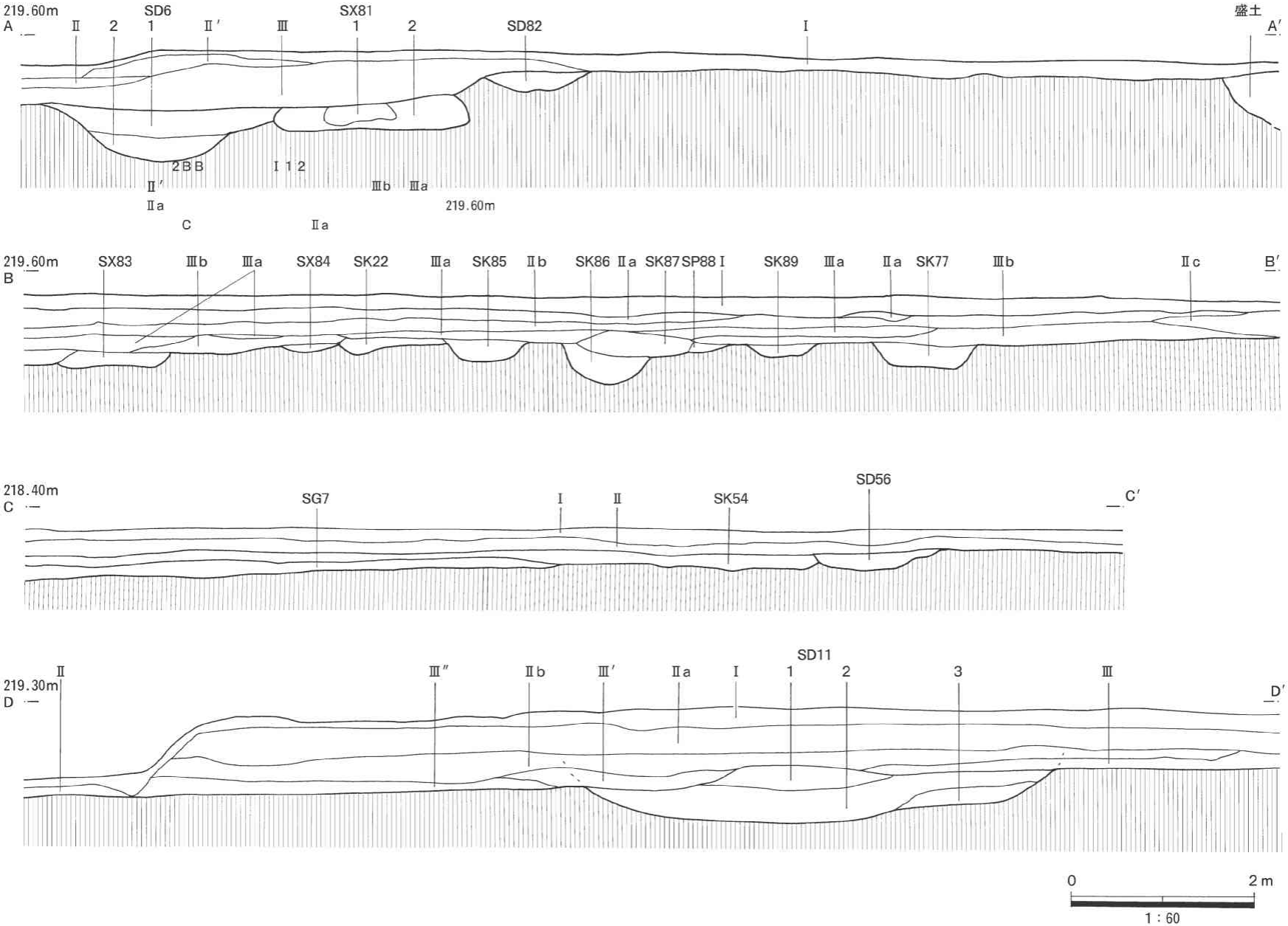
基本層序は、Ⅰ・Ⅱ層は現代の水田の耕作土と床土で全ての調査区で確認される。具体的にはⅠ層が黒褐色粘質シルト層（耕作土)、Ⅱ層が暗褐色粘質シルト層（床土)、Ⅲ層が砂質を挟む粘土～シルト層（中近世の整地層)、Ⅳ層がにぶい黄褐色微砂層（地山）である。

Ⅱ層は、基本的には現況の水田床土で、Ａ区南側でⅡa～cに細分された。地元民によれば、Ａ区は水田以前は近年まで桑畑として利用され、その際に土を動かしているとの事であった。全ての周溝墓の墳丘部もこの際に削平を受けている事が土層から判断された（第４・５図)。

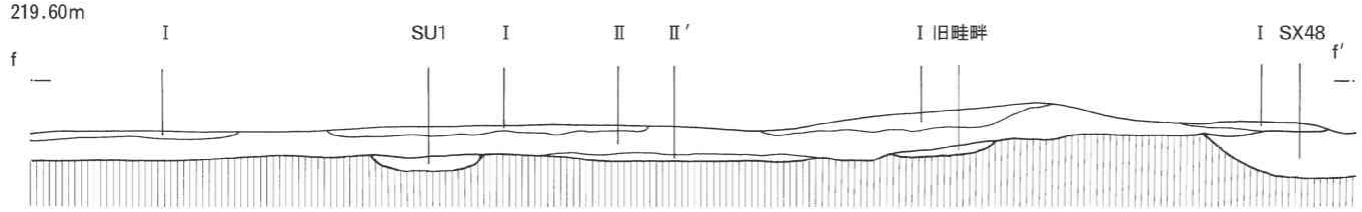
Ⅲ層は、Ａ区南東部から南側にかけて地山が落ち込む傾斜変換点の地域を中心に確認され、調査区南壁の出土遺物等から中～近世の整地層と判断された。Ⅲa～d層に細分される。これは中～近世の遺構群（館跡）を構築する際に、元来の地形や古墳時代の周溝墓等による凹凸地形を均した整地層と推測される。整地層上面のレベルが中～近世の堀跡（SD11・46）に主軸を併行する掘立柱建物跡（SB600・601）等の検出面と同レベルである事からも傍証される。

遺物の包蔵される層準は、前述したＡ区南東部を除く全体にわたってⅡ層下部より認められ、遺構の検出面はⅣ層上面である。Ａ区南東部では整地層上面で遺構の検出に努めたが、近年までの撹乱が著しく判別は困難で、Ⅲ層中～下部から遺物の包蔵が認められ、遺構の検出はⅣ層上面である。

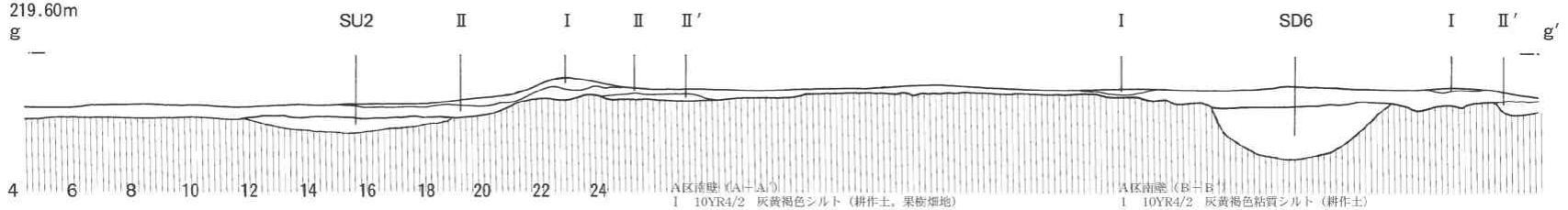
中～近世の堀跡とその内部の掘立柱建物跡の間においては遺構が希薄であり、逆説的に土塁であった可能性がある（第３図）が、今調査の土層等からは確認できなかった。

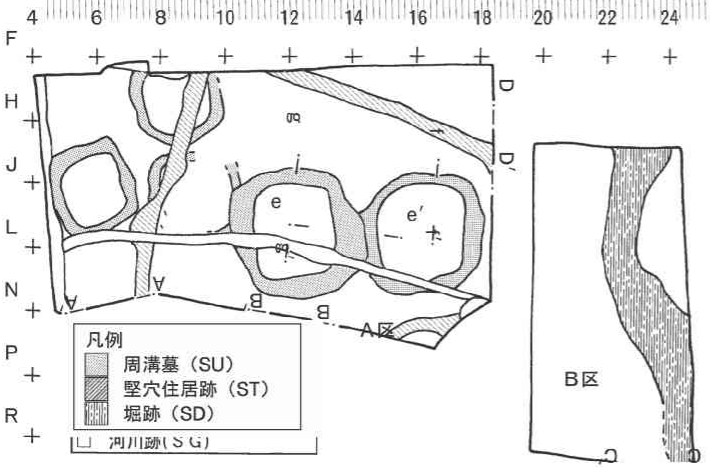

219.60m
A
Ⅱ
2
SD6
1
Ⅱ′
Ⅲ
SX81
1
2
SD82
Ⅰ
盛土
A′
2BB
Ⅰ12
Ⅱ′
Ⅱa
Ⅲb
Ⅲa
219.60m
C
Ⅱa
219.60m
B
SX83
Ⅲb
Ⅲa
SX84
SK22
Ⅲa
SK85
Ⅱb
SK86
Ⅱa
SK87
SP88
Ⅰ
SK89
Ⅲa
Ⅱa
SK77
Ⅲb
Ⅱc
B′
218.40m
C
SG7
Ⅰ
Ⅱ
SK54
SD56
C′
219.30m
D
Ⅱ
Ⅲ″
Ⅱb
Ⅲ′
Ⅱa
Ⅰ
SD11
1
2
3
Ⅲ
D′
0
2m
1：60

第４図　基本層序（１）



A区中央部（e～g－e～g′）
Ⅰ　10YR3/2　黒褐色シルト
（耕作土）
Ⅱ　10YR3/2　黒褐色砂質シルト
（床山。小礫を微量に含み、かたくしまる）
Ⅱ′ 10YR4/2　灰黄褐色微砂
（Ⅰと地山砂の混合土）
SU1　10YR2/1　黒色砂質シルト
（地山粒を微量に含み、しまる）
SU2　10YR2/1　黒色シルト
（小礫を微量に含み、しまる）
SX90 10YR4/2　灰黄褐色細砂
（地山粒、塊を多く含み、やわらかい）
SX91 10YR3/2　黒褐色細砂
（地山土を大ブロックで多く含む。撹乱）
SX48 10YR4/2　灰黄褐色微砂
（地山塊をブロックで含み、かたくしまる）
SD6　10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト
（小砂を若干含み、しまる）





A区東壁（A－A′）
Ⅰ　10YR4/2　灰黄褐色シルト（耕作土。果樹畑地）
Ⅱ　10YR4/2　灰黄褐色シルト（床土。しまる）
Ⅱ′ 10YR3/2　黒褐色シルト（畦畔盛土。しまる）
Ⅲ　10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト（整地。小礫を若干含み、かたくしまる）
SD82
SX81　10YR2/2　黒褐色シルト（F1。地山粒を若干含み、やわらかい）
1　10YR3/1　黒褐色砂質シルト（F1。地山塊、小礫を含み、やわらかい）
2　10YR5/4　にぶい黄褐色シルト（F2。1を斑状に含む。しまる）
SD6
1　10YR3/2　黒褐色微砂（F1。小礫を含み、やわらかい）
2　10YR3/1　黒褐色粘質シルト（F2。砂、小礫を含む。粘質でやわらかい）

A区東壁（D－D′）
Ⅰ　10YR4/2　灰黄褐色シルト（耕作土）
Ⅱa 10YR4/2　灰黄褐色微砂（床下。かたくしまる）
Ⅱb 10YR4/1　褐灰色シルト（旧床土。砂を含み、しまる）
Ⅲ　10YR4/2　灰黄褐色微砂（地山塊、砂を若干含み、しまる）
Ⅲ′ 10YR5/2　灰黄褐色微砂（小礫を含み、かたくしまる）
Ⅲ″ 10YR4/2　灰黄褐色細砂（小礫を多く含み、かたくしまる）
SD11
1　10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト（地山粒を若干含み、かたくしまる）
2　10YR3/1　黒褐色粘質シルト（地山粒を含み、泥炭様。やわらかい）
3　10YR3/2　黒褐色砂質シルト（地山粒を若干含み、ややしまる）

A区南壁（B－B′）
1　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト（耕作土）
Ⅱa 10YR5/2　灰黄褐色微砂（床土。かたくしまる）
Ⅱb 10YR4/1　褐灰色シルト（旧床土。砂を含み、色調暗い。しまる）
Ⅱc 10YR4/2　灰黄褐色ルト（旧床土。しまる）
Ⅲa 10YR4/2　灰黄褐色微砂（地山塊、砂を若干含み、しまる）
Ⅲb 10YR3/1　黒褐色微砂（地山土を縞状に含み、色調暗い。しまる）
SX84　10YR5/4　赤褐色シルト（流土）
SK22　10YR4/1　褐灰色シルト（地山土を縞状に含む。整地層ヵ）
SX83　10YR3/2　黒褐色細砂（小礫、地山粗砂を多く含み、しまる）
SK85　10YR4/2　灰黄褐色細砂（地山粒を多く含み、やわらかい）
SK87　10YR4/4　褐色中砂（盛土様。Ⅲaや地山土を縞状に含み、小礫を含む）
SK86　10YR3/2　黒褐色粘質シルト（炭化粒を含み、単層。やわらかい）
SP88　10YR3/1　黒褐色微砂（地山砂を縞状に含む）
SK89　10YR4/2　灰黄褐色微砂（地山土を小ブロックで含む）
SK77　10YR3/3　暗褐色シルト（砂礫を若干含み、単層。しまる）

B区南壁（C－C′）
Ⅰ　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト（耕作土）
Ⅱ　10YR3/1　灰黄褐色シルト（床土。しまる）
SD56　10YR3/1　黒褐色シルト（地山粒を若干含み、ややしまる）
SX54　10YR3/2　黒褐色粘質シルト（泥炭。地山粒を微量に含み、やわらかい）
SG7　10YR3/1　黒褐色粘質シルト（炭化粒、有機物を微量に含む。やわらかい）

0　2m
1:100

第５図　基本層序（２）

Ⅳ　検出遺構

本調査では、古墳時代の周溝墓５基、土器棺墓１基、土坑墓５基、竪穴住居跡３棟、土坑４基、河川跡１条等が検出された。また、中～近世では堀跡１条、掘立柱建物跡２棟、井戸跡７基等が検出された。以下に古墳時代と中～近世の時代毎の主たる遺構を中心に概述する。

１　周溝墓

本遺跡で最も標高の高いＡ区から幅1.5～２ｍの溝が、長さ約15～22ｍの概ね方形状に廻る周溝跡が５基検出された。規模や形状から水田等の耕作により墳丘部や主体部が削平された、ほぼ方形の墳墓の周囲に廻っていた周溝跡と考えられた。これらは周溝の形態がＳＵ58を除き、周溝断面形が緩やかな「U」字状を呈し、所謂弥生～古墳時代の「方形周溝墓」の周溝と掘り方が異なる。また、明確な墳丘等も確認できない事から一般的な「方墳」と判断するまでにも至らなかった。一方、全体に周溝の角の一部が浅くなる等の上記の墳墓との類似性も窺え、本遺跡では全て「周溝墓」の名称に留め遺構登録した。周溝覆土中から古墳時代中～後期の土師器の高坏、坏、壺、甕が検出されたが、SU2を除き全体に単発的な出土状況である。

他にＡ区南壁西端部でSD82とした溝跡が検出され、規模や覆土等から、同様の周溝墓の一部とも推測されたが現代の削平により判然としなかった。

SU1周溝墓（第6・7図）　Ａ区東端Ｉ～Ｍ－14～18グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出された。周溝西部を切られるSU1の次に規模が大きい。周溝の南部を近代のSD6や中～近世のピット群に壊されている。周溝の平面形は隅丸方形に近く、南北軸でN－9°－Wを測る。遺構確認面での南北軸の外法が19.1m、内法が15.75m、東西軸の外法が、18.75m、内法が13.5mの規模である。周溝全体では外法約19m内外の周溝墓と推測された。

周溝の幅は1.35～3.5mで、確認面からの深さは12～26cmを測り、全ての周溝角で浅くなる。周溝の断面形は緩やかな「U」字状を呈し、底面は平坦である。周溝覆土は大きく３層に大別され、１層が堆積土、２層が周溝内側崩落土、3層が周溝外崩落土と推測され、１層が黒褐色土で、他は地山土を多く含み、汚れた様相を示す。

周溝の床面や直上、覆土下層から古墳時代中～後期の土師器の坏・高坏・壺・甕が出土する。

SU2周溝墓（第6・7図）　Ａ区中央Ｉ～Ｍ－10～14グリッドで、、層上面で検出する。最も規模が大きく、東西でSU1・3の周溝を切る。周溝南部をSD6、中近世のSE23等の井戸跡、ピット群に壊される。周溝の平面形は隅丸方形に近く、南北軸はＮ－15°－Ｗを測る。確認面での南北軸の外法が、21.05m、内法が16.05m、東西軸の外法が、20.25m、内法が17.25mの規模である。周溝全体では外法約20m内外の周溝墓と推測された。

周溝の幅は確認面で、1.5～4.5mで、確認面からの深さは10～36cmを測り、周溝北東・南西角が浅なる。周溝の断面形は緩やかな「U」字状を呈し、底面は平坦である。周溝覆土は大きく３層に大別され、１層が堆積土、２層が周溝内側崩落土、3層が周溝外崩落土と推測され、１層が黒褐色土で、他は地山土を多く含み、汚れた様相を示す。周溝覆土上～中層から古墳時代中～後期の土師器の坏・高坏が出土する。

SU3周溝墓（第8図）　Ａ区中央～西部Ｉ～Ｋ－７～10グリッドで、Ⅳ層上面の検出である。削平等により周溝北西角・南東辺の検出に留まる。SU1・2に比して中型である。周溝東側がSU2の周溝に切られ、周溝西側を中～近世のSD46堀跡や南側をSD6に壊される。

周溝の平面形は概ね隅丸方形と推測され、南北軸はN－9°－Wを測る。明確な周溝の東西軸は外法が約14.25m、内法が11.25mで、判然としない南北軸も周溝北西・南東角と周溝幅を考慮すれば、周溝全体では外法約14～15m内外の周溝墓と推測された。

周溝の幅は確認面で、約1.2～2.0mである。確認面からの深さは5～9cmであり、他の周溝墓に比べ元来全体に浅い掘り方だった可能性もあり、プランとして検出できない周溝北東・南西角も元々浅かったためとも推測できる。周溝の断面形は緩やかな「U」字状を呈し、底面は平坦である。周溝覆土は３層に大別され、１層が堆積土、２層が周溝内側崩落土、3層が周溝外崩落土と推測される。１層が黒褐色土で、他は地山土を多く含み、汚れた様相を示す。

周溝の床面直上から古墳時代中～後期頃の土師器壷片のみが出土している。

SU4周溝墓（第9図）　Ａ区北西F～H－7～9グリッドで、Ⅳ層上面の検出。SU3と同様に周溝墓中では中型である。周溝北西でＳＵ58周溝を切り、周溝北側は調査区外の撹乱、中央部をSD11に壊される。周溝の平面形はほぼ隅丸方形と推測される。南北軸はN－18°－Wである。調査区外に延びる南北軸の外法が11.5m以上、内法が９m以上、東西軸の外法が13.5m、内法が10.6mの規模である。周溝北西角等から全体では外法約14m内外の周溝墓と判断される。周溝の幅は0.9～2.0mである。確認面からの深さは2～20cmで、周溝南西角で周溝幅が狭くなり、プラン不明瞭な北東角と合わせて深さも非常に浅くなる。周溝断面形は緩やかな「U」字状を呈し、底面は平坦である。周溝覆土は3層に大別され、1層が堆積土、2層が周溝内側崩落土、3層が周溝外崩落土と推測される。１層が黒褐色土で、他は地山土を多く含み、汚れた様相を示す。周溝覆土下層の内面黒色処理の土師器坏のみが出土した。

SU5周溝墓（第10図）　Ａ区西端H～K－4～7グリッドで、Ⅳ層上面の検出である。周溝墓全体では中型に属する。周溝西辺でSD9溝跡を切り、周溝西側は調査区外の撹乱、周溝南西角をSD6に壊される。

周溝の平面形は隅丸方形である。南北軸はN－26°－Wを測る。南北軸の外法が14.0m、内法が10.8m、東西軸の外法が13.4m、内法が9.6mの規模である。周溝全体では外法約14m内外の周溝墓と判断される。周溝の幅は確認面で1.2～2.4mである。確認面からの深さは9～32cmで、周溝北東・南西角で浅くなる。周溝断面形は緩やかな「U」字状を呈し、底面は平坦である。周溝覆土は3層に大別され、1層が堆積土、2層が周溝内側崩落土、3層が周溝外崩落土と推測される。1層が黒褐色土で、他は地山土を多く含み、汚れた様相を示す。周溝の床面直上から土師器坏片のみが出土している。

また、本周溝に切られる**SD9溝跡**は、幅30cm前後の溝跡でＡ区西端で本周溝西辺にほぼ併走し、南西角で屈曲し東に延び、中～近世のSD46等に途中切られるが、SU2・3周溝南辺の外側を区画するように併走し、検出長約55m以上を測る。覆土中から土師器甕片が出土する。

SU58周溝墓（第9図）　Ａ調査区北端F－6～7グリッドで、Ⅳ層上面の検出である。溝跡の

規模や角で屈曲する形態等から周溝墓の一部と判断した。周溝墓全体では小型で、周溝南辺をSU4周溝に切られ、SU156土器棺墓、土坑墓としたSK59を切る。周溝の北側大半は調査区外の撹乱に壊される。

周溝の平面形は、周溝北半を撹乱で壊されるが、直線的な周溝南辺やほぼ直角に屈曲する南西角から概ね方形を基調とする事が窺える。規模は、周溝が途切れる南辺東端部を他の周溝墓にみられる周溝角の浅い部分（南東角）と判断され、既に明らかな南西角との直線距離から周溝全体では外法約7m以上を測ると考えられる。南北軸はN－26°－Wを測る。

周溝の幅は確認面で0.6～0.9mで他の周溝墓に比べ狭い。確認面からの深さも26cm前後をを測り、南東部でやや急斜して立ち上がる。周溝断面形は逆台形状を呈し、底面は平坦である。

周溝覆土は2層に大別され、1層が堆積土、2層が周溝崩落土と推測される。1層が黒褐色土で、2層は地山土を多く含み汚れた様相を示す。遺物はSU156の土師器壷片が若干出土した。

2　土器棺墓

A区北西端部で土坑内に大型の壷を埋設し、小型壷の底部を蓋として利用する土器埋設遺構が1基検出された。壷内に赤色顔料が堆積しており、形態から「土器棺墓」として遺構登録した。

SU156土器棺墓（第11図）　A区北西端のF－6グリッドに位置し、Ⅳ層上面の検出である。北東側をSU58に切られ、土器棺である大型壷の体部上面の1/3が既に壊される。

土器棺墓の平面形は、土器棺とほぼ同規模の長軸（東西）約65cm、短軸（南北）約50cm前後、確認面からの深さ約25cmの小判形の土坑内に、器高70cm以上で体部最大径50cm程の大型の土師器壷が土器棺として斜～横位に埋設される。また、大型壷の口径約20cmの複合口縁部には、上半を欠いた器高残存長約14cm、体部径約23cmの小型の土師器壷の底部付近を逆さにし再利用した蓋が口縁部を覆う様に被せられる。大型壷の長軸はN－67°－Wを測る。

大型壷内の底面からは赤色顔料が厚さ約５cm程に堆積し、人骨等は認められない。上層の灰黄褐色シルトは土器倒壊時等の混入土と推測され、埋土は地山土類似の黄褐色シルトである。

3　土坑墓

A区北西端F～G－5～6グリッドの約10mの範囲に、円形や楕円形の長さ約60～90cmの同形態の土坑跡がまとまって５基検出された。その内のSK12・14からは人骨片、土師器小片が出土し、全体に分布状況や覆土の類似から「土坑墓」群と判断した。他に遺物は未検出である。

SK12土坑墓（第11図）　A区のG－6グリッドで、Ⅳ層上面の検出である。検出時から骨片が確認され、平面形は楕円形で長軸が61cm（南北）、短軸が42cm（東西）を測り、確認面からの深さは13cmを測る。断面形は緩やかな「U」字状を呈し、底面はほぼ平坦である。覆土は２層に大別され、上層が褐灰色粘質シルトで、下位に人骨片が不規則に出土し、炭化物も微量に出土する。下層は地山土に類似した灰黄褐色砂質シルトで、骨片を粒状に僅かに含む。

SK13土坑墓（第11図）　A区F－5～6グリッドに位置する。Ⅳ層上面の検出である。平面形は楕円形で、長軸が101cm（南北）、短軸が66cm（東西）を測り、確認面からの深さは11cmを測る。断面形は緩やかな「U」字状を呈し、底面はほぼ平坦である。覆土は２層で、SK12同様、上層が褐灰色粘質シルトで、下層は地山土に類似した灰黄褐色砂質シルトである。

SK14土坑墓（第11図）　Ａ区F－5グリッドで、Ⅳ層上面の検出である。西側をSK15に切られる。平面形はほぼ円形で、長軸が85㎝（東西）、短軸が63㎝（南北）を測り、確認面から深さは12㎝を測る。断面形は緩やかな「U」字状を呈し、底面はほぼ平坦である。覆土は２層に大別され、上層は黒褐色粘質シルトで骨片を概ね含まず、下層はにぶい黄褐色シルトで平面中央部に人骨片が密集して確認され、同一レベルで微細な土師器片が出土した。

また、SK14を切る**SK15**も形態や規模、覆土等の類似から土坑墓と推測され、平面形はほぼ円形で長軸が90㎝（南北）、短軸が62㎝（東西）を測り、確認面からの深さは33㎝を測る。断面形は「U」字状を呈し、底面はほぼ平坦である。覆土は２層に大別され、上層は地山に近いにぶい黄褐色シルト、下層はSK14上層に類似する黒褐色粘質シルトで、地山塊を含む。

SK59土坑墓（第11図）　A区F－6グリッドに位置し、Ⅳ層上面の検出である。東をSU58に切られる。平面形はほぼ円形で、長軸が約96㎝（東西）、短軸が83㎝（南北）を測り、確認面からの深さは18㎝を測る。断面形は緩やかな「U」字状を呈し、底面はほぼ平坦である。覆土は２層で上層が褐灰色粘質シルトで、下層は地山土に類似した灰黄褐色砂質シルトである。

４　竪穴住居跡

幅約２ｍのＣ区北半部で、現農道による削平を受けた竪穴住居跡が３棟検出された。全て方形を基調とした一辺約３～４ｍの規模と考えられ、古墳時代に帰属する。

ST503竪穴住居跡（第12図）　C区北側Q－18～19グリッドで、Ⅳ層上面の検出である。東側は調査区外に延び、調査区東壁の土層から床面や壁等は削平され、貼床下部のみの検出である。平面形は方形を呈し、検出長で3.3m以上を測る。南北軸の方位はN－49°－Eである。

削平によりカマドや壁等の形態等は不明だが、床は確認面からで約24㎝以上の白色粘土を含む褐灰色微砂の貼床で、南西角に貯蔵穴下部と推定された直径40㎝前後のEK1がある。EK1底面から土師器坏が正位完形で出土した。

ST504竪穴住居跡（第12図）　Ｃ区北側S－1グリッドで、Ⅳ層上面の検出である。東西で調査区外に延び、SK509を切り、南西部で現代のフラスコ状の撹乱に壊される。平面形は方形で、検出できる南北軸は3.4ｍを測り、概ね一辺3.5ｍ前後の規模と推測される。南北軸の方位はN－56°－Wである。床面はほぼ平坦なグライ化した粘質土の貼床で、壁はやや急斜する。確認面からの深さは24㎝を測る。床面南西部で直径約40㎝の焼土の広がりを確認したが、カマド袖部等は未検出で、調査区外に延びる事もあり判然としない。床面を主に多くの遺物が出土し、土師器有段・無段の坏、甕片等が出土した。

ST506竪穴住居跡（第13図）　Ｃ区中央部U－18～19グリッドに位置し、Ⅳ層上面の検出である。北辺がSD507に切られ、東側が調査区外に延びる。調査区東壁の土層から削平された貼床部と判断された。平面形は方形と推定され、検出長南北軸は2.8m以上を測る。南北軸の方位はN－１°－Wである。削平により規模等は不明だが、床は確認面からで約12㎝以上の炭化粒を若干含む汚れた褐灰色粘質シルトの貼床である。貼床土や底面から黒色処理された土師器無段の坏、壷片等が出土した。

5　土坑跡

土坑は主にＣ区の竪穴住居跡に近接して検出された。出遺物等から古墳時代に所属すると推定され、主なものを概述する。

SK505土坑跡（第12図）　C区R－18グリッドに位置し、Ⅳ層上面の検出である。東側が調査区外に延びる。平面形は円形と推測され、南北の直径196cmを測る。底面は平坦で確認面からの深さは23cmを測り、壁はやや急斜する。覆土は２層に大別され、主に褐灰色粘質シルトの下層で遺物や炭化粒を多く含む。土師器の無段坏、高坏脚部等が出土した。

SK509土坑跡（第12図）　C区S－18グリッドに位置し、ST504貼床下で確認された。東側が調査区外に延びる。平面形は楕円形と推測され、検出長で47cm以上を測る。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは20cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は灰黄褐色粘質シルトで、底面からほぼ完形で土師器壷が逆位、甕が横位で出土した。

6　落ち込み状遺構

主にＢ区の旧河川跡周辺から浅い土器溜まり状の落ち込み状遺構が検出された。主なものを記す。

SX73落ち込み遺構（第13図）　B区R－22グリッドで、Ⅳ層上面の検出である。東側を一部ＳＤ56に切られる。平面形は長い不整楕円形で、長軸が256cm、短軸が72cmを測る。底面はほぼ平坦で確認面からの深さ10cmを測り、壁はやや急斜する。覆土はグライ化した褐灰色シルトで、土師器坏、高坏脚部片が出土する。

また、南接して**SX74落ち込み遺構**も検出され、平面形は不整楕円形を呈し、長軸で265cm、短軸135cmを測り、確認面からの深さは4cmである。覆土はSX73と同質で、底面から土師器坏・甕片が出土した。

SX53落ち込み遺構（第３図）　B区N～O－19～20グリッドで、Ⅳ層上面の検出である。西側が調査区外に延びる。平面形は不整形で、長軸が450cm以上、短軸が400cmを測る。底面はやや凹凸があり、確認面からの深さ10cm前後を測り、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は地山土を紋状に含む褐灰色シルトである。底面から土師器壷が横位で半完形で１点出土した。

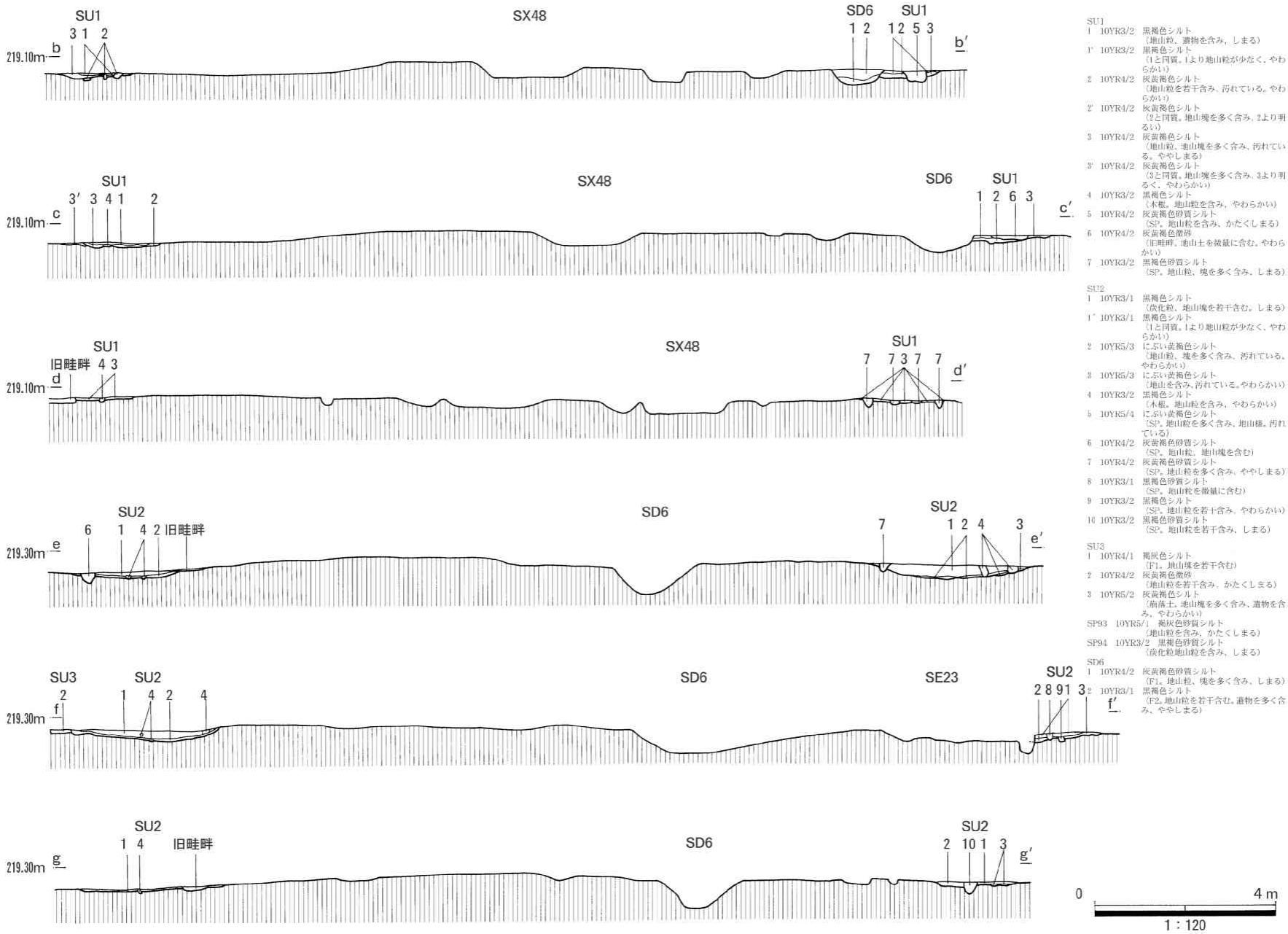
7　河川跡（第13図）

Ｂ区東半の**SG7河川跡**で、南北に蛇行し、Ⅳ層上面で検出される。南側でSX54に切られる。河川幅は５～11ｍを測り、確認面からの深さは10～25cmを測る。断面形は緩やかなU字状を呈し、底面はほぼ緩やかである。堆積土は黒褐色粘質シルトの炭化粒や有機物を微量に含む泥炭層である。遺物は未検出であるが、併走する幅10cm前後の**SD56溝跡**から古墳時代の土師器坏が出土する事から同時期の河川跡と考えられる。

また、SG7の一部深堀トレンチを行った所、本遺跡の地山を形成するⅣ層下に、有機物や自然木を含む灰黄褐色砂層が認められた。砂層は確認面から約50ｍ下で検出され、最も厚い部分で50cm以上堆積し、古墳時代以前の河川の両端は更に東西に広がる様相が窺えた。河川は古墳時代には概ね埋り切り浅い凹地状として残り、泥炭層が形成され、低湿地状を呈したと推測される。

SU3
SU2
SU1
SX33
SX80
SX67
SX48
SX49
SX36
SD6
SD9
SD11
SD65
SE23
SE37
SE38
R136
RP141
RP209
RP41
RP100
RP76
旧 畦 畔
農 道
撹 乱
219.10m
SP93
SP94
0
4 m
1 : 120

第６図　SU１・２周溝墓



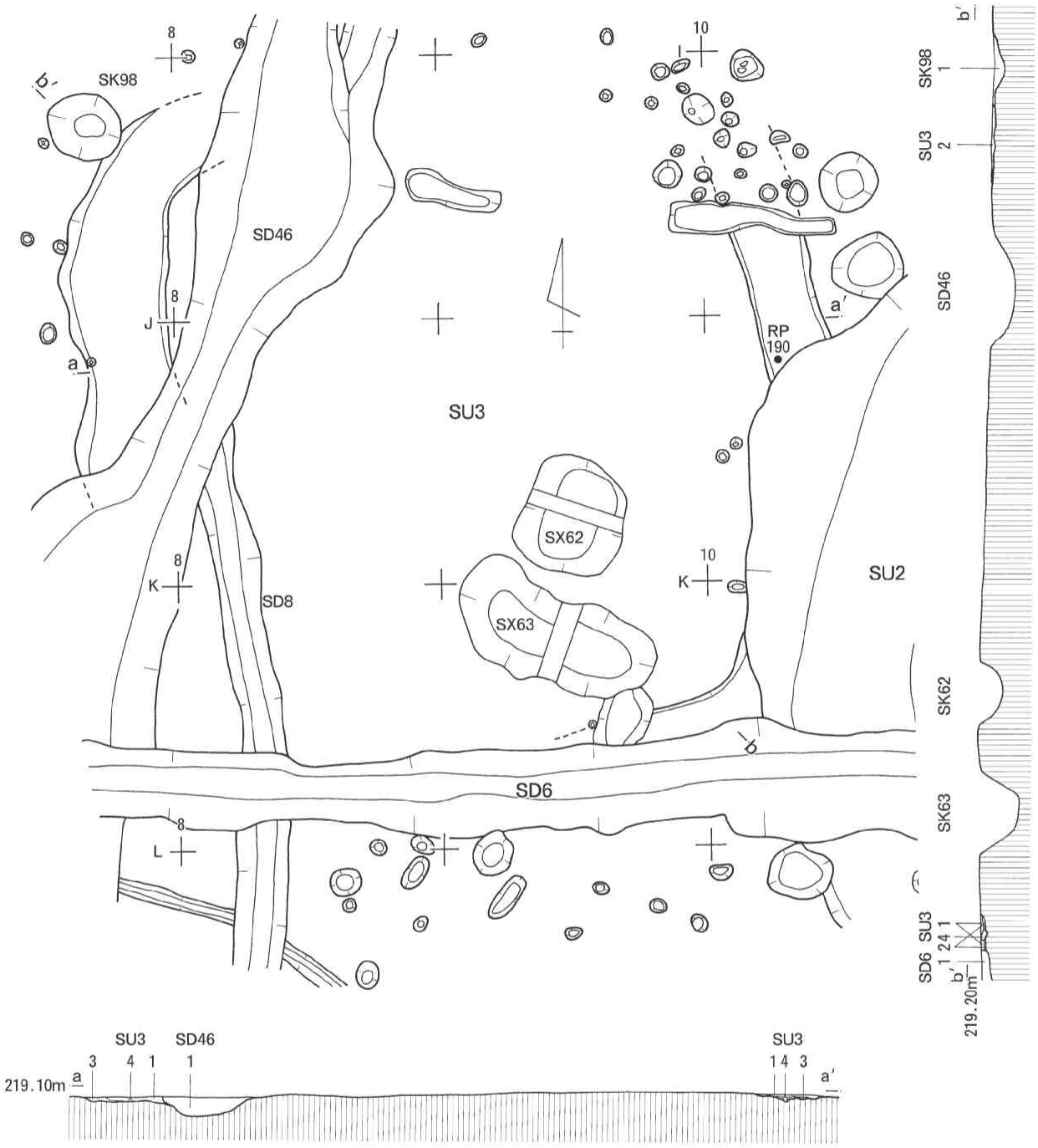
SU1
1 10YR3/2 黒褐色シルト
（地山粒、遺物を含み、しまる）
1′ 10YR3/2 黒褐色シルト
（1と同質。1より地山粒が少なく、やわらかい）
2 10YR4/2 灰黄褐色シルト
（地山粒を若干含み、汚れている。やわらかい）
2′ 10YR4/2 灰黄褐色シルト
（2と同質。地山塊を多く含み、2より明るい）
3 10YR4/2 灰黄褐色シルト
（地山粒、地山塊を多く含み、汚れている。ややしまる）
3′ 10YR4/2 灰黄褐色シルト
（3と同質。地山塊を多く含み、3より明るく、やわらかい）
4 10YR3/2 黒褐色シルト
（木根。地山粒を含み、やわらかい）
5 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
（SP。地山粒を含み、かたくしまる）
6 10YR4/2 灰黄褐色微砂
（旧畦畔、地山土を微量に含む。やわらかい）
7 10YR3/2 黒褐色砂質シルト
（SP。地山粒、塊を多く含み、しまる）

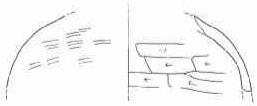
SU2
1 10YR3/1 黒褐色シルト
（炭化粒、地山塊を若干含む。しまる）
1′ 10YR3/1 黒褐色シルト
（1と同質。1より地山粒が少なく、やわらかい）
2 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
（地山粒、塊を多く含み、汚れている。やわらかい）
3 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト
（地山を含み、汚れている。やわらかい）
4 10YR3/2 黒褐色シルト
（木根。地山粒を含み、やわらかい）
5 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト
（SP。地山粒を多く含み、地山様。汚れている）
6 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
（SP。地山粒、地山塊を含む）
7 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
（SP。地山粒を多く含み、ややしまる）
8 10YR3/1 黒褐色砂質シルト
（SP。地山粒を微量に含む）
9 10YR3/2 黒褐色シルト
（SP。地山粒を若干含み、やわらかい）
10 10YR3/2 黒褐色砂質シルト
（SP。地山粒を若干含み、しまる）

SU3
1 10YR4/1 褐灰色シルト
（F1。地山塊を若干含む）
2 10YR4/2 灰黄褐色微砂
（地山粒を若干含み、かたくしまる）
3 10YR5/2 灰黄褐色シルト
（崩落土。地山塊を多く含み、遺物を含み、やわらかい）
SP93 10YR5/1 褐灰色砂質シルト
（地山粒を含み、かたくしまる）
SP94 10YR3/2 黒褐色砂質シルト
（炭化粒地山粒を含み、しまる）

SD6
1 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
（F1。地山粒、塊を多く含み、しまる）
2 10YR3/1 黒褐色シルト
（F2。地山粒を若干含む。遺物を多く含み、ややしまる）

第7図 SU1・2周溝墓断面図



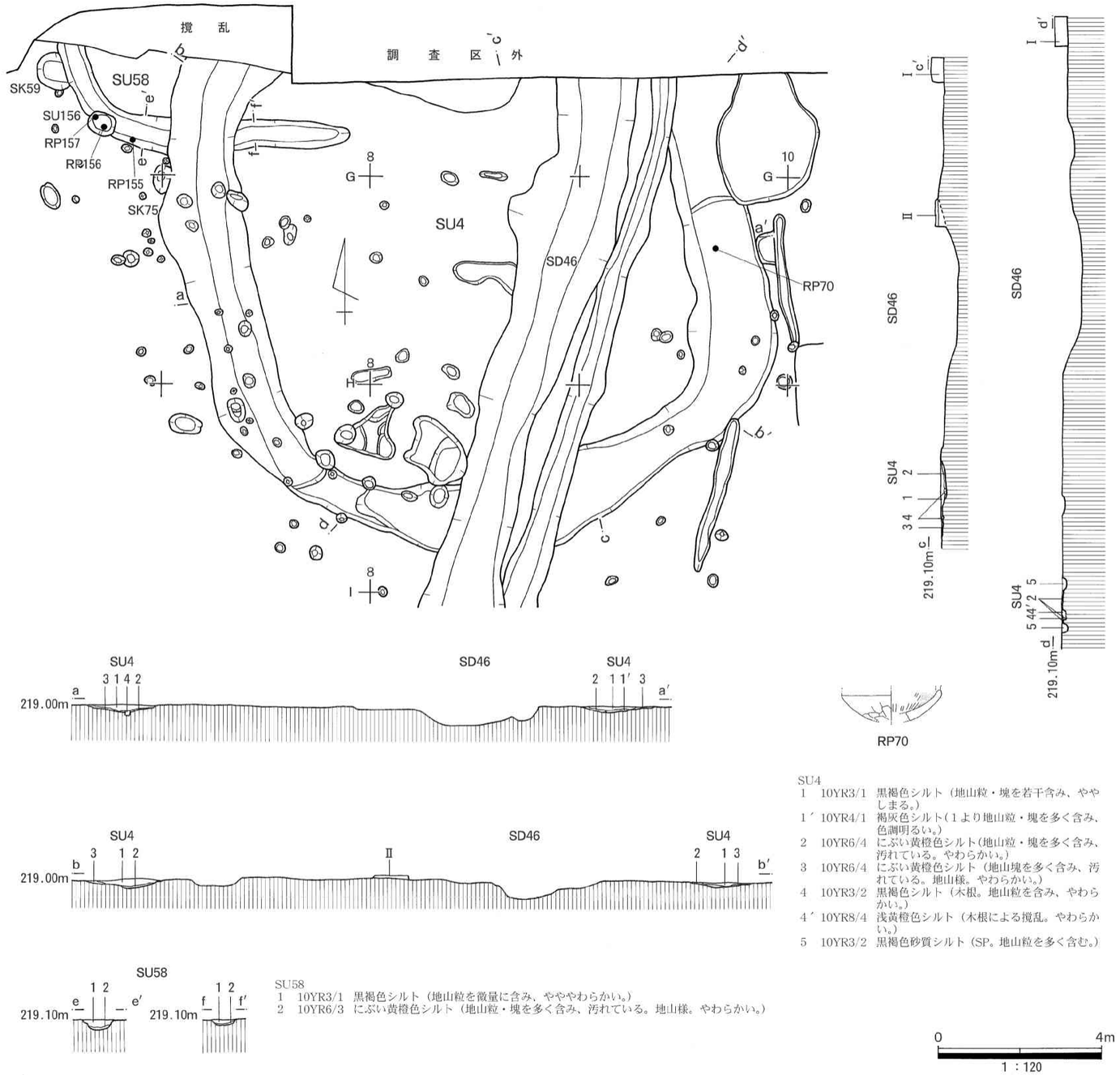


RP190

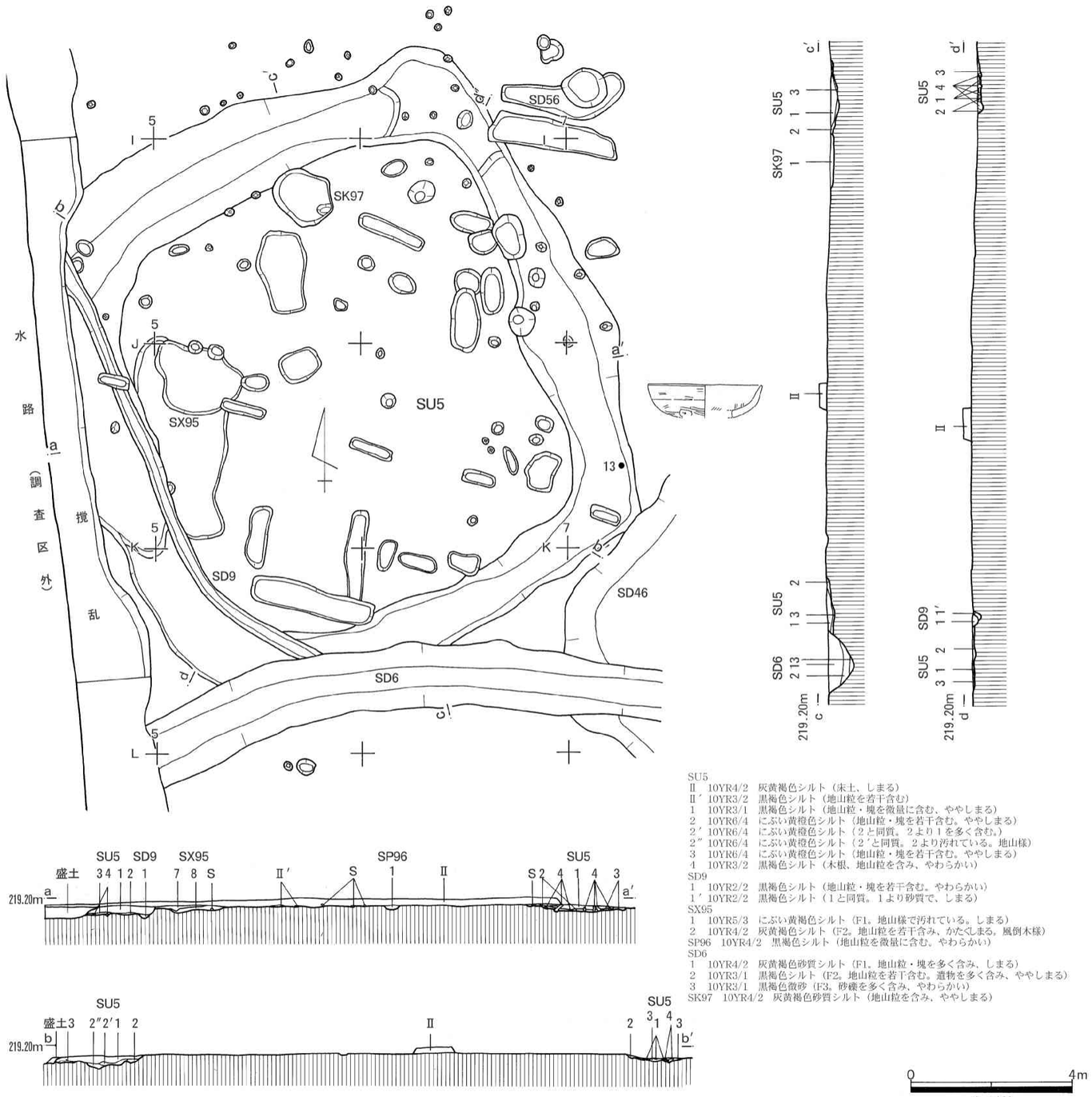
SU3
1　10YR4/1　褐灰色シルト（F1。地山塊を若干含む）
2　10YR4/2　灰黄褐色微砂（地山粒を若干含み、固くしまる）
3　10YR5/3　にぶい黄褐色シルト（地山塊を多く含み、地山様、やわらかい）
4　10YR3/2　黒褐色シルト（木根。地山粒を含み、やわらかい）
SD46　10YR4/2　灰黄褐色微砂（砂礫を多く含み、固くしまる）
SK98　10YR3/2　黒褐色シルト（地山塊を多く含み、しまる）
SD6　10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト（地山粒・塊を多く含み、しまる）

0　4 m
1：120

第８図　SU３周溝墓

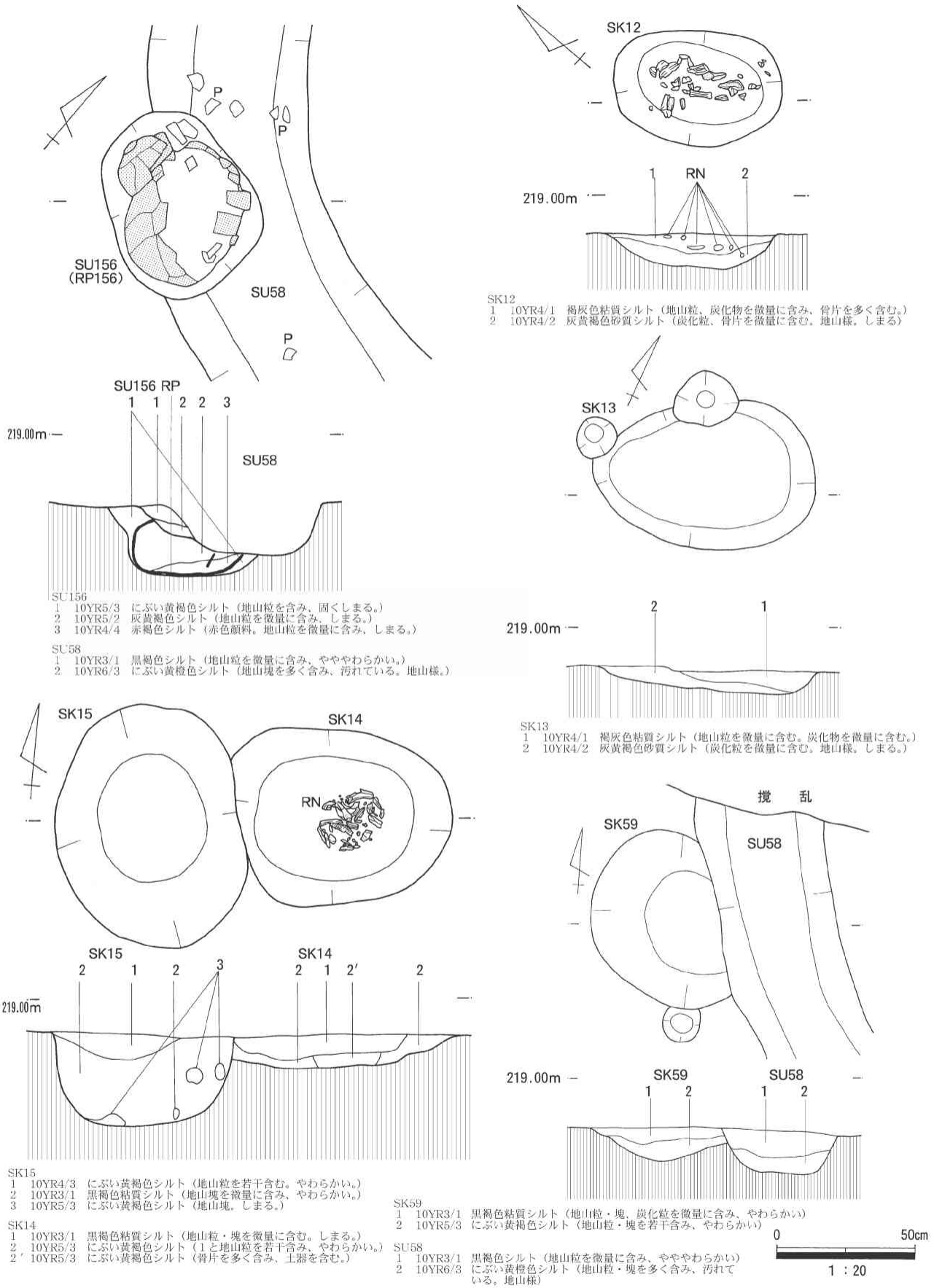


第９図　SU４・58周溝墓



SU5
Ⅱ　10YR4/2　灰黄褐色シルト（床土、しまる）
Ⅱ′ 10YR3/2　黒褐色シルト（地山粒を若干含む）
1　10YR3/1　黒褐色シルト（地山粒・塊を微量に含む、ややしまる）
2　10YR6/4　にぶい黄橙色シルト（地山粒・塊を若干含む。ややしまる）
2′ 10YR6/4　にぶい黄橙色シルト（2と同質。2より1を多く含む。）
2″ 10YR6/4　にぶい黄橙色シルト（2′と同質。2より汚れている。地山様）
3　10YR6/4　にぶい黄橙色シルト（地山粒・塊を若干含む。ややしまる）
4　10YR3/2　黒褐色シルト（木根、地山粒を含み、やわらかい）
SD9
1　10YR2/2　黒褐色シルト（地山粒・塊を若干含む。やわらかい）
1′ 10YR2/2　黒褐色シルト（1と同質。1より砂質で、しまる）
SX95
1　10YR5/3　にぶい黄褐色シルト（F1。地山様で汚れている。しまる）
2　10YR4/2　灰黄褐色シルト（F2。地山粒を若干含み、かたくしまる。風倒木様）
SP96　10YR4/2　黒褐色シルト（地山粒を微量に含む。やわらかい）
SD6
1　10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト（F1。地山粒・塊を多く含み、しまる）
2　10YR3/1　黒褐色シルト（F2。地山粒を若干含む。遺物を多く含み、ややしまる）
3　10YR3/1　黒褐色微砂（F3。砂礫を多く含み、やわらかい）
SK97　10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト（地山粒を含み、ややしまる）

第10図　SU５周溝墓



SU156
1　10YR5/3　にぶい黄褐色シルト（地山粒を含み、固くしまる。）
2　10YR5/2　灰黄褐色シルト（地山粒を微量に含み、しまる。）
3　10YR4/4　赤褐色シルト（赤色顔料。地山粒を微量に含み、しまる。）

SU58
1　10YR3/1　黒褐色シルト（地山粒を微量に含み、ややわらかい。）
2　10YR6/3　にぶい黄橙色シルト（地山塊を多く含み、汚れている。地山様。）

SK12
1　10YR4/1　褐灰色粘質シルト（地山粒、炭化物を微量に含み、骨片を多く含む。）
2　10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト（炭化粒、骨片を微量に含む。地山様。しまる）

SK13
1　10YR4/1　褐灰色粘質シルト（地山粒を微量に含む。炭化物を微量に含む。）
2　10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト（炭化粒を微量に含む。地山様。しまる。）

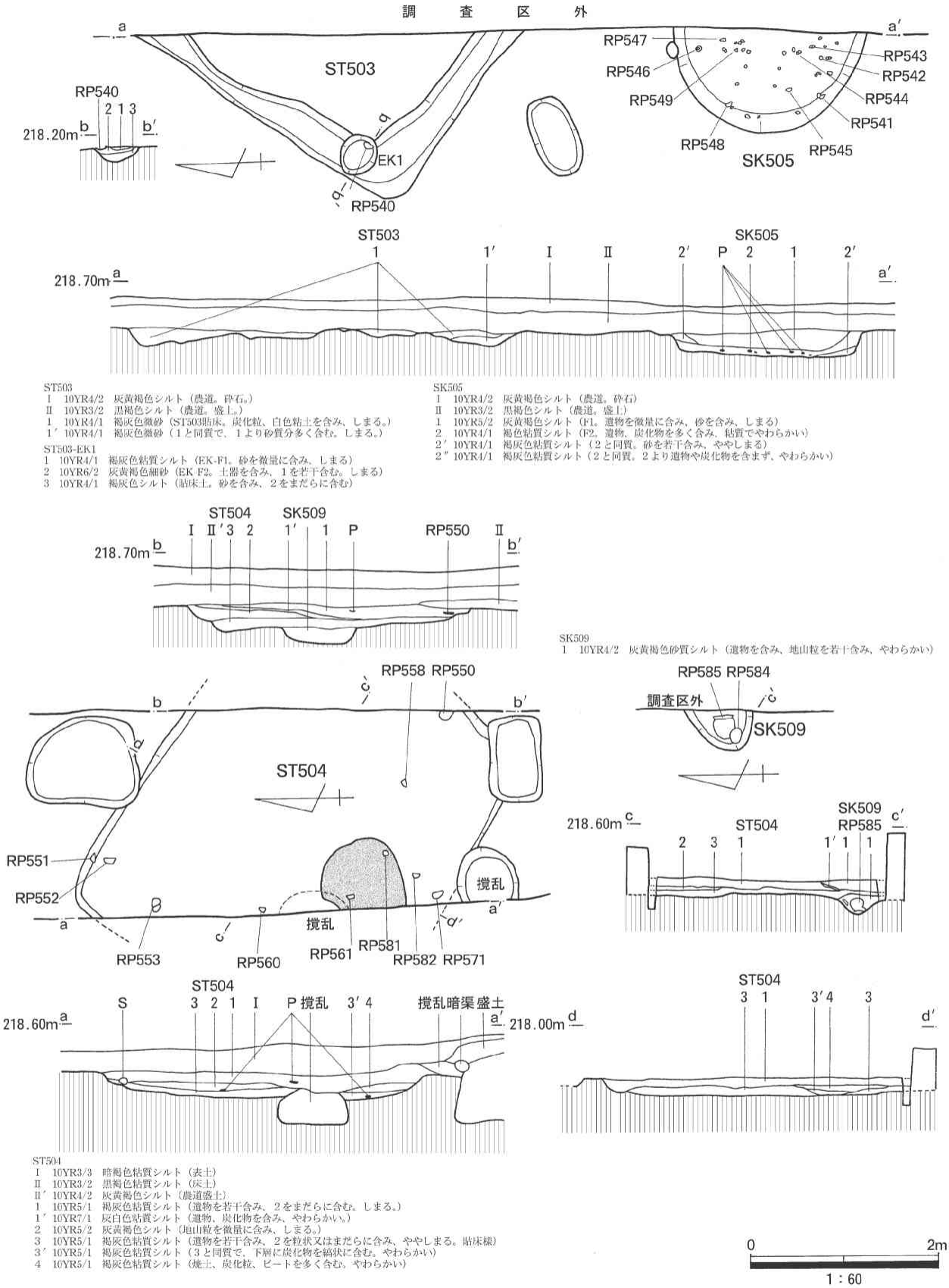
SK15
1　10YR4/3　にぶい黄褐色シルト（地山粒を若干含む。やわらかい。）
2　10YR3/1　黒褐色粘質シルト（地山塊を微量に含み、やわらかい。）
3　10YR5/3　にぶい黄褐色シルト（地山塊。しまる。）

SK14
1　10YR3/1　黒褐色粘質シルト（地山粒・塊を微量に含む。しまる。）
2　10YR5/3　にぶい黄褐色シルト（1と地山粒を若干含み、やわらかい。）
2′10YR5/3　にぶい黄褐色シルト（骨片を多く含み、土器を含む。）

SK59
1　10YR3/1　黒褐色粘質シルト（地山粒・塊、炭化粒を微量に含み、やわらかい）
2　10YR5/3　にぶい黄褐色シルト（地山粒・塊を若干含み、やわらかい）

SU58
1　10YR3/1　黒褐色シルト（地山粒を微量に含み、ややわらかい）
2　10YR6/3　にぶい黄橙色シルト（地山粒・塊を多く含み、汚れている。地山様）

第11図　SU156土器棺墓、SK12～15・59土坑墓



ST503
I　10YR4/2　灰黄褐色シルト（農道。砕石。）
II　10YR3/2　黒褐色シルト（農道。盛土。）
1　10YR4/1　褐灰色微砂（ST503貼床。炭化粒、白色粘土を含み、しまる。）
1′10YR4/1　褐灰色微砂（1と同質で、1より砂質分多く含む。しまる。）

ST503-EK1
1　10YR4/1　褐灰色粘質シルト（EK-F1。砂を微量に含み、しまる）
2　10YR6/2　灰黄褐色細砂（EK-F2。土器を含み、1を若干含む。しまる）
3　10YR4/1　褐灰色シルト（貼床土。砂を含み、2をまだらに含む）

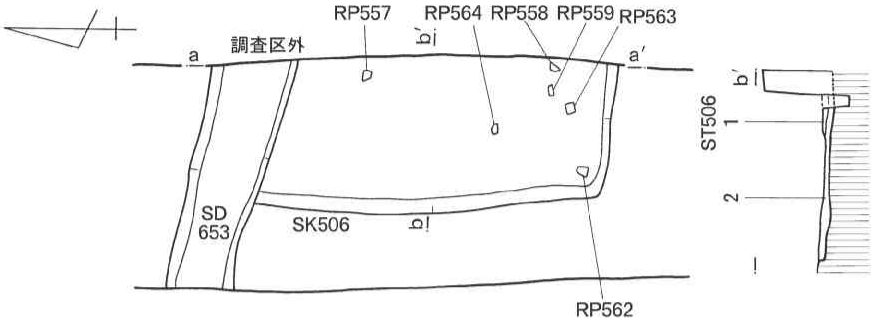
SK505
I　10YR4/2　灰黄褐色シルト（農道。砕石）
II　10YR3/2　黒褐色シルト（農道。盛土）
1　10YR5/2　灰黄褐色シルト（F1。遺物を微量に含み、砂を含み、しまる）
2　10YR4/1　褐色粘質シルト（F2。遺物、炭化物を多く含み、粘質でやわらかい）
2′10YR4/1　褐灰色粘質シルト（2と同質。砂を若干含み、ややしまる）
2″10YR4/1　褐灰色粘質シルト（2と同質。2より遺物や炭化物を含まず、やわらかい）

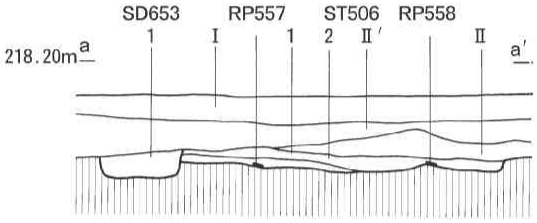
SK509
1　10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト（遺物を含み、地山粒を若干含み、やわらかい）

ST504
I　10YR3/3　暗褐色粘質シルト（表土）
II　10YR3/2　黒褐色粘質シルト（床土）
II′10YR4/2　灰黄褐色シルト（農道盛土）
1　10YR5/1　褐灰色粘質シルト（遺物を若干含み、2をまだらに含む。しまる。）
1′10YR7/1　灰白色粘質シルト（遺物、炭化物を含み、やわらかい。）
2　10YR5/2　灰黄褐色シルト（地山粒を微量に含み、しまる。）
3　10YR5/1　褐灰色粘質シルト（遺物を若干含み、2を粒状又はまだらに含み、ややしまる。貼床線）
3′10YR5/1　褐灰色粘質シルト（3と同質で、下層に炭化物を縞状に含む。やわらかい）
4　10YR5/1　褐灰色粘質シルト（焼土、炭化粒、ピートを多く含む。やわらかい）

0　2m
1：60

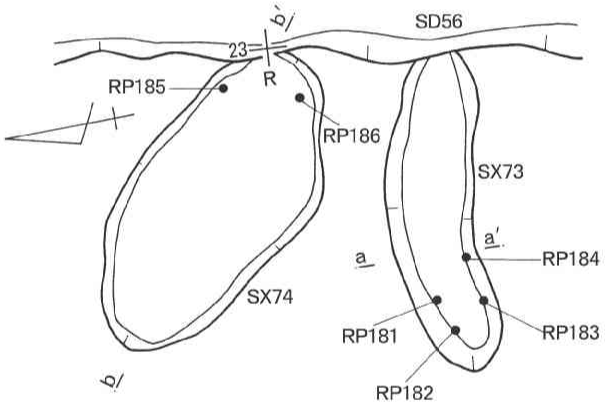
第12図　ST503・504竪穴住居跡・SK505・509土坑跡

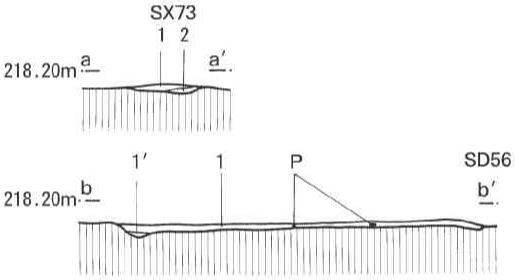




ST506
1　10YR5/2　灰黄褐色砂礫（農道、砕石）
II　10YR3/2　黒褐色シルト（床土）
II′　10YR4/2　灰黄褐色シルト（農道盛土）
1　10YR6/1　褐灰色粘質シルト（炭化粒を微量に含み、遺物を若干含む。しまる）
2　10YR4/1　褐灰色粘質シルト（遺物、炭化粒を多く含み、ややしまる）

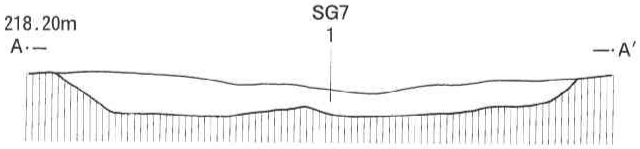
SD653
1　10YR4/1　褐灰色細砂（地山砂を縞状に含む）



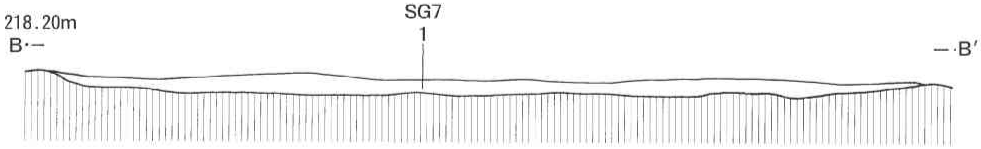


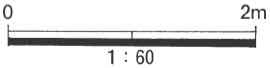
SX73
1　10YR4/1　褐灰色シルト（地山塊を多く含み、汚れている。しまる。）
2　10YR5/1　褐灰色シルト（地山粒を微量に含み、遺物を含む。やや粘質でしまる。）

SX74
1　10YR5/2　灰黄褐色シルト（地山粒を微量に含み、しまる）
1′　10YR5/2　灰黄褐色シルト（炭化粒を多く含む）



SG7
1　10YR3/1　黒褐色粘質シルト（炭化粒、有機物を微量に含む。泥炭。やわらかい。）





第13図　ST506竪穴住居跡・SX73・74落ち込み状遺構・SG7河川跡

8　堀跡・溝跡

Ａ区北部と西部で幅2.5m前後の東西・南北方向の溝跡が2条検出された。規模や形態がほぼ同一で、北西でほぼ直交する事、周辺地形や出土遺物等から所謂「方形居館」に関わる一辺50m前後の堀跡と判断された。南と東は調査区外に延び未検出だが、内部に掘立柱建物跡や井戸跡、溝跡等が検出される。特に数条確認された溝跡の中でSD50溝跡は、検出位置や規模、出土遺物から堀跡と関連した区画溝等が推測された。また、全体に堀跡の内側約５～９ｍの範囲は遺構が希薄で、調査区壁等の土層からは確認できなかったが、土塁の存在も窺える。

SD11堀跡（第14図）　A区北半、F～I－11～18グリッドに位置する。東西方向に延びＡ区北東端で屈曲し、東西で調査区外に延びる。現況水田畦畔と併行し、全体に北側を削平される。堀跡の一辺は、検出長で東西約36m以上を測るが、削平により壊された北西角はほぼ直交するSD46堀跡の延長線から、北東角の屈曲部と合わせて一辺約50m内外と推測される。東西軸の方位はN－74°－Wである。堀幅約2.1～2.5m、検出面からの深さ36～40cmを測る。断面形は緩やかな台形状を呈する。覆土は上層が黒褐色微砂、下層が褐灰色微砂層で小礫を含む。遺物は上層から近世陶磁器の碗、鉢、擂鉢、下層上位から内耳土鍋片等が出土する。

SD46堀跡（第14図）　A区西半のF～M－7～9グリッドで、南北方向に延び、南北端は調査区外に延びる。南北軸の方位はN－17°－Eである。堀幅は約2.0m前後を測り、一部内外に堀幅が5.4m強に広がる部分がある。北半部ではSD46堀跡に併行して東側に浅い溝跡が併走する。確認面からの深さは55cm前後を測る。断面形は緩やかな台形状を呈する。覆土は上層が褐灰色微砂で小礫を多く含み、下層が暗褐色粘質シルトの泥炭層である。遺物は上層から近世陶磁器の碗、鉢、擂鉢片、下層上位から珠洲系陶器の甕片、内耳土鍋片が出土する。

ＳＤ50溝跡（第16図）　A区N－15～17グリッドである。Ⅳ層上面の検出で、A区南壁土層から近世整地層のⅢ層よりも明らかに下位である。東～南方向に彎曲する溝跡で、両端が更に調査区外に延びる。溝幅は２ｍ前後で、確認面からの深さは30cmを測る。断面形は緩やかなU字状を呈し、覆土は褐灰色シルトで小礫を多く含む。覆土中より内耳土堝が出土する。

9　掘立柱建物跡・柱列跡

Ａ区中央、南半で小規模な柱穴で構成された建物や柱列が、概ね堀跡と直交、並行して３棟検出された。この他にもピット群が確認されたが積極的に建物とするまでには至らなかった。

SB600掘立柱建物跡（第15図）　A区北側H～I－9～11グリッドに位置する。梁行3.7m（約役12尺）、桁行7.4m（約25尺）を測る１間×３間の建物跡である。柱間距離は2.2～3.7mで、長軸方位がN－71°－Wである。柱穴の平面形は円形を基調に全体に小規模で、径14～82cmを測り、確認面からの深さは５～32cmを測る。建物南側にSB600に並行する３間以上の目隠し塀と推測される柱穴列も検出された。覆土は黒褐色シルトで、遺物は未検出である。

SB601a・b掘立柱建物跡（第15図）　A区南側L～N－10～13グリッドに位置し、南側が調査区外に延びる。梁行8.5m（約28尺）以上、桁行13.7m（約46尺）を測る３間以上×５間の建物跡である。柱間距離は1.7～3.2mで、主軸方位はN－67°－Wである。柱穴の平面形は円形を主とし、径は28～76cmを測り、確認面からの深さは12～42cmを測る。建物西側には

SB601aに併行する柱間が長い２間以上の目隠し塀等と考えられる柱穴列が検出された。覆土は砂を含む黒褐色シルトで、遺物は未検出である。

また、SB601a掘立柱建物跡と同位置で検出され、重複関係にある**SB601b掘立柱建物跡**は、南側が調査区外に延びるが、梁行5.7m（約19尺）以上、桁行14.5m（約48尺）を測る。3間以上×5間の規模で、主軸方位がN－78°－WとSB601aよりやや西に傾く。柱間距離は2.4～3.6mである。柱穴の平面形はほぼ円形を呈し、径は28cm～60cmを測り、確認面からの深さは20cm～41cmを測る。建物西側にはSB601bに併行する柱間が同規模の２間以上の目隠し塀等と推測される柱穴列も確認された。覆土はSB601bと同質で、遺物は未検出である。

SB601a・bの両建物は、同規模で建物西側に同様の目隠し塀を持つ事等が類似し、新旧は判然としないが、建て替え等が行われたものと推定される。

10　性格不明遺構

A区北半のSD11堀跡南側に隣接して大形で不整形な溝状や土坑状の遺構が検出された。規模や形態から一般的な溝跡や土坑跡には当たらず性格不明遺構として登録した。覆土が堀跡上層と類似し、遺物からも近接した時期や関連性が推定さる。

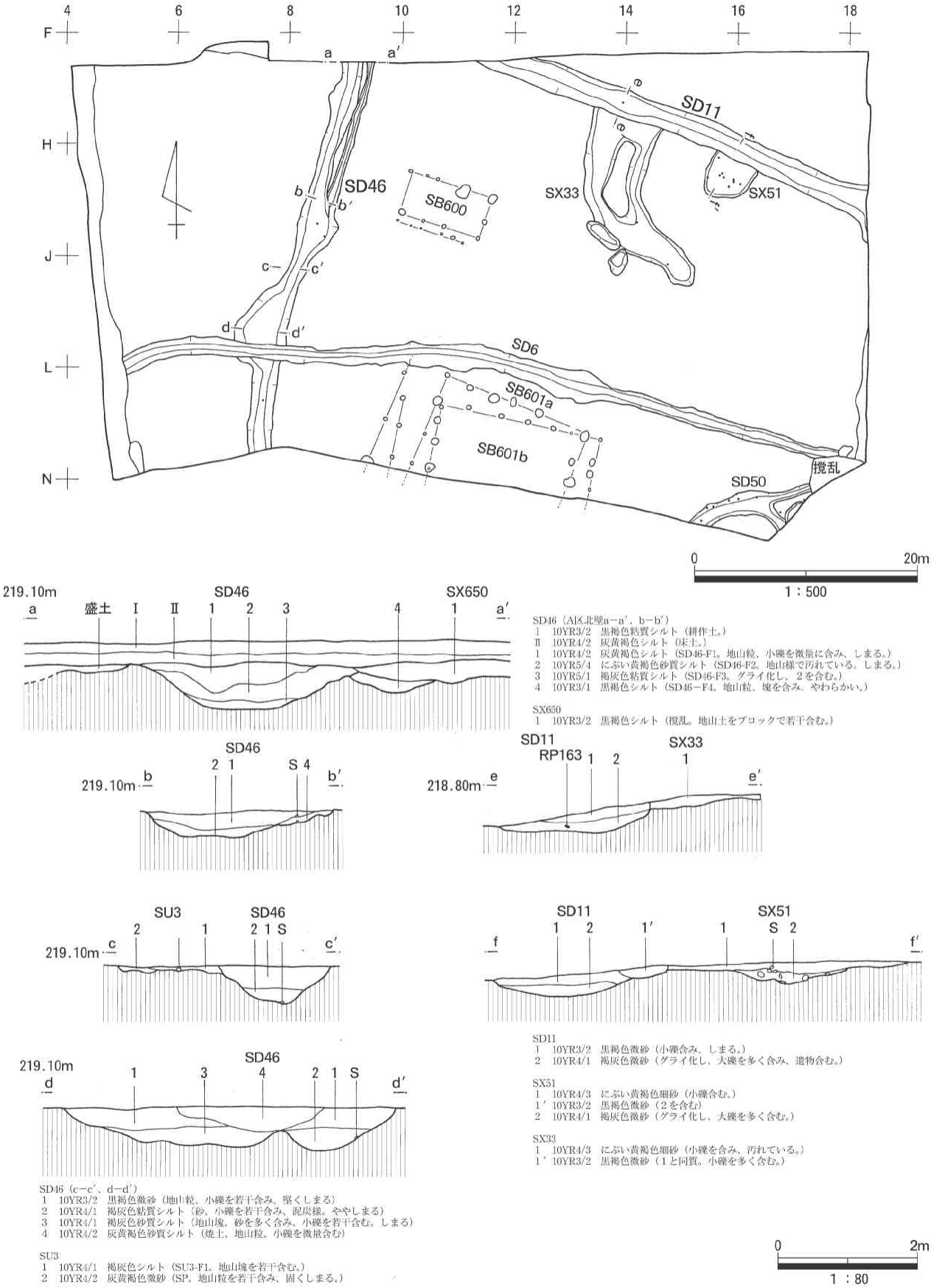
SX33性格不明遺構（第16図）　A区G～J－13～15グリッドに位置し、SD11堀跡を切る。平面形は不整の溝状を呈し、検出長で灼18m、幅はSD11堀跡付近で約６m、突端部が約2.5m前後を測る。中央部で東側に屈曲し、突端部に向けて幅が狭くなり収束する。断面形は全体に緩やかで、底面は平坦であるが、中央部は一段高い台地状を呈する。覆土は地山に類似した汚れたにぶい黄褐色細砂で、近世陶磁器の鉢、擂鉢等が出土する。

SX51性格不明遺構（第16図）　A区H－15～16グリッドに位置し、SD11堀跡を切る。平面形は不整方形で、長軸が420cm、短軸が380cm以上を測る。断面形は緩やかなU字状を呈するが、底面中央部に弧状に浅い凹地が廻る。覆土はSX33と類似し、底面凹地から近世陶磁器の碗、皿、擂鉢等が出土する。

11　井戸跡　井戸跡はA区南半を主に検出され、分布状況から南中央部（SE23･37･38）、南東部（SE39･40･42･64）等に大別される。これらは素掘り井戸を中心に、井戸枠や石組を有するものが各１基確認され、上記３～４基がまとまって検出された。主なものを記す。

SE39井戸跡（第17図）　A区M－14～15グリッドで検出され、平面形はほぼ円形である。長軸が154cm（東西）、短軸が138cm（南北）を測り、確認面からの深さは48cmを測る。井戸枠は側面及び底面に板材が用いられる。断面形は井戸枠部は垂直に立ち上がり、開口部で緩やか開く。覆土は黒褐色微砂～シルトで、出土遺物は未検出である。

SE23井戸跡（第18図）　A区L～M－12～14グリッドで、SD6に切られる。上部削平による石組井戸の下部と判断した。南西部の開口部は楕円形で径は50～70cm、確認面からの深さは20cmを測る。開口部周囲の石組は平面ほぼ円形で、径約1.8mに河原石が白色粘土と共に敷きつめられる。掘り方は円形を基調に径約2.8m前後を測る。開口部覆土は地山土をブロックや斑に含む黒褐色シルトである。また、開口部から石組東側の幅約50cm程の溝跡に石組を介して接合する。石組や掘り方から近世陶磁器の碗、皿、擂鉢、石臼等が出土した。



SD46（A区北壁a－a′、b－b′）
1　10YR3/2　黒褐色粘質シルト（耕作土。）
Ⅱ　10YR4/2　灰黄褐色シルト（床土。）
1　10YR4/2　灰黄褐色シルト（SD46-F1。地山粒、小礫を微量に含み、しまる。）
2　10YR5/4　にぶい黄褐色砂質シルト（SD46-F2。地山様で汚れている。しまる。）
3　10YR5/1　褐灰色粘質シルト（SD46-F3。グライ化し、2を含む。）
4　10YR3/1　黒褐色シルト（SD46－F4。地山粒、塊を含み、やわらかい。）

SX650
1　10YR3/2　黒褐色シルト（撹乱。地山土をブロックで若干含む。）

SD46（c－c′、d－d′）
1　10YR3/2　黒褐色微砂（地山粒、小礫を若干含み、堅くしまる）
2　10YR4/1　褐灰色粘質シルト（砂、小礫を若干含み、泥炭様。ややしまる）
3　10YR4/1　褐灰色砂質シルト（地山塊、砂を多く含み、小礫を若干含む。しまる）
4　10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト（焼土、地山粒、小礫を微量含む）

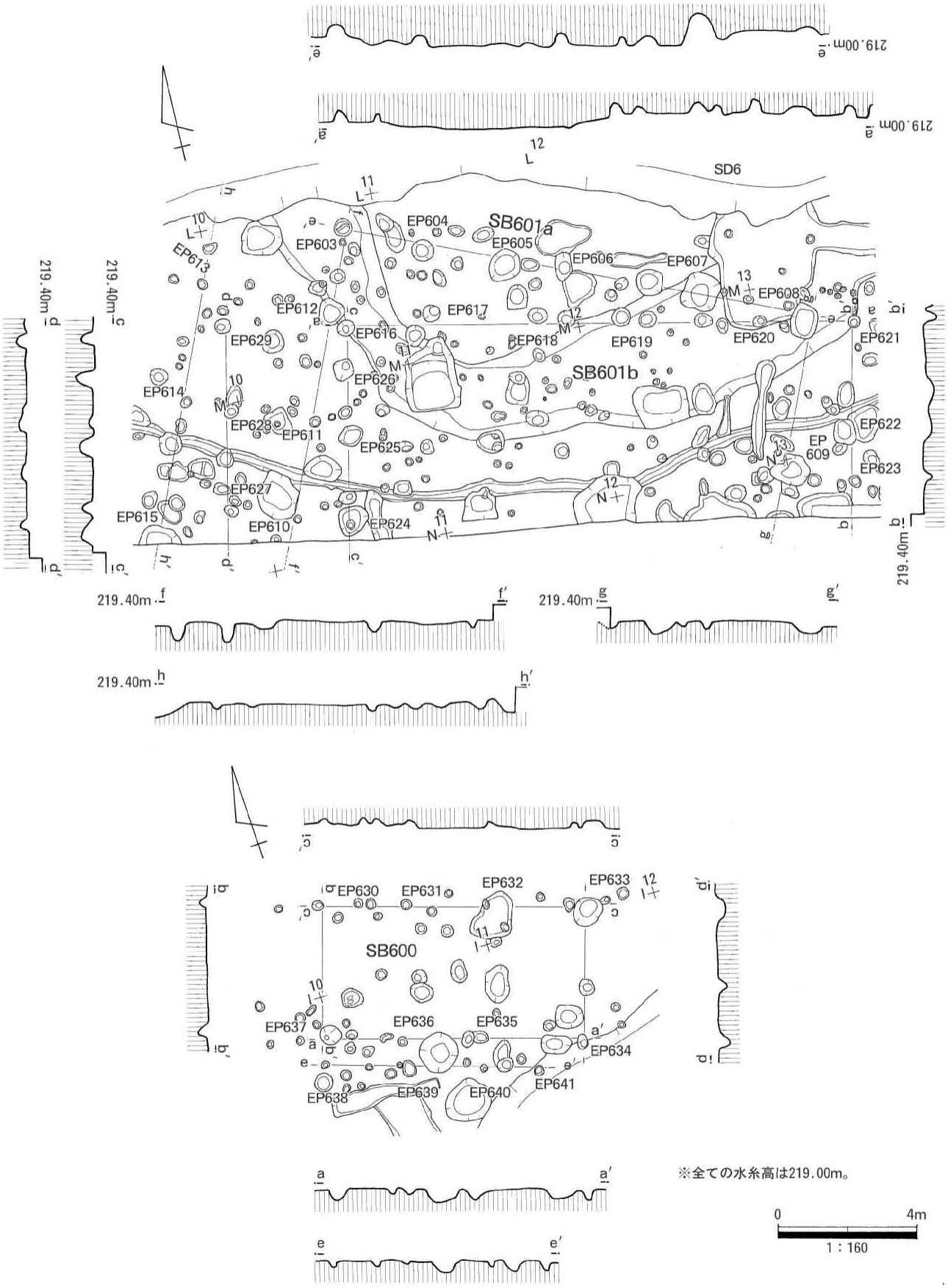
SU3
1　10YR4/1　褐灰色シルト（SU3-F1。地山塊を若干含む。）
2　10YR4/2　灰黄褐色微砂（SP。地山粒を若干含み、固くしまる。）

SD11
1　10YR3/2　黒褐色微砂（小礫含み、しまる。）
2　10YR4/1　褐灰色微砂（グライ化し、大礫を多く含み、遺物含む。）

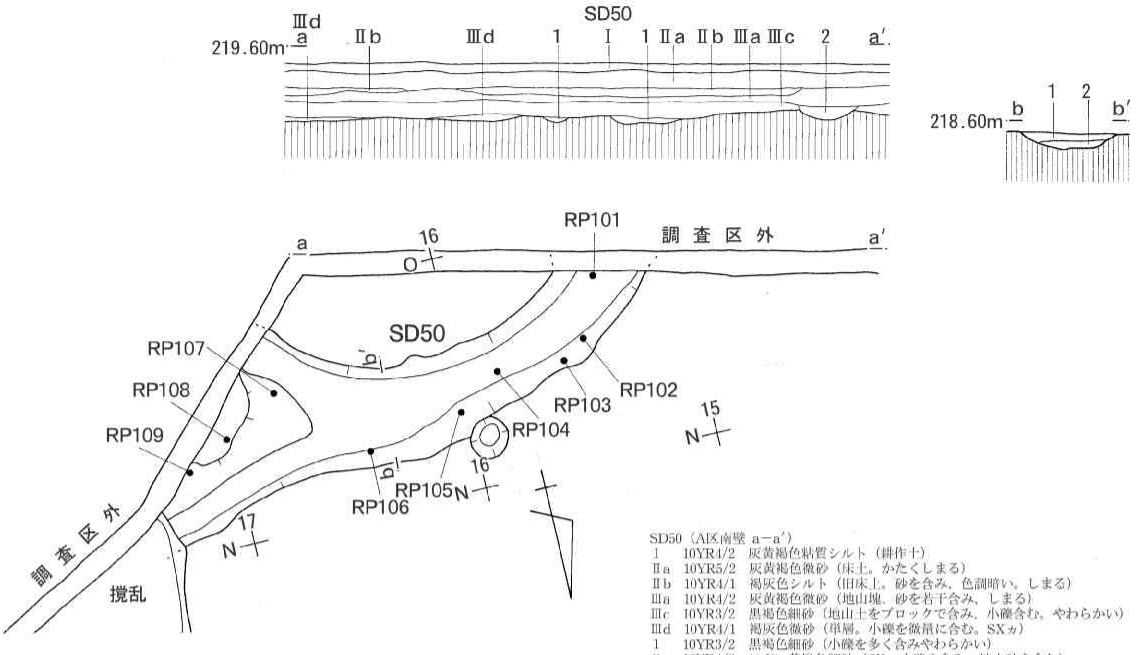
SX51
1　10YR4/3　にぶい黄褐色細砂（小礫含む。）
1′　10YR3/2　黒褐色微砂（2を含む）
2　10YR4/1　褐灰色微砂（グライ化し、大礫を多く含む。）

SX33
1　10YR4/3　にぶい黄褐色細砂（小礫を含み、汚れている。）
1′　10YR3/2　黒褐色微砂（1と同質。小礫を多く含む。）

第14図　SD11・46堀跡

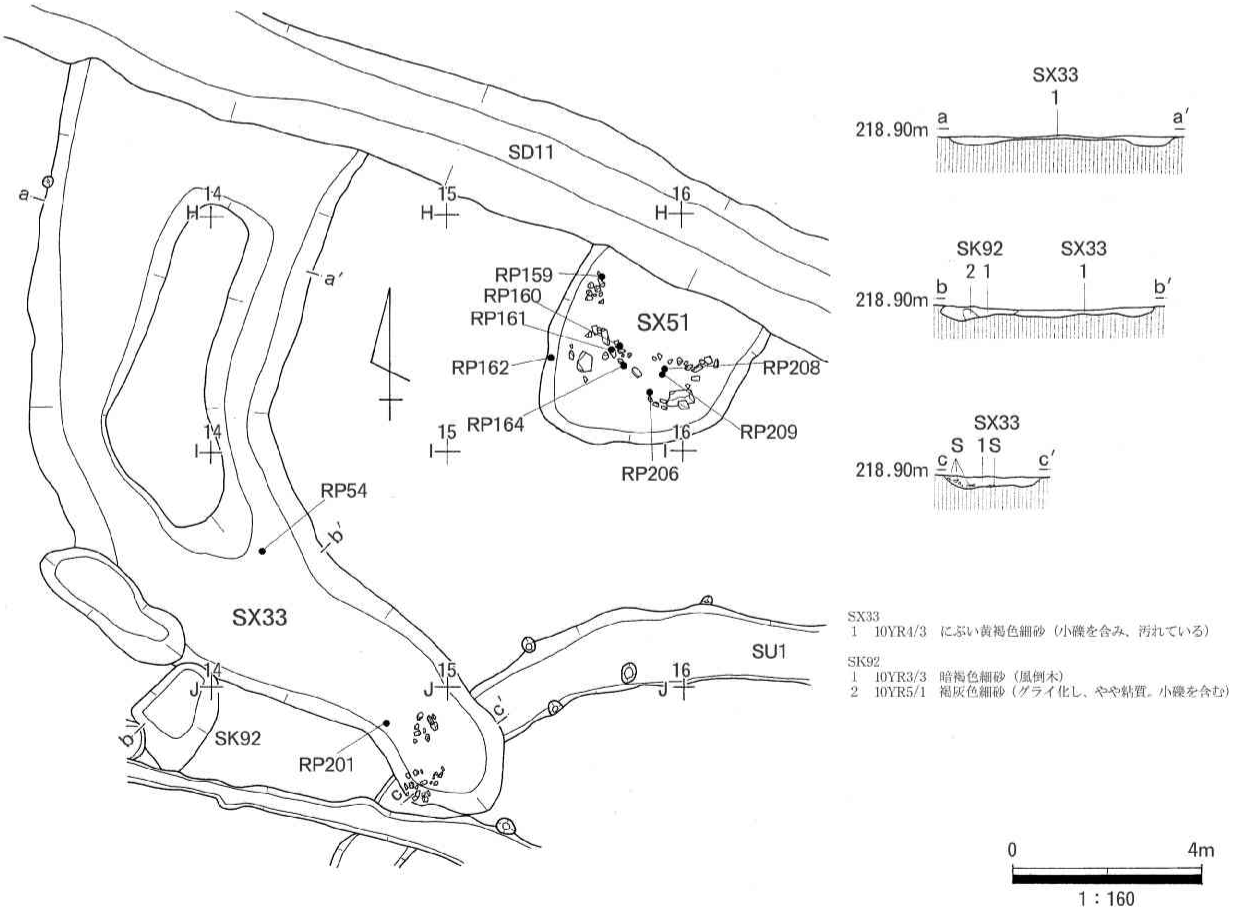


第15図　SB600・601a・b掘立柱建物跡



SD50（AIX南壁 a−a′）
1　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト（耕作土）
Ⅱa　10YR5/2　灰黄褐色微砂（床土。かたくしまる）
Ⅱb　10YR4/1　褐灰色シルト（旧床土。砂を含み、色調暗い。しまる）
Ⅲa　10YR4/2　灰黄褐色微砂（地山塊、砂を若干含み、しまる）
Ⅲc　10YR3/2　黒褐色細砂（地山土をブロックで含み、小礫含む。やわらかい）
Ⅲd　10YR4/1　褐灰色微砂（単層。小礫を微量に含む。SXヵ）
1　10YR3/2　黒褐色細砂（小礫を多く含みやわらかい）
2　10YR4/3　にぶい黄褐色細砂（SK。小礫を含み、地山砂を含む）

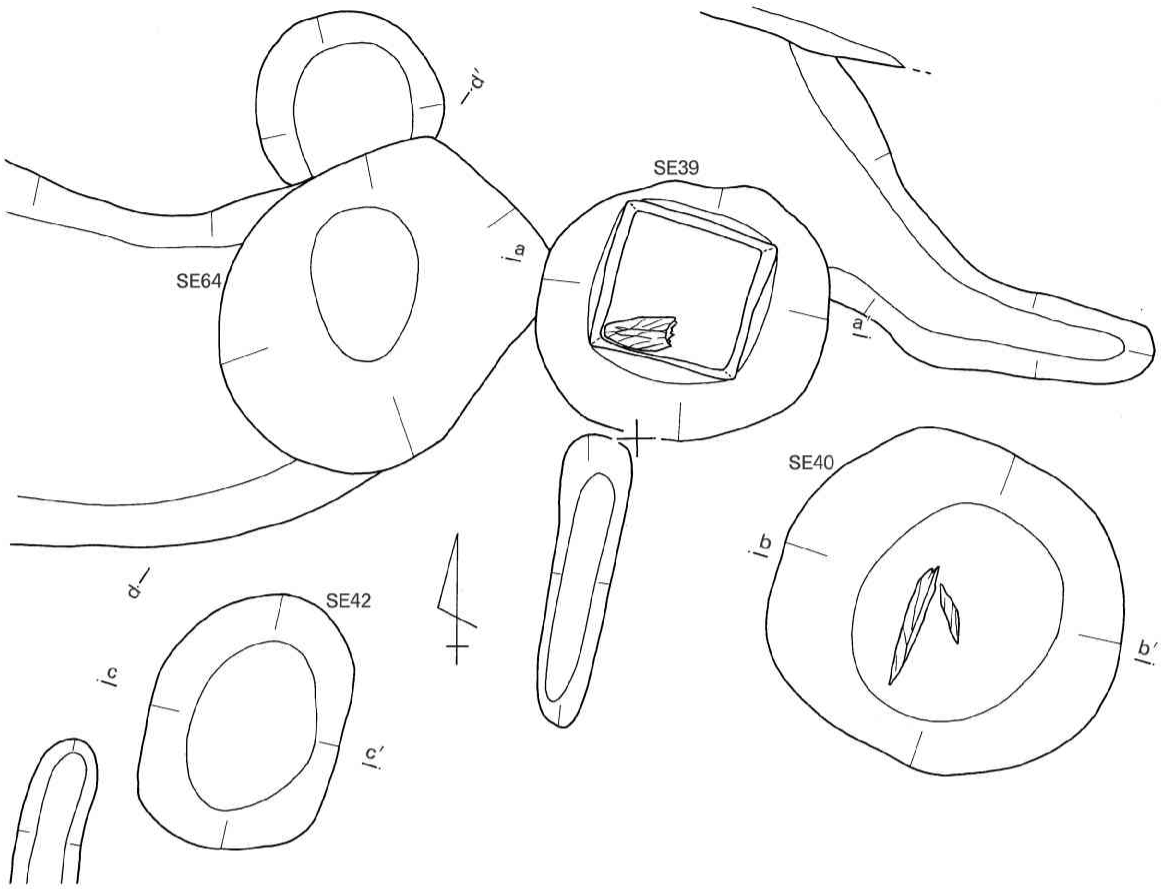
SD50（b−b′）
1　10YR5/2　灰黄褐色砂質シルト（地山粒、小礫を含み、遺物を含む。固くしまる。）
2　10YR4/1　褐灰色粘質シルト（地山粒、小礫を微量に含み、粘質。やわらかい。）

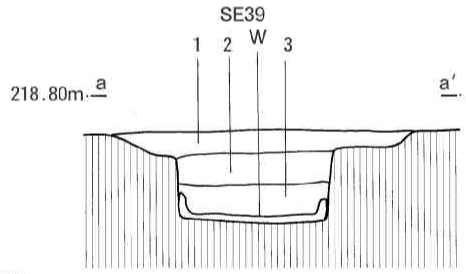


SX33
1　10YR4/3　にぶい黄褐色細砂（小礫を含み、汚れている）

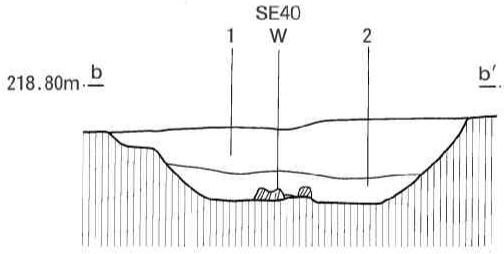
SK92
1　10YR3/3　暗褐色細砂（風倒木）
2　10YR5/1　褐灰色細砂（グライ化し、やや粘質。小礫を含む）

第16図　SD50溝跡・SX33・51性格不明遺構

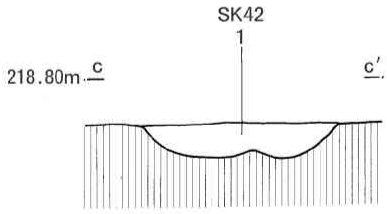




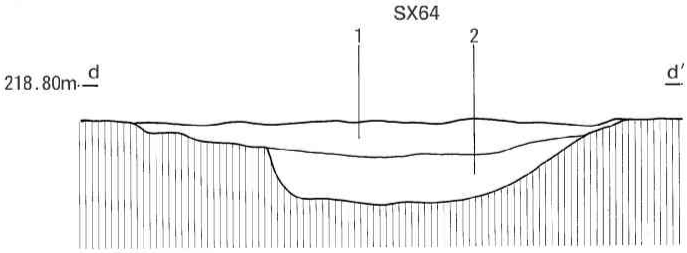
SE39
1　10YR4/2　灰黄褐色微砂（小礫、地山粒を若干含み、しまる。）
2　10YR3/2　黒褐色微砂（地山塊をブロックで含み、しまる。）
3　10YR2/2　黒褐色シルト（炭化粒、有機物を含み、粘質。床面に木枠。やわらかい。）



SE40
1　10YR4/2　灰黄褐色微砂（小礫、地山土を若干含み、しまる。）
2　10YR2/2　黒褐色シルト（炭化粒、有機物を含み、粘質。床面に木枠片。やわらかい。）



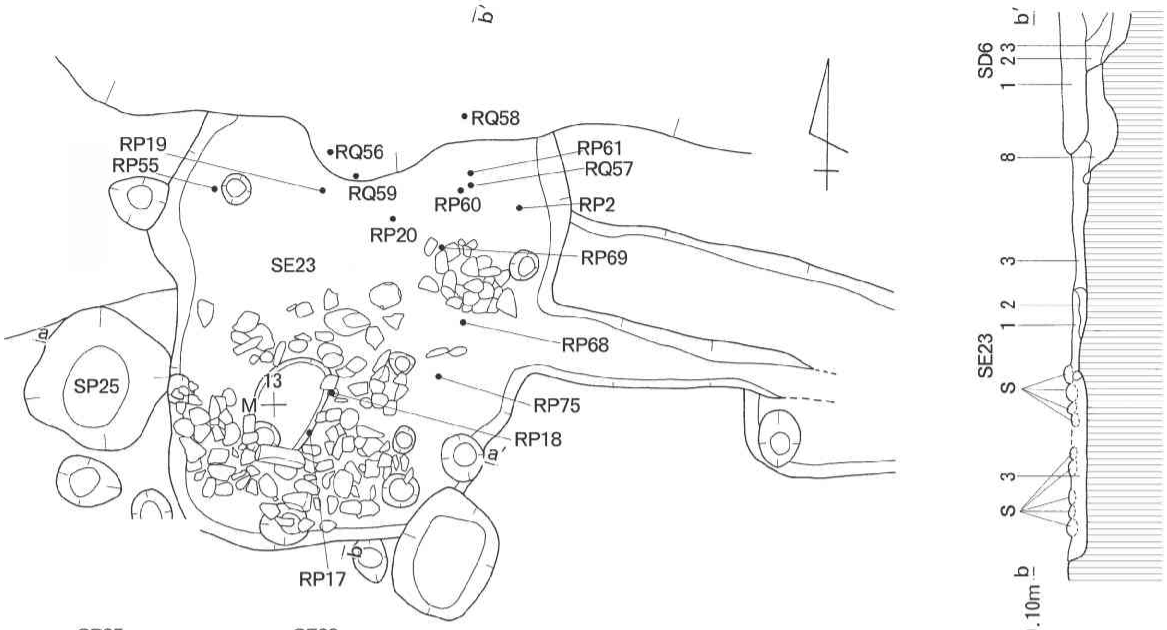
SE42
1　10YR3/2　黒褐色微砂（地山塊をブロックで含み、しまる。）

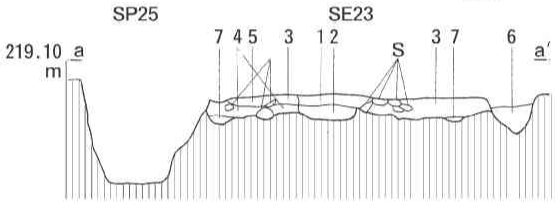


SE64
1　10YR5/2　灰黄褐色微砂（地山粒、小礫を若干含み、しまる。）
2　10YR4/1　褐灰色砂質シルト（地山粒、小礫を微量に含み、粘質。泥炭様。ややしまる。）

0　1m
1：40

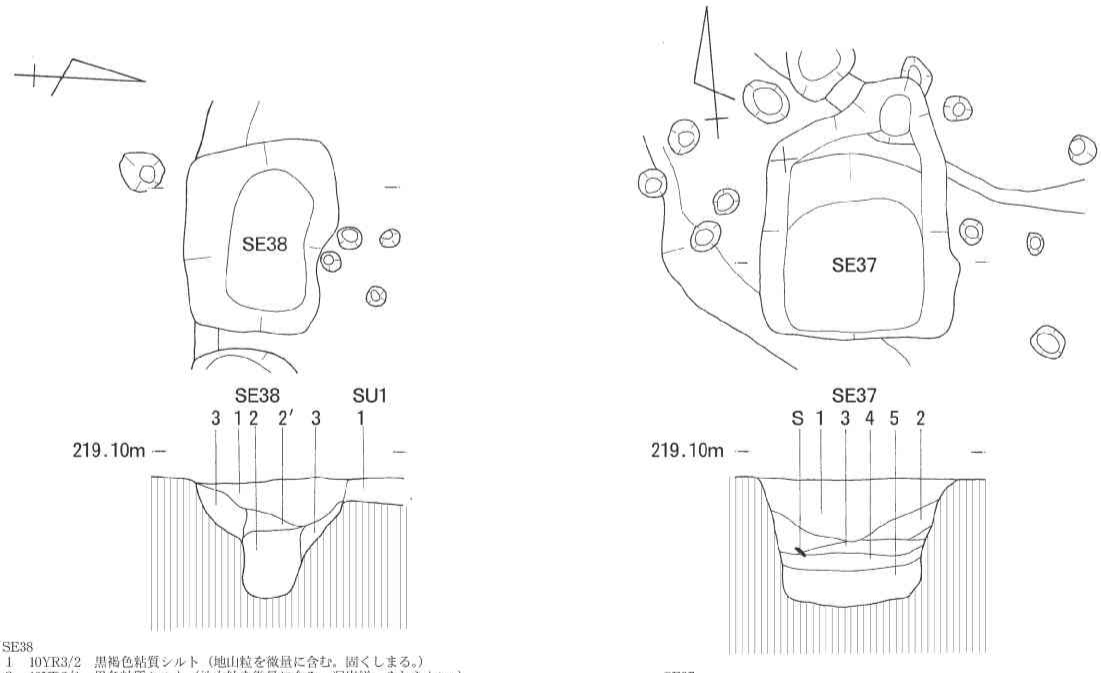
第17図　SE39・40・42・64井戸跡





SE23
1　10YR6/2　灰黄褐色粘質シルト（2を単層。ブロックで含む。かたくしまる）
2　10YR3/1　黒褐色シルト（1を斑状に含む。やわらかい）
3　10YR4/2　灰黄褐色シルト（川原石や砂、白色粘質土を含み、かたくしまる）
4　10YR4/1　褐灰色シルト（川原石、地山粒を若干含み、やわらかい）
5　10YR4/2　灰黄褐色微砂（上面に10YR6/6明黄褐色シルト地山砂を縞状に含み、かたくしまる）
6　10YR4/2　灰黄褐色シルト（地山土をブロックで多く含む）
7　10YR3/1　黒褐色シルト（SP。地山粒を若干含む。しまる）
8　10YR3/2　黒褐色微砂（地山土を若干含み、砂を含む）

SD6
1　105/3　にぶい黄褐色微砂（白色粘土をブロックで含む。かたくしまる）
2　10YR3/2　黒褐色シルト（地山粒を微量に含み、単層）
3　103/3　暗褐色微砂（粘土含む。やわらかい）



SE38
1　10YR3/2　黒褐色粘質シルト（地山粒を微量に含む。固くしまる。）
2　10YR2/1　黒色粘質シルト（地山粒を微量に含み、泥炭様。やわらかい。）
2′　10YR2/1　黒色粘質シルト（2と同質。1を若干含み、しまる。）
3　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト（地山塊を多く含み、砂を含む。）

SU2
1　10YR5/3　にぶい黄褐色シルト（SU2-F3。地山様で汚れている。やわらかい。）

SE37
1　10YR4/2　灰黄褐色微砂（小礫若干含み、やわらかい。）
2　10YR4/3　にぶい灰黄褐色シルト（1と地山土の混合土。やわらかい。崩落土様。）
3　10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト（地山塊、砂を多く含み、やわらかい。）
4　10YR3/2　黒褐色シルト（地山粒を微量に含む。やわらかい。）
5　10YR4/1　褐灰色粘土（グライ化。木片を含む。）

0　2m
1：60

第18図　SE23・37・38井戸跡

Ⅴ　出土遺物

本遺跡から出土した遺物は整理箱にして約32箱である。これらは古墳時代と中近世の遺物に大別される。古墳時代は周溝墓や竪穴住居、土坑から主に古墳時代前・中～後期の土師器が出土し、土坑墓からは骨片も出土した。中近世は堀跡や溝跡等を主に中近世陶磁器、古銭、砥石、石臼が出土した。また、調査区内に中世板碑が１基建っていた。他に古代の須恵器片が僅かに出土した。以下に出土遺物について時代毎に概述する。

１　古墳時代の土器

古墳時代の遺物は本遺跡の主体である周溝墓や土器棺墓の墓域、竪穴住居や土坑等の居住域から同中期後葉を中心とした所謂「南小泉式に後続する」土師器等が出土し、前者の一部が若干古い様相を示す。最も出土量の多い坏類は、口縁部が・体部が内弯するもの（A類）、口縁部が小さく外傾するもの（B類）、口縁部が大きく外反するもの（C類）、口縁部が屈曲し、内傾・直立するもの（D類）、口縁部が直立気味に外傾、直立、内弯する有段のもの（E類）、口縁部が外反し、口縁部と体部の境に稜を有するもの（F類）に大別される。D・E類は須恵器模倣と考えられ、次期に主体のF類と共に新相であろう。更に底部形態によって窪底（１類）、扁平な平底風丸底（２類）、丸底（３類）に細分される。以下に坏類を中心に主な遺構毎に概述し、その他器種については特徴的なものを列記する。

SU1周溝墓出土土器（第19図）　周溝墓群の中では最も多く土器が確認され、周溝の西辺を除く床面直上を中心に出土したが、大半が小破片で出土したため実測可能なものは少ない。坏・高坏・甕片が出土した。

坏はB～D類が出土し、19－3は口縁部内面に弱い稜を持つC類で、口縁部内外面ハケメ、体部内外面ミガキを施す。19－2は半球状の体部のB1類で、口縁部は内面が肥厚し僅かに外傾する。内外面ミガキである。19－1はD3類で口縁部屈曲し内傾するタイプで、須恵器模倣と考えられる。口縁部横ナデ、体部はミガキ調整で、特に外面は幅広のミガキを施す。

高坏（19－4）は坏部のみ出土し、直線的に大きく開く形態で坏部下端に稜を有する。外面は細かなミガキ調整で、内面はハケメ痕跡が残る。

甕は小型（19－5）、中型（19－6）が認められ、球形や球形に近い下膨れする器形と判断される。両者とも口縁部は横ナデ、体部外面は19－5はハケメの後に散発的にミガキ、19－6は体部上半全体にケズリの後、ミガキを施す。19－7は甕口縁部片で、内外面ハケメを施し、口唇部をやや引き出す。19－8・9は底部片で底径７㎝前後を測り、内外面ナデやハケメ調整である。

時期は一部床面の高坏や甕の器形から同中期中葉頃と判断され、構築時代を表わすものであろう。他の坏類は全体にこれより新相で同中期後葉～後期初頭に至る過渡的な土器群と推測され、19－1・2は完形単品で正位出土する事から古墳祭祀等に関わるものとも推測される。

SU2周溝墓出土土器（第19図）　周溝の重複関係からSU1・3を切る周溝墓で、覆土中より土師器小片が散見された。坏・高坏・須恵器片が出土した。

坏（19－10）はC類で、口縁部が肥厚し、内面の屈曲部に稜を作出する。内外面ミガキを施

す。19－11は中空の高坏脚部の裾部と推測された。19－12は須恵器片で小破片のため器種が判然としない。出土位置等から中近世の撹乱により調査区で若干散見される古代の須恵器が混入した可能性がある。全体的には坏の肥厚する口縁部や中空柱状の可能性のある高坏脚部から同中期後葉～後期初頭の土器群と判断される。

SU3周溝墓出土土器（第19図）　周溝床面から中型の壷（19－13）の体部片が1点出土した。外面はミガキ、内面はケズリを施す。体部球形であろう器形から同前～中期頃としておく。

SU4周溝墓出土土器（第19図）　周溝床面直上の覆土から坏（19－14）片が1点出土した。内面黒色処理されたF類で、やや扁平で小振りの坏で、体部外面は不明瞭なケズリを施す。時期は口縁部と体部の境の稜が器高中位と考えられる事や黒色処理の技法等から同中期末葉～後期初頭でも後者に近い段階であろう。

SU5周溝墓出土土器（第19図）　周溝床面から坏（19－15）片が１点出土した。扁平で器高の低いA類で内外面ミガキ調整で、外面体部下端はケズリの後ミガキが施される。時期は扁平で丸底であろう器形から同中期後半頃と考えられる。

SU156土器棺墓出土土器（第20図）　SU156土器棺墓からは口径20㎝、器高約53㎝、最大径42㎝の大型の複合口縁の土師器壷（20－1）と、壷口縁部に蓋として転用される最大径23㎝の中型の土師器壷下半部（20－2）が斜位で出土した。20－1は外面全体に幅広のミガキを施し、内面は摩滅が著しくケズリ痕跡が一部認められるのみである。20－2は内外面ハケメ調整を施す。時期的には20－1の丁寧な作出の複合口縁形態、やや下膨れ状の体部形から同前期後葉と比定される。

ST503竪穴住居跡出土土器（第21図）　貯蔵穴と考えられるEP床面から坏（21－1）完形品が１点出土した。口縁部が直立気味に外傾するE3類で、内外面ミガキを施す。時期は須恵器模倣の同中期後葉～後期初頭と推測される。

ST504竪穴住居跡出土土器（第21図）　床面を主に坏・甕等が出土した。坏類は21－2がB3類で、外面口縁部が横ナデ後、横ミガキ、体部がケズリで、内面が口縁部のみ横ナデし、その後口～体部までミガキを施す。他の坏類は全てE類で、口縁部が直立気味に内傾（21－4）、直立（21－3：E2類）、外傾（21－5）するものがある。内外面の調整は、内面は全てミガキを施すが、外面口縁部は21－3が横ナデ、21－2・4は横ミガキである。外面体部もケズリを主に体部上半にミガキが及ぶもの（21－3・4）もある。

時期は坏類にE類が主体を占める事から同中期後葉～後期初頭の時期が推定される。

ST506竪穴住居跡出土土器（第21図）　床面から坏類が出土した。坏（21－14・15）は黒色処理されたB類で、特に21－15は内外面ミガキ調整で黒色処理される。21－14は外面口縁部が横ナデ後、横ミガキ、体部がケズリで、内面はミガキ調整である。

時期は黒色化が進む同中期末葉～後期初頭に至る段階と考えられる。

SK505土坑出土土器（第21図）　土坑の床面直上から一括して坏や高坏が出土した。坏類（22－8～10）は全てA類である。21－9はやや平底風のA2類で、内外面ミガキ調整である。21－8・10は体部外面がケズリで、21－８は口縁部を横ナデし、内面は両者ミガキを施す。高

坏（21－11）は脚部片で短脚中実で丁寧なミガキを施す。

時期的には高坏脚部の短脚化から同中期後葉～後期初頭の一群と推定される。

SK509土坑出土土器（第21図）　ST504の貼床下で検出された土坑の床面出土で、壷（21－13）と甕（21－12）が出土した。21－13は小型壷で、やや肩の張る扁平な器形で内外面丁寧なミガキを施す。21－12は長胴形の甕で内外面ハケメ調整で全体に厚手である。

時期は長胴形の甕等から同中期後半と考えられる。

SX53落ち込み状遺構出土土器（第22図）　土器溜まり状の落ち込みから半完形で横位で甕（22－３）が１点出土した。口径約17cmの体部球形で、摩滅が著しいが内外面ハケメを施す。時期は体部器形から同中期頃と判断される。

SX73落ち込み状遺構出土土器（第22図）　床面から坏・高坏が出土した。坏（22－13・14）はA2類で、22－13は外面口縁部が横ナデ後に散発的に横ミガキを施し、外面体部や内面はミガキを施す。22－14は外面全体にケズリを施した後、横ミガキによりケズリ痕を消している。内面はミガキを施す。高坏（22－15）は短脚の脚部片であるが、脚部上半が中実化せず坏部に至るタイプである。時期的には高坏脚部等から同中期末葉～後期初頭と推測される。

また、隣接するSX74の床面からもF類の同様の坏が出土し、近接した時期が推定される。

SP71ピット出土土器（第22図）　覆土より高坏（22－12）が完形で出土した。短脚中実の脚部で、坏部はF類で坏部中位の口縁部と体部の境に稜を有し、口縁部が外反する器形である。内外面丁寧なミガキを施す。時期は坏部の形態から同中期末葉～後期初頭と考えられる。

これはSG7河川跡を切る方形状のSX54落ち込み遺構からも破片（22－7～9）で散見され、22－４のF類の坏も出土する事から同時期の所産と考えられる。

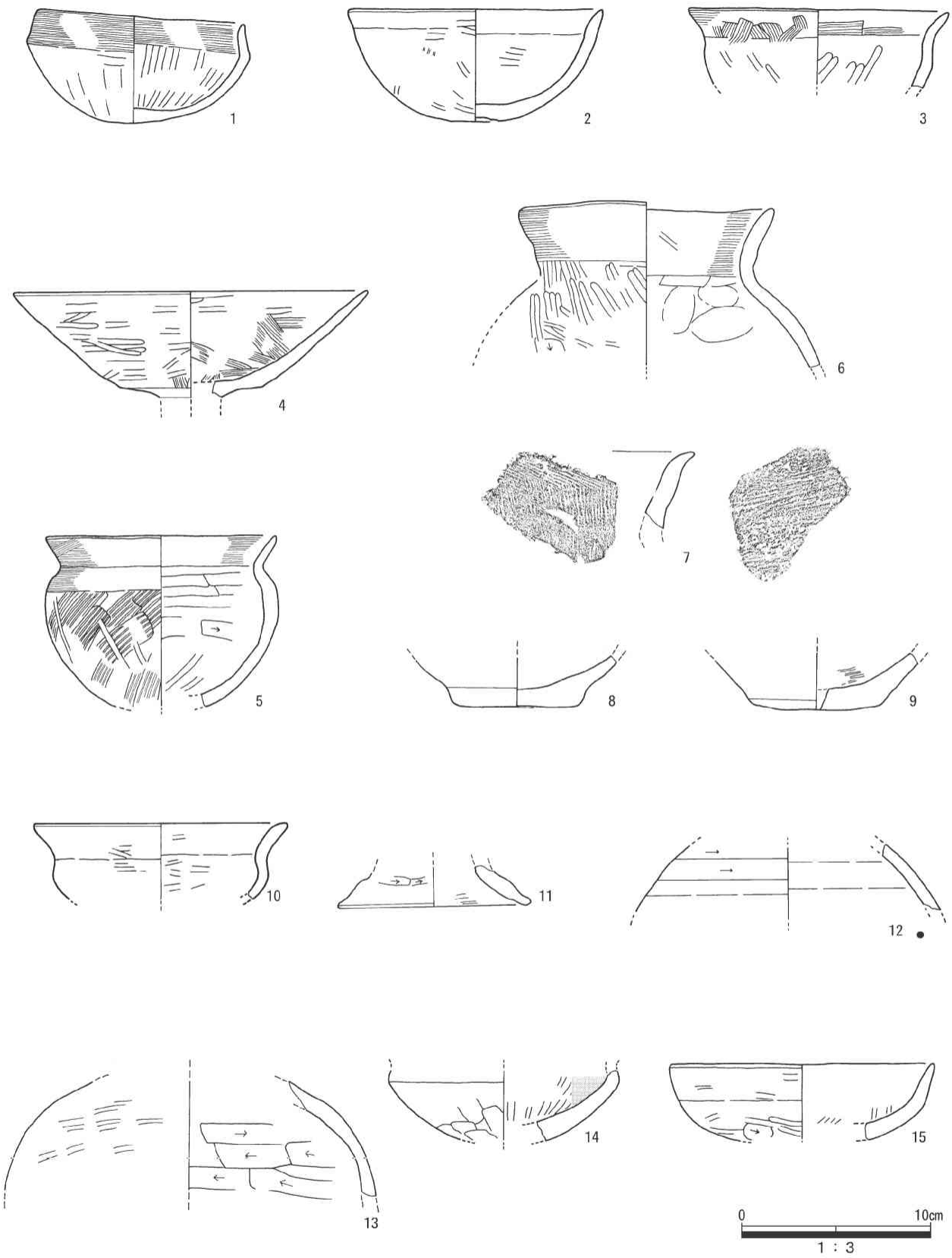
SD56溝跡出土土器（第22図）　SD7河川跡に併走する溝跡覆土中から坏（22－10）片が出土した。F類で摩滅が著しいが内面ミガキを施す。時期は器形や未黒色処理である事から同中期末葉～後期初頭と推測される。

２　古墳時代の人骨

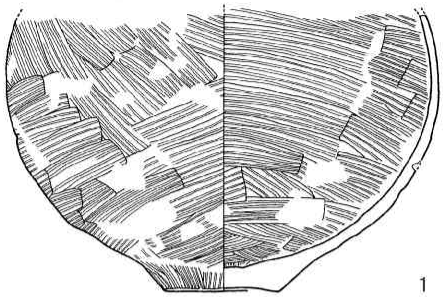
SU156土器棺墓に近接する５基の土坑墓中、SK12・14より人骨が出土した。不規則な人骨の出土状況から両者とも洗骨後に埋め戻された状況が看取られた。鑑定の結果、長骨、尺骨、指骨等が確認されたが、欠損が著しく部位や性別、年令等は分からなかった。また、骨の状態から火を受けた可能性も窺え、炭素年代測定に影響する可能性も指摘された。SK14では人骨に伴い土師器小片が出土し、分布状況や覆土等から古墳時代の土坑墓と判断した。

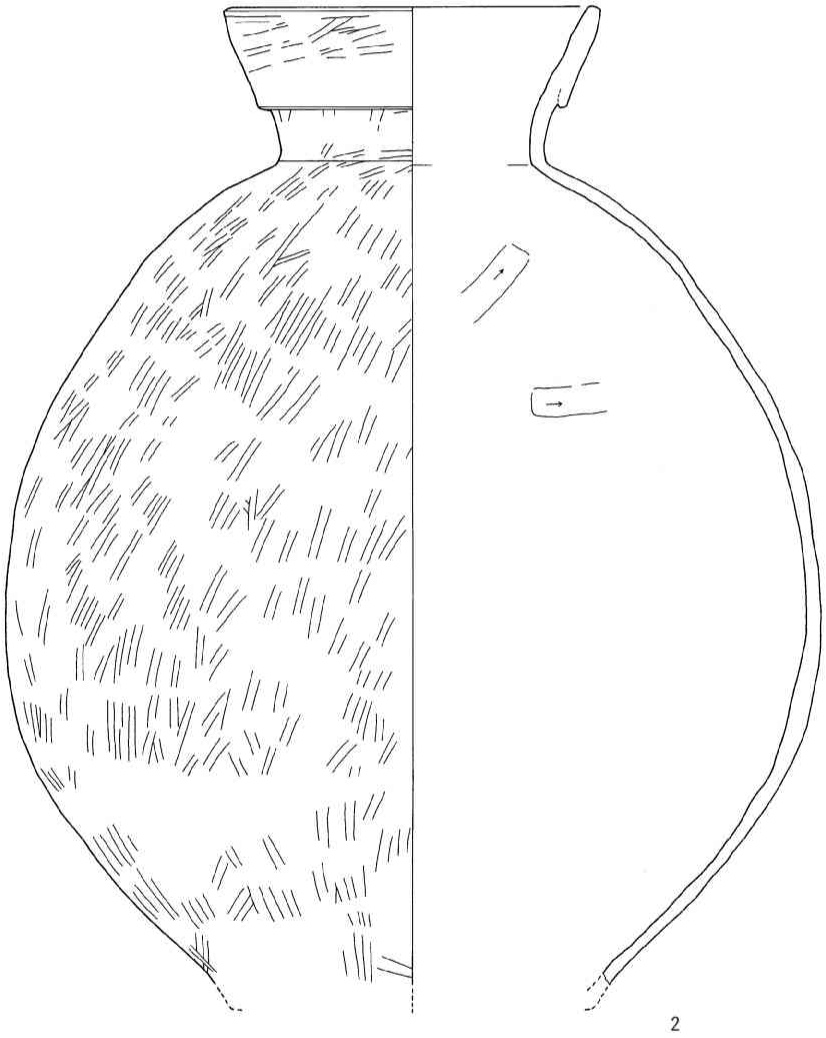
SK12土坑墓出土人骨（第11図）　長軸約60cmの小判形の土坑の覆土上層の下位に長骨、尺骨、指骨が出土した。一部長骨の骨端も認められ、最も長い長骨で7.5cm、幅2.5cmを測る。人骨に伴い直径１cm程の炭化物も出土し、覆土下層には骨粒が僅かに散見された。

SK14土坑墓出土人骨（第11図）　長軸約80cmの円形の土坑の床面に長骨、尺骨、指骨が出土した。最も長い長骨で13cm、幅は2.5cmを測り、原因不明の沈線が長軸に直交して３～５mm間隔で縞状に認められる。



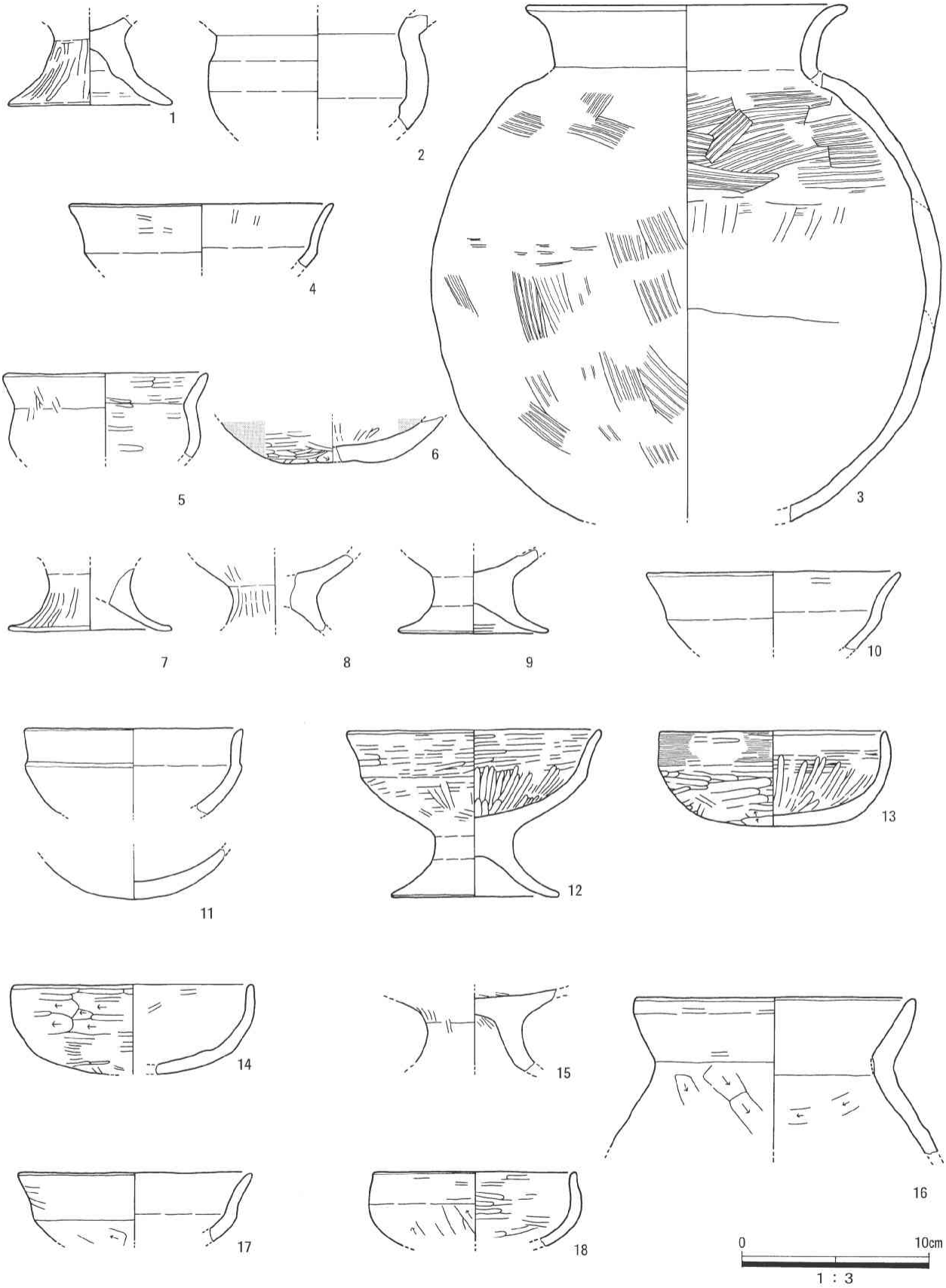
第19図　遺物実測図（１）





第20図　遺物実測図（２）

第21図　遺物実測図（３）



第22図　遺物実測図（４）

3　中～近世の土器・陶磁器

中～近世の遺物はＡ区の堀跡、溝跡を中心に陶磁器、砥石、古銭、石臼等が出土した。一部中世の遺物のみ出土する遺構もあるが、大半が近世の遺物を伴うため一括し、中～近世の遺物として主な遺構毎に産地や時期が判断できるものを中心に列記する。

SD11・46堀跡出土土器（第23図）　SD11・46は直交する堀跡と考えられ、覆土は両者とも上・下層に大別される。土師質土器の内耳土鍋、瓦器の火鉢、珠洲系陶器の甕、瓷器系陶器の擂鉢、国産陶器の碗、鉢、擂鉢、甕、壷・肥前系磁器の染付の碗等が出土した。特に床面～下層の泥炭層で主に中世の遺物が散見され、上層では中～近世の陶磁器等が出土した。

下層～床面資料として土師質土器の内耳土鍋が、SD46床面　(23－11)、下層中（23－10)、ＳＤ11下層上（23－1）で確認された。全て外面の煤付着が著しく全体に薄手である。23－11は口縁部から体部の屈曲点にかけての内面に取手が張り付けられ、下部の取り付け部は内側にへこみ、上側の取り付け部との間は外側に張り出す形態である。23－10の口縁部径は推定値で25㎝程を測る。珠洲系陶器ではＳＤ46床面から甕（23－14）の肩部片が出土した。

上層からはSD11を主に、瓷器系の米沢市戸長里産の太く幅広い卸し目が粗に入る擂鉢（23－9)、米沢市成島産の口径19㎝前後の寸胴形の鉢、内外面灰釉が施される肥前系陶器の碗（23－4）等が出土した。他に産地不明の陶器で、外面体部下半まで鉄釉が施される碗（23－2)、内外面に緑釉が施される鉢（23―3)、玉縁状の口縁で高台を除き内外面に灰釉が施され、見込み部に高台底面に「イセカ」の墨書がある鉢（23－12・25－3)、土器では瓦質で口縁部に格子目のある火鉢（23－6）等が出土した。

時期的には土器組成等から概ね下層が15～16世紀代、上層が17～19世紀中葉と考えられる。

SD50溝跡出土土器（第24図）　溝跡の覆土上層より土師質土器の内耳土鍋（25－1～4）片が出土した。胎土や焼成が異なるが、24－1・3は口径推定値が約33㎝内外を測る。全て外面の煤付着が著しく、取手がつくもの（24－1～3）は23－11と同様の形態である。時期は内耳土鍋の主体の16世紀代としておく。

SX51性格不明遺構出土土器（第24図）　円形の落ち込み状の遺構床面や覆土下位より国産陶器の碗、香炉、擂鉢、肥前系磁器の染付皿、椀等が出土した。24－５は内外面灰釉を施し高台を無釉に作る肥前系の陶器碗で、全体に薄手で、高台は断面角形に鋭く削り、高台内を平滑に仕上げる。見込みに山水文を描く。

染付は、高台付近を除く内外面に灰釉を刷毛目で施す皿（24－６）・小皿（24－７）で、両者見込みを蛇の目状に釉剥ぎし、高台は内反り状を呈する。24－６は内面に折松葉文を描く。他に図示しないが、内外面に丸に菊花氷裂文、梅木文を描く碗が出土した。

24－8は産地不明の底部を除く外鉄釉を施す香炉で、見込みに焼成時の高台痕跡が残る。

時期的には全体に新相で、染付の皿形態や文様等から18～19世紀中葉と推測される。

SX33性格不明遺構出土土器（第24図）　覆土下層から産地不明の鉢、擂鉢が出土した。24－9は口縁端部を内方向に折り返す鉢で、内外面に緑釉を施す。外面肩部に方形の張り出しが連続すると考えられる。

時期的には口縁端部の形態等から17世紀後半～18世紀中葉と推定される。

SE23井戸跡出土土器（第24図）　河原石で囲まれた井戸跡の下部と判断した遺構の掘方を主に産地不明陶器の碗、擂鉢、肥前系磁器の染付の碗、皿等が出土した。染付は24－10が小椀で、外面雪輪草花文、高台内に崩れた「大明年製」が描かれる。皿では24－11が花唐草文、24－12は斜格子文が内面に描かれる。24－12の見込みは蛇の目釉剥ぎする。他に二重網目文の碗が出土した。

他に図示しないが、河原石下から産地不明の口縁端部を内方向に折り返す擂鉢小片が出土した。全体的な時期は、一部古相も認められるが18～19世紀中葉と推定される。

SD6溝跡出土土器（第25図）　中～近世の堀跡を切る本遺跡で最も新しい遺構の一つで出土遺物も多い。覆土中より近代の遺物が出土するが、中～近世の遺物も混在し、輸入磁器の青磁、肥前系磁器の染付の碗、皿、産地不明陶器の碗、鉢、擂鉢、徳利、砥石、石臼等が出土した。特徴的なものを記す。

青磁は25－2が輸入磁器と推測される碗で、内外面釉し外底を無釉で残す高台である。高台はやや低い断面四角形で、体部は緩やかに立ち上がる。15～16世紀と推測される。25－1は小椀で、輸入磁器に器形を求められない事から国産の磁器と判断され、貫入が生じる。

染付は25－5の外面唐草文、内面花唐草文の皿で、17世紀末葉～18世紀中葉であろう。

他に、25－6は肥前系の白磁の戸車で、使用によりやや扁平で、19世紀代と推測される。産地不明の近世陶器では、25－4が瓦質の鉢で、肥厚した玉縁状の口縁で外面口縁下に印花文が施される。25－7は徳利で、外面に鉄釉が底部付近まで施され、底部に「一口」の墨書がある。

その他の遺構・遺構外出土土器（第25・26図）　肥前系磁器の染付では、25－14がSX64覆土中の外面唐草文、内面唐草文輪花の皿で、17世紀末葉～18世紀中葉の所産と推測される。26－1は厨子型板碑が設置される畦畔表土から近現代の遺物と共に出土した外面唐草文、内面雪持笹竹文の皿で、蛇の目凹形高台を呈し、19世紀代と考えられる。

他にグリッドから26－18は内耳土鍋の底部で底径は約18cmを測り、16世紀頃であろう。26－3は朝鮮系陶器の可能性のある碗で、糸切り無釉の蛇の目高台底部と見込みに３ケ所の砂目痕があり、16世紀代である。26－2はA区東半の整地層中の擂鉢で近世代であろう。

４　古銭（第26図）

古銭は、永楽通宝（26－６：初鋳1408年）、寛永通宝（26－４・５：初鋳1656年）が出土した。

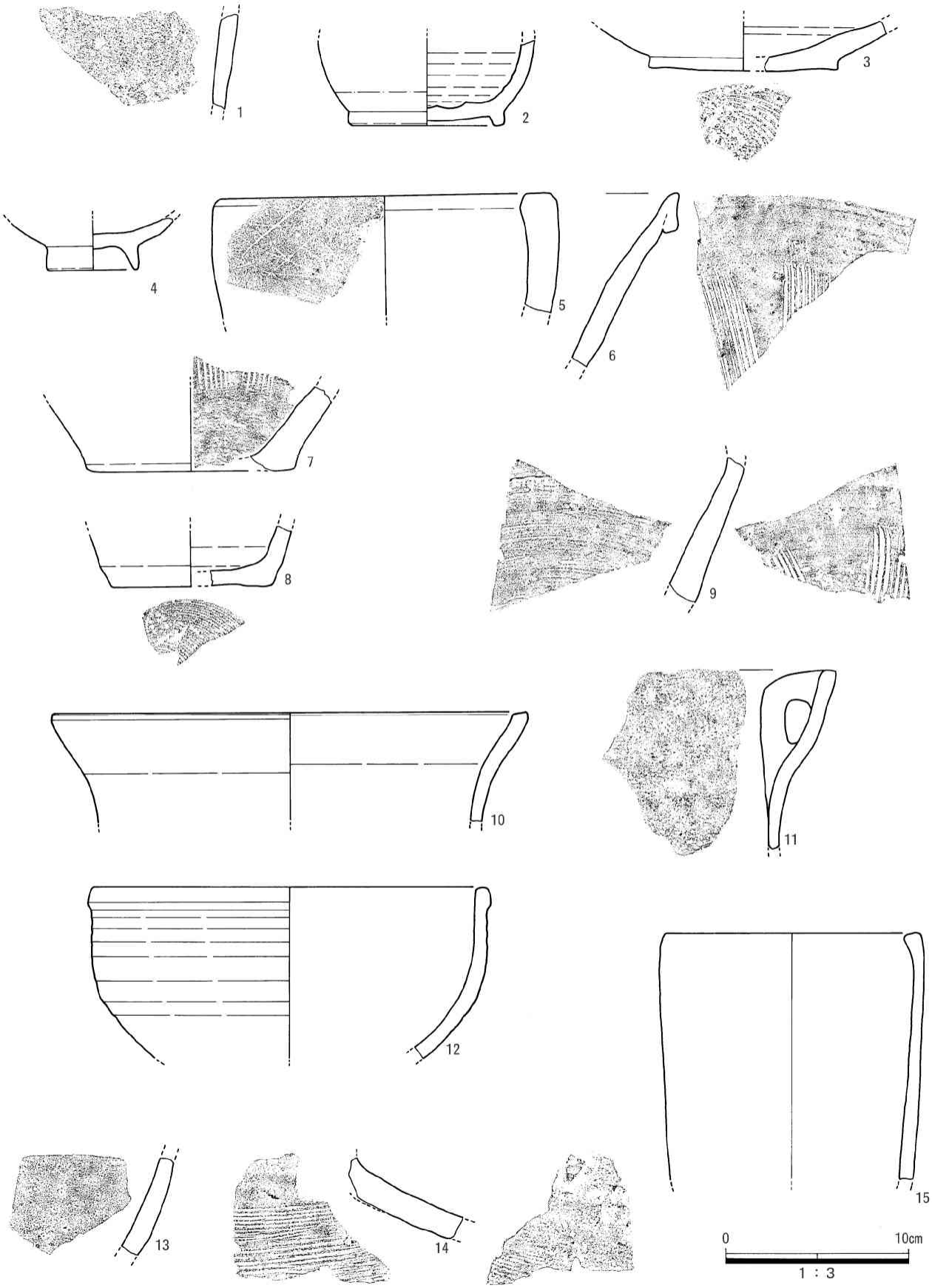
５　石製品（第25・26図）

砥石が２点出土し、１～２面の研ぎ面を持つ。25－8が泥岩製、26－16が凝灰岩製である。

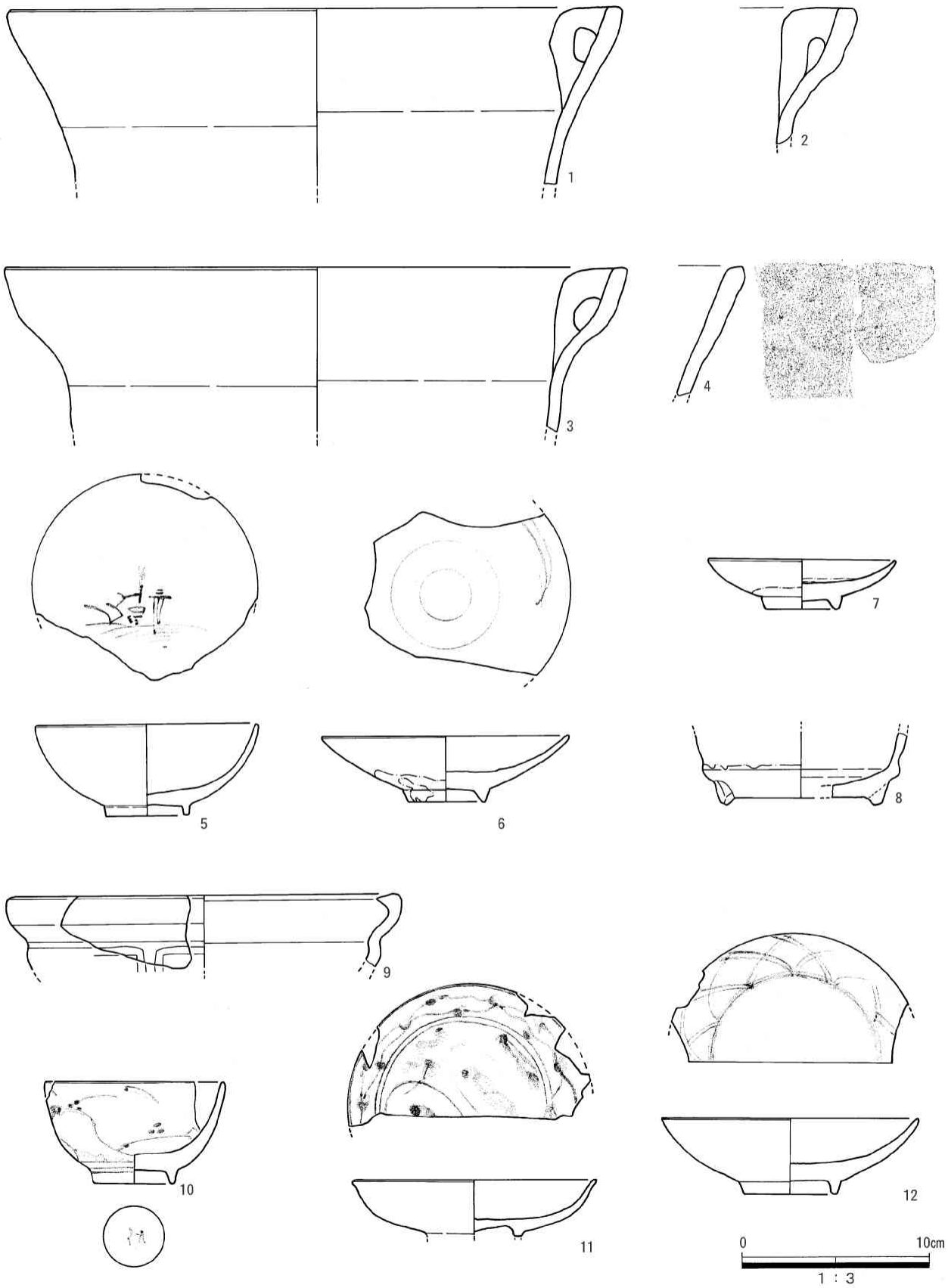
６　板碑（第26図11）

Ｃ区北端の畦畔上に東を向いて建っていた。所謂「厨子型双式板碑」で、両側が欠損し、角礫凝灰岩製である。全長128cm、幅44cm、厚さ48cmで頭部に扁平な突出部を持つ。

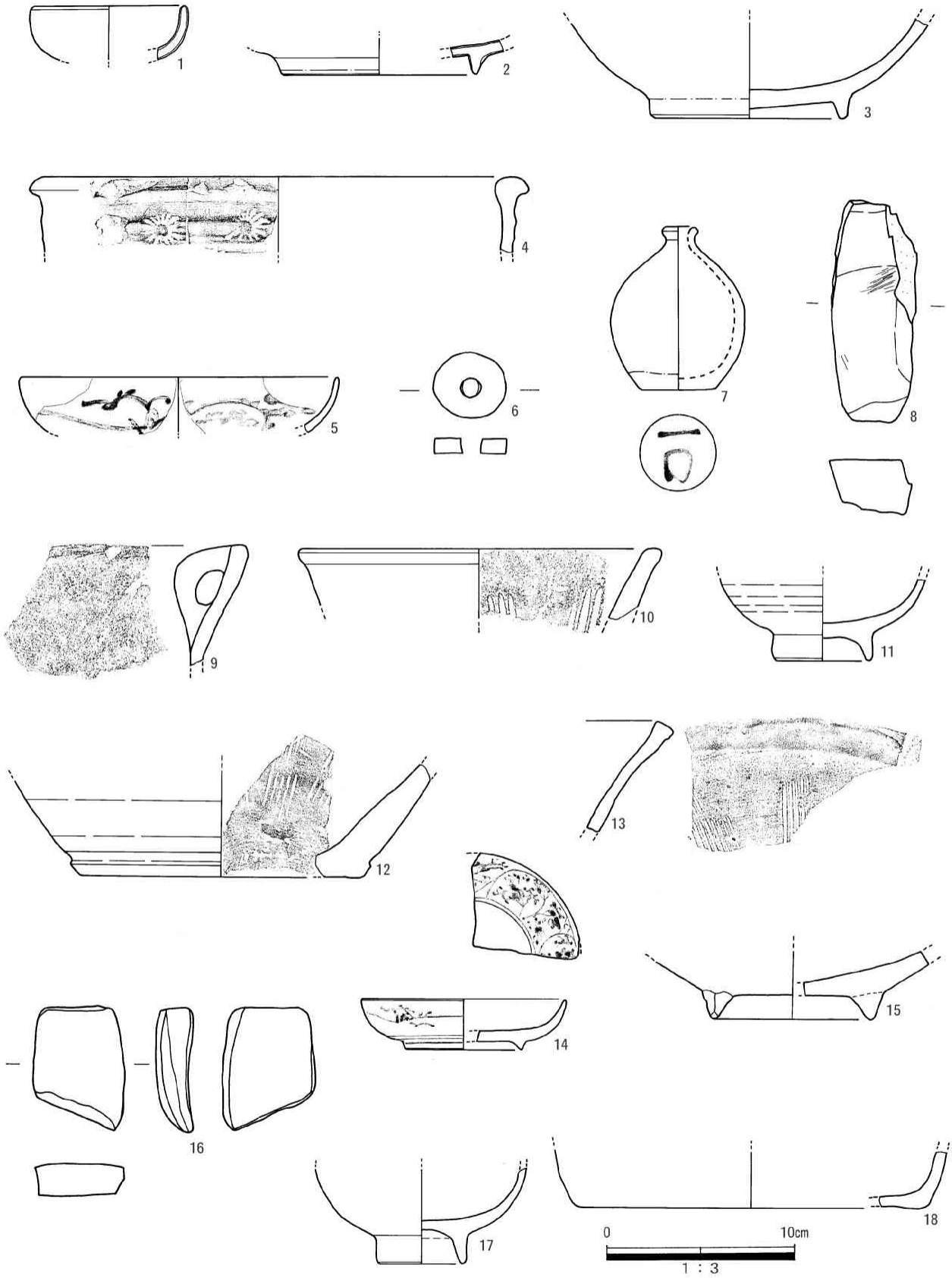
内部に頭部山型で額部が二条線の額下碑面部を２基陰刻され、碑面に種子が刻まれる。種子は梵字で右側が弥陀、左側は判読不明である。時期は14世紀代を前後するものと推測されるが、畦畔表土等の出土遺物から近世以降に移築されたものと考えられた。



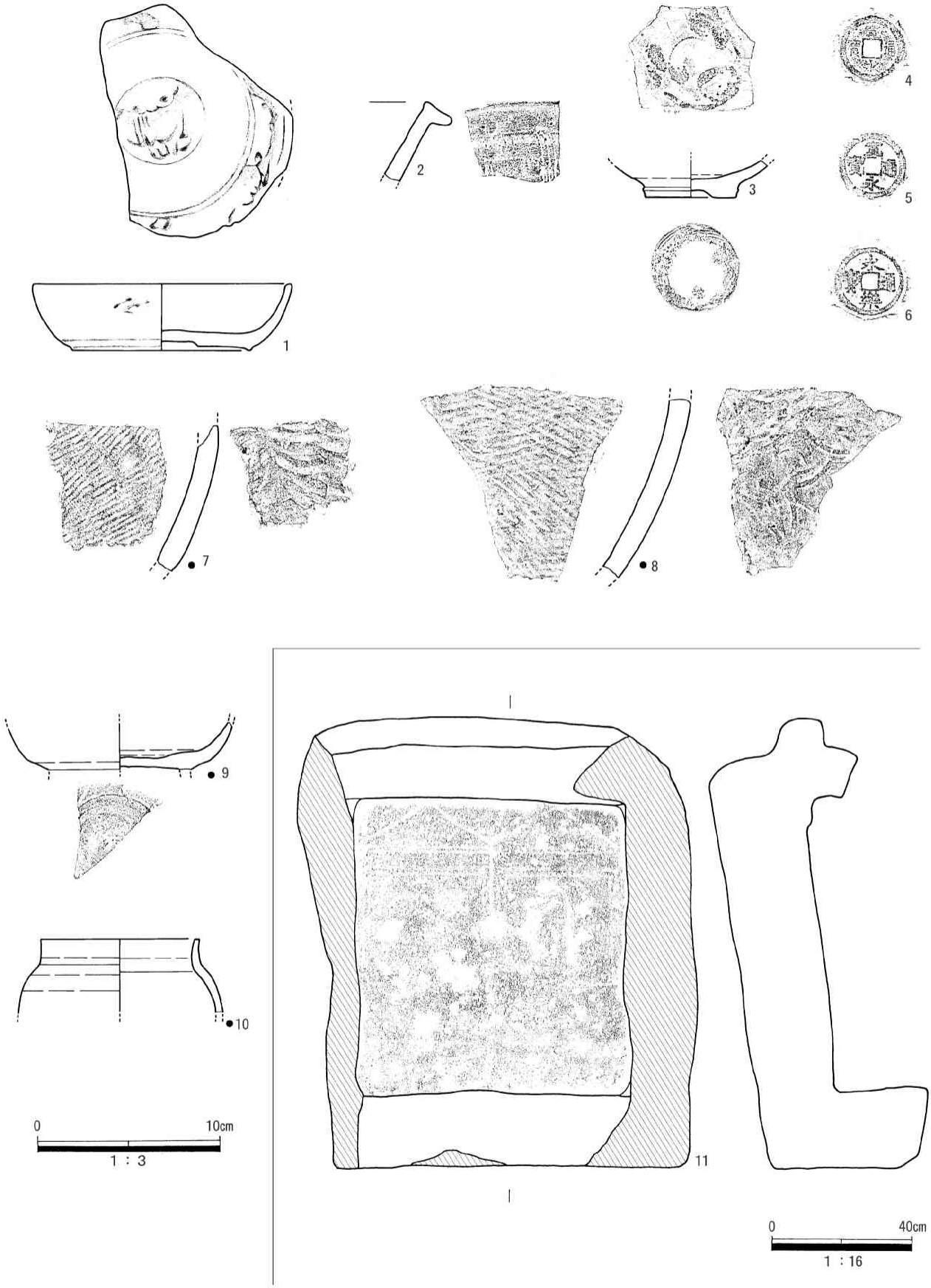
第23図　遺物実測図（５）



第24図　遺物実測図（６）



第25図　遺物実測図（７）



第26図　遺物実測図（８）

出土遺物観察表

番号	挿図	番号	遺物	種別	器種	計測値 口径	計測値 底径	計測値 器高	底部切離	調整技法 外面	調整技法 内面	出土位置(層位)	登録番号	図版	備考
第19図		1		土師器	坏	110		56		ナデ，ミガキ	ナデ，ミガキ	SU 1 Y	RP 76	16- 1	
		2		土師器	坏	136		60		ミガキ	ミガキ	SU 1 Y	RP 209	16- 2	
		3		土師器	坏	138		(40)		ナデ,刷毛目,ミガキ	刷毛目,ミガキ	SU 1	RP 141	16- 4	
		4		土師器	高坏	188		(56)		ミガキ	ミガキ	SU 1 F	RP 100	16- 6	
		5		土師器	壺	122		(89)		ナデ,刷毛目,ミガキ	ナデ,刷毛目	SU 1	RP 141	16- 5	
		6		土師器	壺	135		(86)		ナデ,ミガキ,ケズリ	ナデ	SU 1 Y	RP 93	16- 7	
		7		土師器	甕			(40)		刷毛目	刷毛目	SU 1			
		8		土師器	壺		66	(24)				SU 1 Y上	RP 112		
		9		土師器	甕		68	(28)			刷毛目	SU 1 Y	RP 74		
		10		土師器	坏	134		(40)		ミガキ	ミガキ	SU 2	RP 86	16- 3	
		11		土師器	高坏		103	(19)		ナデ	ミガキ	SU 2 F1		16- 8	
		12		須恵器	壺			(38)		ロクロ，ケズリ	ロクロ	SU 2	RP 85	16- 9	奈良～平安
		13		土師器	壺			(54)		ミガキ	ケズリ	SU 3 F上	RP 190	16-11	
		14		土師器	坏			(36)		ケズリ	ミガキ	SU 4 Y	RP 70	16-10	
		15		土師器	坏	140		(38)		ミガキ，ケズリ	ミガキ	SU 5 F1	RP 13	16-12	
第20図		1		土師器	壺		60	(146)		刷毛目	刷毛目	SU 156	RP 156a	17- 9	蓋に転用
		2		土師器	壺	200		(516)		ミガキ	ケズリ	SU 156	RP 156b	17- 8	内部赤色顔料出土
第21図		1		土師器	坏	126		56		ミガキ	ミガキ	ST 503 EK-Y	RP 540	16-13	
		2		土師器	坏	122		58		ナデ,ミガキ,ケズリ	ナデ，ミガキ	ST 504 Y	RP 553	17- 1	
		3		土師器	坏	124		54		ナデ,ミガキ,ケズリ	ミガキ，刷毛目	ST 504 Y	RP 550	16-14	
		4		土師器	坏	118		(38)		ミガキ	ミガキ	ST 504 Y	RP 556	17- 2	
		5		土師器	坏			(38)		ミガキ，ケズリ	ミガキ	ST 504 Y		17- 3	
		6		土師器	甕		54	(66)		刷毛目，ケズリ	刷毛目	ST 504 Y	RP 560	17- 5	
		7		土師器	甕	236		(126)		ケズリ	ミガキ	ST 504	RP 571	17- 6	
		8		土師器	坏			(28)		ナデ，ケズリ	ミガキ	SK 505	RP 544	17- 4	
		9		土師器	坏	130		52		ミガキ	ミガキ	SK 505 F2	RP 541	18-11	
		10		土師器	坏	130		(35)		ケズリ	ミガキ	ST 504 貼床	RP 558	18-12	
		11		土師器	高坏			(52)		ミガキ	ナデ，ミガキ	SK 505	RP 546	18-13	
		12		土師器	甕		62	(256)		ナデ,刷毛目	刷毛目	SK 509 F2	RP 585	18-17	
		13		土師器	壺			(122)		ミガキ	ミガキ	SK 509 F2	RP 584	18-16	
		14		土師器	坏	140		(56)		ナデ,ミガキ,ケズリ	ミガキ	ST 506 Y	RP 563	17- 7	
		15		土師器	坏			(32)		ミガキ	ミガキ	ST 506 Y		18-14	
第22図		1		土師器	高坏			(46)		ミガキ	ミガキ	SK 21 F1上	RP 198	17-10	
		2		土師器	甕			(60)				SX 48 F		17-11	
		3		土師器	壺	170		(270)		刷毛目	刷毛目,ミガキ	SX 53 Y	RP 1	17-13	
		4		土師器	坏	140		(34)		ミガキ	ミガキ	SX 54 F		17-12	
		5		土師器	坏	108		(44)		ミガキ	ミガキ	SX 54		17-14	
		6		土師器	坏			(22)		ミガキ	ミガキ	SX 54 F		17-15	
		7		土師器	高坏			(31)		ミガキ		SX 54 F		17-16	
		8		土師器	高坏			(30)		ミガキ		SX 54		18- 2	
		9		土師器	高坏			(42)		ミガキ	ミガキ	SX 54 F		18- 1	
		10		土師器	坏	134		(40)			ミガキ	SD 56		18- 3	
		11		土師器	坏	116						SP 68 F		18- 4	
		12		土師器	高坏	134		88		ミガキ	ミガキ	SX 69 Y	RP 177	18- 5	
		13		土師器	坏	122		52		ナデ，ミガキ	ミガキ	SX 73		18- 6	
		14		土師器	坏	128		(48)		ミガキ，ケズリ	ミガキ	SX 73 Y	RP 182	18- 7	
		15		土師器	高坏			(38)		ミガキ	ミガキ	SX 73		18- 8	
		16		土師器	壺	148		(80)		ミガキ，ケズリ	ケズリ	SX 74 Y	RP 186	18-10	
		17		土師器	坏	124		(36)		ミガキ，ケズリ		SX 74 Y	RP 185	18- 9	
		18		土師器	坏	108		(38)		ミガキ，ケズリ	ミガキ	B区南半カベⅡ		18-15	
第		1		土師質土器	内耳堝			(52)				SD 11 F1	RP 163	19- 1	外面煤付着
		2		国産陶器	碗		84	(46)	回転糸切	鉄釉	鉄釉	SD 11 F		19- 2	
		3		国産陶器	鉢		102	(26)		灰釉(暗緑色)	灰釉(暗緑色)	SD 11 F1	RP 158	19- 3	
		4		国産陶器	碗		50	(26)	回転糸切	灰釉(淡黄色)	灰釉(淡黄色)	SD 11 F		19- 4	
		5		土師質土器	火鉢		186	(64)		斜格子目線刻		SD 11 F1		19- 5	

23	6	国産陶器	擂鉢			(94)			卸し目	SD 11 F1		19- 6	
	7	国産陶器	擂鉢		110	(44)			卸し目	SD 11 F1		19- 7	
	8	国産陶器	鉢		86	(30)	回転糸切			SD 11 F		19- 8	
	9	戸長里産陶器	擂鉢			(98)			卸し目	SD 11 F1		19- 9	
図	10	土師質土器	内耳堝	258		(58)				SD 46 F2		19-10	外面煤付着
	11	土師質土器	内耳堝			(98)			取手	SD 46	RP 2	19-11	外面煤付着
	12	国産陶器	碗	218		(92)		灰釉(灰色)	灰釉(灰色)	SD 46 F1		19-12	口縁玉縁
	13	国産陶器	鉢			(52)				SD 46 F		19-13	
	14	須恵器系陶器	甕			(44)		平行タタキ	アテ痕	SD 46 Y	RP 192	19-14	珠洲系陶器
	15	成島産陶器	鉢	138		(132)		鉄釉	鉄釉	SD 46		20- 1	
第	1	土師質土器	内耳堝	324		(92)			取手	SD 50	RP 105	20- 2	外面煤付着
	2	土師質土器	内耳堝			(72)			取手	SD 50		20- 3	外面煤付着
	3	土師質土器	内耳堝	328		(86)			取手	SD 50		20- 4	外面煤付着
	4	土師質土器	内耳堝			(68)				SD 50			外面煤付着
	5	国産陶器	碗	118	44	48		灰釉(淡黄色)	灰釉(淡黄色);山水文	SX 51 Y	RP 207	20- 5	
	6	肥前系染付	Ⅲ	130	40	34		透明釉	透明釉：見込み蛇の目釉剥ぎ；折松葉文	SX 51 F		20- 6	
24	7	肥前系染付	Ⅲ	100	38	26		透明釉(白色)	透明釉(白色)；見込み蛇の目釉剥ぎ	SX 51 Y	RP 164	20- 9	
	8	国産陶器	香炉		78	(36)		鉄釉		SX 51 Y	RP 206	20- 7	足付
	9	国産陶器	鉢	206		(38)		灰釉(暗緑色)	灰釉(暗緑色)	SX 33			外面:方形張出し
図	10	肥前系染付	碗	94	42	54		透明釉：雪輪草花文	透明釉	SE 23		20-10	高台内;崩れ「大明年製」銘
	11	肥前系染付	Ⅲ	130		28		透明釉	透明釉;花唐草文	SE 23		20-11	
	12	肥前系染付	Ⅲ	136	48	40		透明釉	透明釉；見込み蛇の目釉剥ぎ：斜格子文	SX 32	RP 55	21- 1	
第	1	国産青磁	小碗	82		(28)		青磁釉	青磁釉	SD 6	RP 61	21- 2	
	2	輸入青磁	碗		120	(18)		青磁釉	青磁釉	SD 6 F		21- 3	
	3	国産陶器	碗		140	(50)		灰釉(灰色)	灰釉(灰色)	SD 46 F1		21- 4	高台内「イセカ」墨書。24-12同一
	4	国産陶器	鉢	262		(40)		菊花文		SD 6 F2		21- 5	
	5	肥前系染付	Ⅲ	168		(28)		透明釉；唐草文	透明釉;花唐草文	SD 6		21- 9	
	6	白磁	戸車	34	38			白磁釉	白磁釉	SD 6 F		21- 6	扁平化
	7	国産陶器	徳利	20	38	86		鉄釉	鉄釉	SD 6		21- 8	底部「一口」墨書
	8	石製品	砥石	118	44					SD 6 F		21- 7	摺面一面。泥岩製
25	9	土師質土器	内耳堝			(64)			取手	SK 13 F1	RP 8	21-10	外面煤付着
	10	国産陶器	擂鉢	190		(36)			卸し目	SK 22 F1	RP 12	21-11	
	11	国産陶器	碗		50	(44)		灰釉(淡黄色)	灰釉(淡黄色)	SX 48	RP 146	22- 1	
	12	国産陶器	擂鉢		148	(55)			卸し目	SX 48	RP 148	21-13	
	13	国産陶器	擂鉢			(58)		鉄釉		SK 48			
	14	肥前系染付	Ⅲ	108	62	27		透明釉；唐草文	透明釉;唐草文輪花	SX 64 F		22- 4	
図	15	国産陶器	鉢		84	(36)		灰釉(暗緑色)	灰釉(暗緑色)	SK 48			足付
	16	石製品	砥石	66	48					A区南半Ⅱ		21-14	摺面二面。凝灰岩製
	17	国産陶器	碗		46	(50)		灰釉(淡黄色)	灰釉(淡黄色)	SK 61	RP 154	21-12	
	18	土師質土器	内耳堝		180	(30)				H-12		22- 2	外面煤付着
第	1	肥前系染付	Ⅲ	140	96	36		透明釉；唐草文	透明釉;雪持笹竹文	SX 501 F1	RP 504	22- 5	蛇の目凹形高台
	2	国産陶器	擂鉢			(42)			卸し目	A区南壁Ⅲ(N-15)	RP 15	22- 3	整地層出土
	3	朝鮮産陶器	碗		50	(20)	回転糸切	灰釉	灰釉 見込み:砂目	M-11Ⅲ		22- 6	蛇の目高台砂目
	4	銅製品	古銭	36	36	1				A区南半Ⅱ		22- 9	寛永通宝
	5	銅製品	古銭	36	36	1				SP 30 F1		22- 7	寛永通宝
26	6	銅製品	古銭	36	36	1				SP 68		22- 8	永楽通宝
	7	須恵器	甕			(78)		平行タタキ	同心円アテ	SK 49 F		22-11	
	8	須恵器	甕			(98)		平行タタキ	同心円アテ	SD 50			
図	9	須恵器	高台付坏			(24)	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SD 6 F1		22-10	
	10	須恵器	壺	86		(40)		ロクロ	ロクロ	A区南半Ⅱ		22-12	
	11	石製品	板碑	128	(112)	45				C区北端Ⅰ		図版15	角礫凝灰岩

Ⅵ　まとめ

本遺跡は古墳時代の周溝墓、土器棺墓、土坑墓、竪穴住居跡、土坑跡、溝跡、河川跡、中～近世の堀跡、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡等が検出される複合遺跡である。以下に時代毎に遺構と遺物を整理してまとめとする。

古墳時代では方形状の周溝墓5基や土器棺墓1基、土坑墓5基等の多様な墓制の墓域と、竪穴住居3棟や土坑2基等を主とした集落跡が確認された。

周溝墓は、5基（SU1～5・58）以上が検出され、主体部や墳丘部は全て既に耕作等により削平され、幅1～2mの方形状に廻る周溝のみ認められる。最も標高が高く河川跡に隣接するA区東半で一辺20m前後の大型のSU1・2が検出され、その北西側に一辺約15mの中型のSU3・4・5及び一辺7m程の小型のSU58がほぼ主軸を合わせて構築される。周溝墓同士や土器棺墓に重複関係（SU1→SU2、SU3→SU2、SU156土器棺墓→SU58→SU4）があり、少なくとも3時期以上の時間差が認められる。形態的にはSU58を除き、周溝の断面形は緩やかなU字状を呈し、確認面からの最深部が50㎝以上を測るものもある。また、全体に周溝の深さは一律でなく四隅の一部が非常に浅くなる等の傾向が窺える。周溝から古墳時代中期後葉～後期初頭の土師器が僅かに出土し、SU1のみ一定量認められやや古相の土器群が散見される。他にSD9とした小溝はSU2・3・5の南側を東西に走行し、周溝墓群の区画施設等の役割も窺えた。

土器棺墓（SU156）と土坑墓（SK12～15・59）は、周溝墓群の外側のA区北端のにまとまって分布する。SU156は土坑中に大型の土師器壷が埋設され、口縁部に中型の壷下半部を再利用した蓋を被せる。大型壷の内部には赤色顔料が含まれ、祭祀に関わるものと推測される。

土坑墓群中のSK12・14からは人骨片が出土し、出土状況等から洗骨後に埋め戻された様相が窺えた。直径約80㎝前後の小判形や円形を呈するものが多く、形態や規模、覆土等が類似する周辺のSK13・15・59等も土坑墓と判断された。土器棺墓と土坑墓群ともSU58との重複関係や分布状況、出土土器等から本墓域の中でも最も古い一群と推定され、古墳時代前期頃の所産と考えられ、大～中型の周溝墓に先行するものと考えられた。

集落跡は、標高が中位の遺跡南半のC区から検出され、限定された調査区ながら長さ3m前後の平面形が方形を呈する竪穴住居跡が3棟以上、一括土器が出土する土坑1基等が検出された。竪穴住居跡は、住居の主軸が磁北から西に傾く一群（ST503・504）とほぼ磁北を向くもの（ST506）に分けられるが、土坑跡（SK505）を含め出土遺物からは古墳時代中期後葉～後期初頭のほぼ同時期の遺構群であると推定された。

これら遺構分布や変遷を概括すれば、「遺跡東の河川（SG7）に隣接する微高地の最も標高の高い地区に墓域が占地され、土器棺墓や土坑墓に後続して大～中型の周溝墓が断続的に構築される。その南側中位の地区に竪穴住居を主に居住域が形成される」集落構成や変遷が窺える。

一方、遺物相では土器棺墓やSU1・3周溝墓で古墳時代前～中期前半の土器群が散見されるが、全体に近接する南原遺跡や中里遺跡と類似した土師器が主体を占め、県内で古墳時代中期後葉の所謂「南小泉式の後続・最も新しい時期に併行する」段階とされている。しかし、本遺跡

では南原遺跡ではみられない次期に主体のF類や黒色化等の新相の要素も認められる。南原遺跡ではTK23～47型式併行の須恵器が供伴する事から本遺跡の主体は同中期後葉～後期初頭頃の時期と捉えられる。これらを基に古墳時代の主な遺構の変遷と年代観は、Ⅰ期：SU156・SK12・14・15・59（同前期）、Ⅱ期：SU58・1・3・SD9（中期前～中葉）、Ⅲ期SU2・4・5・ST503～506・SK505・SG7（同中期後葉～後期初頭）に比定されよう。

さて、本遺跡の特記事項として方形状の周溝墓群等が上げられる。同様な遺構として「方形周溝墓」が指摘され、米沢市内の比丘尼平遺跡・八幡堂遺跡・上浅川遺跡等が確認されている。

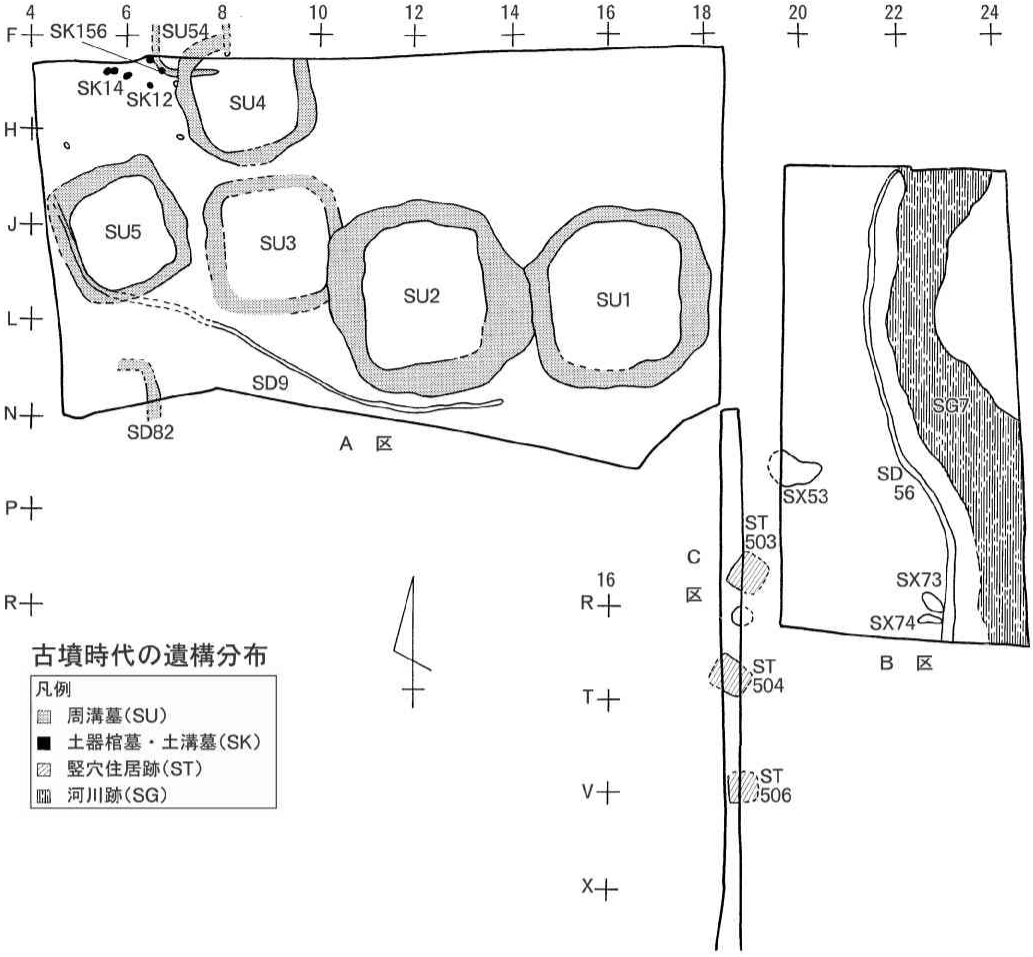
比丘尼平遺跡は本県の方形周溝墓の初見で、約12m四方の方形周溝墓が２基確認され、古墳時代前期前半頃が推定され、近接して方形周溝墓に先行するであろう「壷棺墓」が検出された。八幡堂遺跡では約11m四方の方形周溝墓が１基、約６～８ｍのものが４基検出され、時期的には中期前半頃と考えられている。上浅川遺跡は約16m四方の方形周溝墓が検出され、周溝内の土器から中期後半の土器群が出土する。これら遺跡を概括すれば本遺跡と同じく平地に立地し、概ね方形周溝墓が群をなし、集落域と隣接する事等があげられる。

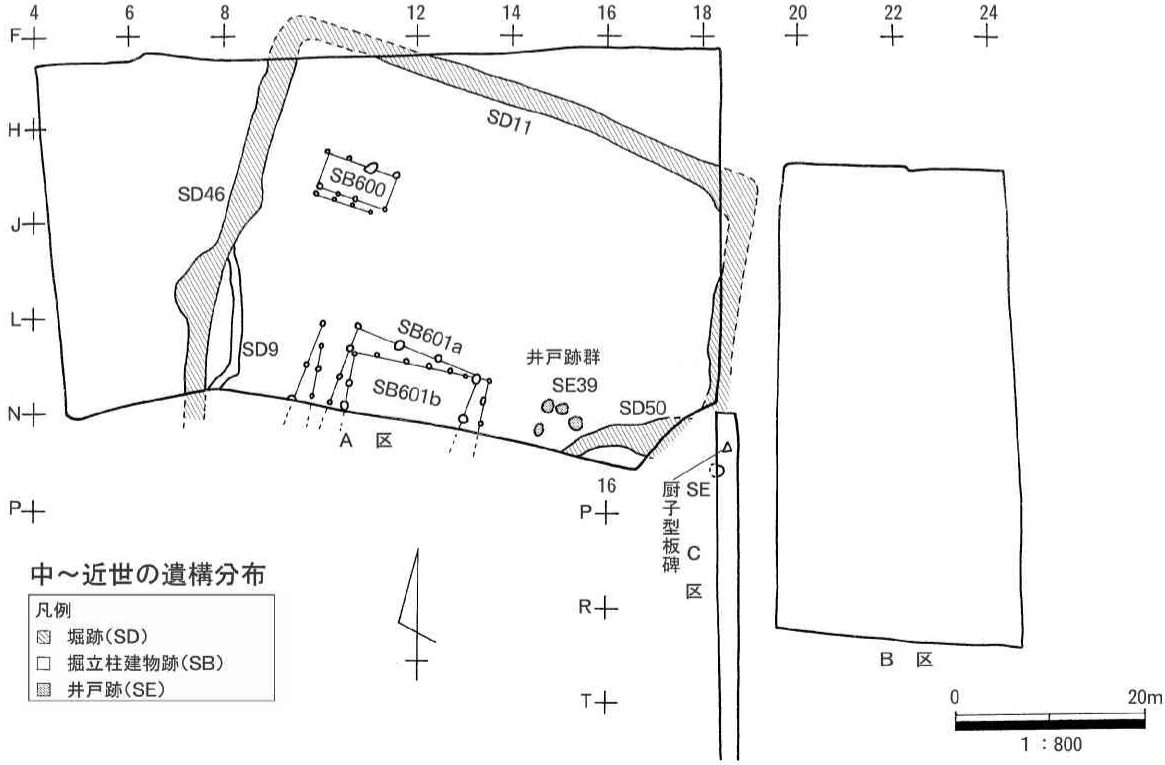
他方、方形周溝墓の形態を詳しく見れば、上記遺跡の周溝幅は全体に狭く、周溝の断面形が箱形や逆台形状を呈する（A類）周溝形態であるのに対して本遺跡では小型のSU58が類似する以外、大～中型のSU1～5は、周溝幅が約2～4.5mと広く断面形も緩やかなU字状を呈する（B類）点が異なり、SU58→SU4の重複関係ではB類がより後出の形態とも判断でき、方墳の可能性も考えられる。また、方形周溝墓（A類）自体は県内で米沢盆地以外の白鷹町黒藤館や寒河江市高瀬山遺跡等で検出され、両者は平地より一段高い丘陵や河岸段丘上の平地の集落跡と離れて立地し、古墳時代前期に限られる状況である。

これらを合わせて本地域の墓制を概観すれば、本遺跡の主体である方形状の周溝墓や所謂「方形周溝墓」は、集落跡等と併存する在り方から本地域の在地的な墓制の一つと考えられ、少なくとも古墳時代中期頃までは続くようである。これは、本遺跡の南方約2kmにある同時期の直径約27mの八幡塚古墳等の円墳と共に、本地域では在地的な墳墓形態として上記の方形を基調とする一群が、他地域に比べ残存する様相が窺える。更にそれらを統括するものとして本遺跡に南西約4kmの宝領塚古墳の大型の前方後方墳や、約7km北の県内最大の前方後円墳の稲荷森古墳の存在等があったと推測される。

中～近世の遺構としては、A区中央～東半を中心に堀跡や掘立柱建物跡、井戸跡、溝状を呈する性格不明遺構等が確認された。堀跡（SD11・46）は、幅約1.5mで主軸が磁北からやや東に傾く一辺約50m四方の方形に廻るものと考えられ、内部には堀跡と軸を同じくして、重複関係のある3×5間の大型の掘立柱建物跡（SB600）や1×3間の小規模な建物跡（SB601）が確認された。堀跡と掘立柱建物跡の間には遺構が希薄で土塁の可能性も窺えた。他に大型の建物跡に近接して井戸跡群も検出され、北側の堀跡に隣接して溝状の性格不明遺構等も検出された。

全体的には中世に一般的な所謂「方形居館」と考えられ、堀跡上下層等の出土遺物から15～18世紀代の断続的な利用が窺え、当時の置賜地方を掌握した伊達氏～上杉氏を支えた在地勢力の存在が推測される。また、C区北端では伊達氏以前の14世紀代の厨子型双式板碑も確認された。





第27図　北小屋遺跡遺構変遷図

報告書抄録

ふりがな	きたこややしきいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	北小屋屋敷遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第 103 集
編集者名	植松暁彦　黒沼幹男
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番１号　TEL023-672-5301
発行年月日	2002年３月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
きたこややしき 北小屋屋敷 いせき 遺跡	やまがたけん 山形県 よねざわし 米沢市 くぼたまち 窪田町 くぼた 窪田 あざきたこや 字北小屋 やしき 屋敷	6202	米沢市 遺跡番号 J-495 (平成10年度登録)	37度 59分 49秒	140度 08分 31秒	20010507 ～ 20010803 20011015 ～ 20011026	4,700	県営担い手育成基盤整備事業 （外の内地区）

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
墳墓跡	古墳時代	周溝墓　5 土器棺墓　1 土坑墓　5	土師器（坏・高坏・壺・甕）	古墳時代中期を中心とする方形状の周溝墓や土器棺墓を検出する。土坑墓からは人骨片も出土した。
集落跡		竪穴住居　3 土坑	土師器（坏・高坏・壺・甕）	墓域の南東部に集落跡を検出する。
館跡	中～近世	堀　1 溝　1 井戸　5 掘立柱建物　2	中～近世陶器（碗・皿・鉢・徳利・甕・擂鉢） 中～近世磁器（碗・皿・戸車） 土師質土器（内耳土堝） 石製品（石臼・砥石） 古銭	約90m四方と推定される方形居館堀跡の内部に建物跡を検出する。 （総出土箱数：32）

付　　編

北小屋屋敷遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

北小屋屋敷遺跡（山形県米沢市窪田町字北小屋屋敷に所在）は、最上川と天王川の合流部付近、最上川左岸の標高約218m付近に位置する。神保ほか（1970）にみると、遺跡付近は、最上川に沿って自然堤防が発達し、その間をぬうように旧河道が認められている。本遺跡は、この自然堤防上に位置する。これまでの発掘調査にて、古墳時代とみられる旧河道、古墳時代の墓坑や周溝を伴う方墳、中～近世の溝跡、井戸跡群、柱穴などが確認されている。

今回は、年代観に関する情報を得るため放射性炭素年代測定、旧河道の埋積過程を検討するため珪藻分析、遺跡周辺の古植生を検討するため花粉分析・植物珪酸体分析・樹種同定・種実遺体同定、土坑墓の遺体埋納について検討するためリン分析、赤色顔料の素材を検討するためＸ線回折分析をそれぞれ実施する。

１．試料

土壌試料は、河川跡（SG17）の北トレンチ・南トレンチから地山および覆土、方形周溝墓（SU1・SU2・SU5）の周溝内覆土、SU1の周溝覆土より出土した土器（RP76）内土壌、土坑墓（SK12～16、SK59、SK60、SK75）の覆土、SU58の周溝部で検出された甕棺（RP156）の覆土内に認められた赤色物質を含む土壌、合計25点が採取された。この他、SK12の覆土内に認められた炭化物、SK14の覆土から出土した骨片、井戸跡より出土した植物遺体（木材および種実遺体が含まれる）が採取された。

珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、リン分析は、各遺構から採取された土壌試料を選択して分析する。放射性炭素年代測定は、SK12のＦ層から採取された炭化物、SK14のＦ層より出土した骨片、SG17南トレンチのF4層について行う。この内、SK14のＦ層より出土した骨片については、当社としても試料の性格を知る意味で骨同定を試みた。Ｘ線回折分析を行う試料は、SU58の甕棺（RP156）内覆土に認められた赤色物質である。また、井戸跡から採取された植物遺体について樹種同定・種実遺体同定を行う。なお、分析試料の詳細は表１に示す。

２．分析方法

（１）放射性炭素年代測定

測定は、株式会社加速器分析研究所の協力を得た。今回は、微量な試料が認められるため、加速器質量分析法で行う。なお、δ13Cの値は、加速器を用いて試料炭素中の13C濃度（13C／12C）を測定し、標準試料PDB（白亜紀のベレムナイト類の化石）の測定値を基準として、それからのずれを計算し、千分偏差（‰：パーミル）で表したものである。測定試料が「骨」であるため、同定を試みた。方法としては、露呈した面の土壌を筆により除去し、補強のため樹脂（バインダー№18）を塗布する。肉眼観察を行ない、標本と比較して同定する。

（２）珪藻分析

試料を湿重で７ｇ前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する。種の同定は原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer and Lange-Bertalot（1986,1988,1991a,1991b）などを参照する。

同定結果は、海水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性か判断する目安として完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、淡水生種については安藤（1990）、陸生珪藻については伊藤・堀内

(1991)、汚濁耐性についてはAsai and Watanabe（1995）の環境指標種を参考とする。

（３）花粉分析

試料を湿重で約10ｇ秤量し、水酸化カリウム処理、篩別、重液分離（臭化亜鉛，比重2.3)、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理（無水酢酸：濃硫酸＝９：１）の順に物理・化学的な処理を施して花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数を行う。

結果は同定・計数結果の一覧表および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の各種類の出現率は木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子が総数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基数とした百分率で算出する。なお、図表中で複数の種類をハイフォン（－）で結んだものは種類間の区別が困難なものを示す。

（４）植物珪酸体分析

湿重５ｇ前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W，250KHz，１分間)、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の分布図を作成する。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

（５）木材および種実遺体同定

木材は、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

種実遺体は、双眼実体顕微鏡下で種実遺体を観察し、形態的特徴および現生標本との比較から種類の同定を行う。同定後の種実遺体等は、種類毎にビンに入れ、ホウ酸・ホウ砂水溶液で液浸保存する。

（６）リン分析

土壌養分測定法委員会（1981）を参考にし、硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法にてリン酸の測定を行う。試料を風乾後、軽く粉砕して2.00㎜の篩を通過させる（風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、５時間）により測定する。風乾細土試料2.00ｇをケルダール分解フラスコに秤量し、硝酸約５㎖を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10㎖を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100㎖に定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5mg/ｇ）を求める。

（７）Ｘ線回折分析

土塊に混在する赤色顔料を抽出し、105℃で２時間乾燥させた試料をメノウ乳鉢で微粉砕した。この微粉砕試料をアセトンを用いてスライドグラスに塗布し、Ｘ線回折測定試料とした。作成したＸ線回折測定試料について以下の条件で測定を実施する（足立，1980；日本粘土学会，1987)。検出された物質の同定解析は、測定回折線の主要ピークと回折角度から原子面間隔および相対強度を計算し、それに該当する化合物または鉱物をＸ線粉末回折線総合解析プログラム（五十嵐，未公表）により検索する。

装　置：島津制作所製XD-3A	Time Constant：1.0sec
Target：Cu（Kα）	Scanning Speed：2°/min
Filter：Ni	Chart Speed：2㎝/min
Voltage：30KVP	Divergency：1°
Current：30mA	Recieving Slit：0.3㎜
Count Full Scale：5,000C/S	Scanning Range：3～45°

３．結果

（１）放射性炭素年代測定

結果を表２に示す。測定の結果（同位体補正年代値）は、SK12の炭化物が300BP、SK14の骨が4320BP、SG17南トレンチのF4層が1460BPである。ただし、SK14の骨から抽出されたコラーゲンと思われる断片の量は非常に少なく、炭素量として0.2㎎しか得られなかった。骨そのものの変質も激しいため、測定した炭素の由来についてはよくわからず、測定値が骨の年代を示していない可能性がある。

また、骨の同定については、破片のため種は同定できないが、大きさから見て中型獣である。灰白色を呈した焼骨である。土壌に固定された比較的大きい破片は、四肢骨の骨体の一部である。平らな面が露呈しており、脛骨の後面の可能性が高いと考えられる。形態・サイズからはヒトの可能性も充分に考えられ、火葬人骨の一部である可能性もある。この他、破片が数点あるが、同一の骨のものか不明である。

（２）珪藻分析

結果を表３、図１に示す。SG17北トレンチの地山から採取された試料は、淡水性種が11個体と少ない。僅かに検出される珪藻化石は、保存状態が悪い。

これに対して、南トレンチで採取された３試料（F1層・F3層・F4層）からは産出する。これらの試料における珪藻化石の完形殻の出現率は、F1層が約40％、F3層・F4層は70％前後である。産出分類群数は、合計で27属115種類である。

SG17南トレンチにおける珪藻化石群集は層位ごとに異なる。F4層は、淡水生種が優占し、その生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能）の特徴は、貧塩好塩性種（小量の塩分がある方が生育に適する種）と貧塩不定性種（小量の塩分には耐えられる種）、pH不定性種（pH7.0付近の中性水域に最もよく生育する種）、流水不定性種（流水域にも止水域にも普通に生育する種）と真＋好流水性種（流水域に最もよく生育する種）が優占あるいは多産する。有機汚濁の進んだ富栄養水域や小量の塩分を含む水域に好んで生育する好汚濁生種（Asai and Watanabe, 1995）の*Nitzschia palea*が多産し、これに付随して同じような水域に生育する*Nitzschia obtusa var. scalpelliformis*、真流水性で上流性河川指標種群の*Gomphonema sumatorense*、好流水性の*Surirella angusta*等を伴う。

上流性河川指標種群とは河川上流部の峡谷部に集中して出現することから上流部の環境を指標する可能性の大きいとされる種群とされている（安藤，1990）。

F3層では、貧塩好塩性種がほとんど産出しなくなり、貧塩不定性種、真＋好アルカリ性種（pH7.0以上のアルカリ性性水域に最もよく生育する種）、流水不定性種と真＋好流水性種が優占あるいは多産する。種ごとにみると多産する種がなく、好流水性の*Achnanthes convergens*、*Gomphonema helveticum*、好流水性で中～下流性河川指標種群の*Fragilaria vaucheriae*、*Diatoma hyemals var. mesodon*、流水不定性の*Gomphonema parvulum*、流水不定性で沼沢湿地付着生種群の*Eunotia pectinalis var. minor*、好止水性の*Tabellaria flocculosa*、*Fragilaria capucina var. gracilis*等が産出する。

中～下流性河川指標種群とは、河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘・扇状地・自然堤防・後背湿地などに集中して出現することからその環境を指標することができる種群とされる（安藤，1990）。また、沼沢湿地付着生種群とは沼よりも浅く水深が１ｍ前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や更に水深の浅い湿地で優勢な出現の見られることからその環境を指標する

ことができる種群とされている（安藤，1990）。

F1層では、淡水生種が多産するが、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻も約30％産出する。淡水性種の生態性の特徴は、貧塩不定性種、真＋好アルカリ性種、流水不定性種が優占する。小量の塩分を含む水域の方が生育に適する淡水～汽水生種の*Rhopalodia gibberula*、流水指標種の*Gomphonema sumatorense*、*Meridion circulae var. constrictum*、流水不定性種の*Amphora affinis*、*Gomphonema parvulum*、陸生珪藻の中でも耐乾性の高いＡ群（伊藤・堀内，1991）の*Navicula mutica*、*Hantzschia amphioxys*等が産出する。

（３）花粉分析

結果を表４、図２に示す。SG17南トレンチF4層では、花粉化石がほとんど検出されない。検出される種類は、木本類のスギ属、クマシデ属－アサダ属、コナラ属コナラ亜属、草本類のイネ科、ヨモギ属、キク亜科、ヒカゲノカズラ属などのシダ類である。これら僅かに検出される化石も保存状態が悪く、外膜が溶けて薄くなっていたり、壊れている。

その他の試料では、花粉化石が比較的良好に検出される。その花粉化石群集は３試料とも類似した傾向を示す。

木本花粉では、単維管束亜属・複維管束亜属を含むマツ属、スギ属、クルミ属、ハンノキ属、ブナ属、コナラ亜属が多産し、ヤナギ属、クマシデ属－アサダ属、ニレ属－ケヤキ属などを伴う。また、北トレンチ地山でトネリコ属が、南トレンチF3層でトチノキ属が若干多い傾向にある。

草本花粉では、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が多産し、ガマ属、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、クワ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、コオホネ属、ツリフネソウ属、キク亜科、タンポポ亜科、サンショウモなどを伴う。

（４）植物珪酸体分析

結果を表５、図３に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。また、SG17南トレンチのF4層・F3層は、検出個数が少ない。

・SU1およびSU2

SU1北ベルトのF3層とSU2南ベルトのF3層の植物珪酸体群集は、２試料ともクマザサ属を含むタケ亜科の産出が目立ち、栽培植物のイネ属、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科、シバ属が検出される。ただし、SU1北ベルトのF3層では、SU2南ベルトのF3層と比較して、イネ属短細胞珪酸体の検出個数が多く、稲籾殻に形成される穎珪酸体や葉部に形成される短細胞列もわずかに認められる点で異なる。

・SG17

南トレンチのF4層とF3層では、F4層でクマザサ属の機動細胞珪酸体、F3層でタケ亜科・ヨシ属・ススキ属がわずかに認められる程度である。これに対して、F1層では、植物珪酸体が豊富に検出される。これらの中では、ヨシ属の産出が顕著である。この他に検出される種類としては、タケ亜科、ススキ属、イチゴツナギ亜科があるが、いずれも低率である。

（５）木材および種実遺体同定

木材は、広葉樹のブナ属とサカキに同定された。また、同一試料から検出された種実遺体はオニグルミであった。木材の主な解剖学的特徴や種実遺体の形態的特徴を以下に記す。

＜木材＞

・ブナ属（Fagus）　　ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に２～３個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織は同性～異性Ⅲ型、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・サカキ（*Cleyera japonica Thunberg pro parte emend. Sieb. et Zucc.*）　ツバキ科サカキ属

散孔材で、小径の道管が単独または２～３個が複合して散在し、年利回に向かって径を漸減

させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、単列、１～20細胞高。
＜種実遺体＞
・オニグルミ（*Juglans mandshurica Maxim. subsp. Sieboldiana*（*Maxim.*）*Kitamura*）
クルミ科クルミ属
未炭化の核が、半分の状態で１個体検出された。茶褐色ないし灰褐色、広卵形で、先端部分がやや尖る。長さ34.5㎜、幅29.5㎜程度。１本の明瞭な縦の縫合線があり、縫合線に沿って半分に割れている。表面には縦方向に溝状の浅い彫紋が走り、ごつごつしている。内部には隔壁と子葉が入る２つの大きな窪みがある。
（６）リン分析
結果を表６に示す。測定の結果、SK14が5.70P_2O_5mg/ｇ、SK15とSU58（RP156）が1.16～1.54P_2O_5mg/ｇ、他の試料が1.00P_2O_5mg/ｇ以下である。
（７）Ｘ線回折分析
赤色顔料のＸ線回折図を図４に示す。赤色顔料と考えられる試料において検出された鉱物は、石英（quartz）、斜長石（plagioclase）、カリ長石（K-feldspars）、トリディマイト（tridymite）、赤鉄鉱（hematite）、緑泥石（chlorite）、雲母鉱物（mica　minerals）、沸石（zeolite）の８鉱物である。

４．考察
（１）遺構の構築年代
SK12で出土した炭化物は、約300年前の年代値が得られた。試料はSK12の人骨に伴うものと考えられていることからSK12は、近世初頭頃のものの可能性がある。一方、SK14で出土した骨は、約4300年前の年代値が得られた。ただし、測定した炭素の由来が不明瞭であるためこと、調査所見からのSK12との関係からみて、この年代値が遺構の構築年代を示しているとは言えない。以上のように、今回、土坑墓群とされる遺構の構築年代に関する情報を得るために年代測定を実施したが、測定試料の適量の問題等からこれらの土坑群が同一時期に構築されたものか、またその構築時期について明瞭にすることができなかった。今後、測定試料の適量獲得の上、年代測定資料を蓄積し、それらを統計的に扱うとともに、考古学的な所見を加えた上で検討を重ねていきたい。
一方、河川跡SG17の南トレンチF4層では、約1460年前の年代値が得られた。河道底部付近から採取されたものであり、後述するように余り流れの強くない状況で堆積したことを考慮すると、この年代値は河川が埋積し始めた頃を示すと思われる。よって、河川跡は、今から約1460年前の古墳時代以降に埋積が始まった可能性がある。
（２）河川跡の埋積過程
河川跡（SG17）北トレンチの古墳時代地山（旧河川覆土）は、珪藻化石がほとんど少ないために堆積環境について検討することが困難である。これに対して、南トレンチのF4層～F1層からは、珪藻化石が産出する。これらの層準における珪藻化石群集は、試料によって種類構成が異なる。
F4層では、有機汚濁の進んだ富栄養水域や小量の塩分を含む水域に好んで生育する好汚濁生種が優占する。これより、F4層が堆積した頃、河道内には、水質的に汚濁しており、富栄養の水が存在していたと思われる。上流性河川指標種群などの流水性種が検出されるが、出現率が低率であることから、河川内は流水の影響が強かったとは考えにくい。
F3層になると、検出される種類数が増加するが、特に多産する種が存在せず、流水不定性種だけでなく、中～下流性河川指標種群を含む流水性種や止水性種も検出される。これより様々な場所の堆積物が流れ込んでいたことがうかがえ、河川内は滞水することがなく、水が流れる状態になっていたと考えられる。
F1層は、上流性河川指標種群や中～下流性河川指標種群を含む流水性種が引き続き検出さ

れる。ただし、本層では、陸生珪藻、中でも耐乾性の高い種類の出現率が増加する。このことから、河川内は、埋積が進むにつれて次第に乾いた状態へ変化した可能性がある。すなわち、河川が埋積するにつれて、地下水位が相対的に下がり、それに伴って乾いた状態になったのであろう。

（３）古墳時代の周辺植生

広域的な植生を反映する木本花粉の産状に注目してみると、ヤナギ属、クルミ属、クマシデ属－アサダ属、ハンノキ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属など、落葉広葉樹が多産する。これらの種類の中では、ブナ属は冷温帯林の代表的な構成要素である。したがって、後背地には、ブナ属とコナラ亜属を中心とした落葉広葉樹林が広がっていたと推測される。このような植生の林床には、現存植生を考慮すると、恐らくササ類が生育していたと想像される。またヤナギ属、クルミ属、ハンノキ属、クマシデ属－アサダ属、ニレ属－ケヤキ属、北トレンチ地山で多産するトネリコ属、南トレンチF3層で多いトチノキ属などの種類は、渓谷林や河畔林を形成する種類を含む分類群であることから、河道沿いに生育していたと推定される。この他にも、スギ属やマツ属といった針葉樹も周辺地域には分布していたことが考えられる。なお、山形盆地における調査例によれば、完新世になると落葉広葉樹のブナ属・コナラ亜属の花粉が多産するが、完新世後半になるとマツ属・スギ属が増加することが明らかにされている（松岡ほか，1984）。また、米沢城の二の丸堀跡埋積物の調査を行った際でも、堀下部の埋積物よりブナ属が多産する群集組成とマツ属が優占する群集が認められている（パリノ・サーヴェイ株式会社，未公表）。これらのことを考えると、本地域においてブナ属・コナラ亜属などを中心とする落葉広葉樹林は、中・近世頃まで続いていた可能性がある。この点については、花粉化石群集の消長を明らかにした上で検討していきたい。

一方、草本花粉や植物珪酸体をみると、河川跡（SG17）覆土で水生～湿性植物が特徴的に検出され、方形周溝墓（SU1・SU2）周溝内覆土で、山地・丘陵上や自然堤防上など比較的乾いた場所に生育するクマザサ属を含むタケ亜科が多産する。これより、河川沿いあるいはその周辺の湿地部に、ガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ヨシ属、イボクサ属、ミズアオイ属、コオホネ属、サンショウモなどが生育していたと考えられる。また、方墳が構築された自然堤防上などには、ササ類を含むタケ亜科、ススキ属、イチゴツナギ亜科、シバ属などのイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属を初めとして、クワ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、キク亜科、タンポポ亜科などが分布していた可能性がある。なお、方形周溝墓の周溝覆土からイネ属が産出することから、周溝が埋積される過程においてイネ属植物珪酸体が取り込まれたと考えられる。特に、SU1は、SU2に比べてイネ属の産出が目立ち、稲籾殻に形成される穎珪酸体や葉部に形成される短細胞列もわずかに認められる。これより、SU1の周溝覆土内にはイネの植物体が混入していた可能性がある。周溝内に人為的に廃棄された可能性もあるが、他の分類群に比べ僅かであるため、後代の影響も視野に入れておく。今後、付近におけるイネ属珪酸体の層位的・平面的な変化、覆土の埋積過程などについて検討した上で再考したい。

（４）植物利用状況

井戸枠試料は広葉樹材のブナ属とサカキであった。井戸枠の部位や形状等の詳細は不明であるが、この結果から少なくとも２種類の木材が利用されていたことがうかがえる。サカキは、重硬で強度の高い材質を有する。ブナ属も比較的重硬で強度が高い。このことから、強度の高い木材を選択した可能性がある。山形県内では、木原遺跡において平安時代の井戸枠に針葉樹のスギが認められた例があるが（財団法人山形県埋蔵文化財センター，1994）、ブナ属やサカキが利用された例は報告されていない。地域、形態、使用者などが木材利用に反映している可能性があるが、詳細は不明である。

一方、木材試料中から出土した種実遺体は、オニグルミであった。オニグルミは、河道沿いなどに比較的普通に見られる落葉広葉樹である。核の中の胚乳が生食可能であり、栄養価も高い。出土した核は、半分に割れていることから、周辺に生育していたオニグルミを食糧として利用した可能性がある。

（５）遺体埋納に関する検証

リン酸が土壌に普通に含まれる量、すなわち天然賦存量については、川崎ほか（1991）、天野ほか（1991）、Bowen（1983）、Bolt ＆ Bruggenwert（1980）などの調査例があり、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0P_2O_5mg／ｇ程度と考えられる（なお、各調査例の記載単位が異なるため、ここではすべてP_2O_5mg／ｇで統一している）。これらの観点で見ると、SK14のリン酸含量は、上記の天然賦存量の上限を上回る値である。本遺構では、種類を特定できなかったが焼骨が検出されている。本遺構におけるリン酸含量は、その影響が現れていると考えられる。一方、他の遺構は、いずれも天然賦存量の範囲内にある。これらの遺構においてリン酸含量を詳細にみると、SK15とSU58（RP156）が約1.2～1.6P_2O_5mg／ｇ、他の遺構が1.0P_2O_5mg／ｇ以下である。前者は、人骨が出土したSK14と重複関係にある、あるいは人骨が出土したとされる遺構である。そのためにリン酸含量が若干高かったと思われる。著しい富化が認められない原因としては、中根（1992）、中根・馬場（1995）、パリノ・サーヴェイ株式会社（1999）で認められるように同一遺構内でもリン酸含量に差があることを考慮すると、試料採取位置が遺体埋納箇所から離れていたことに由来する可能性がある。その他のSK13、SK16、SK59、SK60、SK75については、リン酸含量が極めて低いことから、今回の分析結果をみるかぎり、土坑内部に遺体が埋納されていた痕跡を認めることができない。

以上、今回の結果をみるかぎり、SK14を除く遺構については、リン酸の著しい富化を認めることができず、内部に遺体が埋納されていたか不明であり、土坑墓として利用されていたか判断できない。ところで、残留脂肪酸の分析を行った結果、コレステロールとコプロスタノールの多産と、アラキジン酸（C20）・ベヘン酸（C22）・リグノセリン酸（C24）の検出によって、墓坑内の埋葬の痕跡を認めることができるとされている（中野，1993；1995）。本土坑の用途については、これら脂肪酸分析など多角的な調査を行った上で改めて検証する必要があるだろう。

（６）赤色顔料の素材

検出鉱物において赤色を呈する鉱物は、赤鉄鉱（hematite）が代表的である。したがって、赤色顔料は、いわゆるベンガラと呼ばれる顔料と推察される。なお、他の検出鉱物は岩石や土壌にごく一般的に認められる鉱物であることから、顔料採取時に混入した鉱物と推定される。

引用文献

足立吟也　(1980)「６章 粉末Ｘ線回折法　機器分析のてびき３」．p. 64－76，化学同人．

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信（1991）中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，p. 28－36.

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，p. 73－88.

Asai, K. and Watanabe, T.（1995）Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution（２）Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10，p. 35－47.

Bowen, H. J. M.（1983)「環境無機化学　－元素の循環と生化学－」．浅見輝男・茅野充男訳，297p.，博友社［Bowen, H. J. M.（1979）Environmental Cemistry of Elements].

Bolt, G. H. & Bruggenwert, M. G. M.（1980)「土壌の化学」．岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽捷行訳，309p.，学会出版センター［Bolt, G. H. and Bruggenwert, M. G. M.（1976）SOIL CHEMISTRY]，p. 235－236.

土壌養分測定法委員会編（1981)「土壌養分分析法」．440p.，養賢堂.

原口和夫・三友　清・小林　弘（1998）埼玉の藻類　珪藻類．埼玉県植物誌，埼玉県教育委員会，p. 527－600.

伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会

誌，６，p. 23－45.
神保　悳・田宮良一・鈴木雅宏・北　卓治・大丸広一郎・本田康夫・加藤　啓・北崎　明・清水貞雄・佐藤康次郎・玉ノ井正俊・山田国洋・渡辺則道（1970）５万分の１地質図幅「米沢一関」および同説明書．山形県.
川崎　弘・吉田　澪・井上恒久（1991）九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，p. 23－27.
近藤錬三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，p. 31－64.
小杉正人（1989）珪藻化石群集の形成過程と古生態解析．日本ベントス研究会誌，35／36，p. 17－28.
小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p. 1－20.
Krammer, K.（1992）PINNULARIA, eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26, p. 1－353.，BERLIN・STUTTGART.
Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.（1986）Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2／1 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.（1988）Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2／2 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.（1991a）Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2／3 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.（1991b）Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritsche Ergaenzungen zu Navicula（Lineolatae）und Gomphonema.Band 2／4 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p.，Gustav Fischer Verlag.
松岡　功・阿久津　純・真鍋健一・竹内貞子（1984）山形盆地の第四系－特に地質年代と堆積環境について－．地質学雑誌，90，p. 531－549.
中根秀二（1992）１号方形周溝墓の自然科学的分析.「田園調布南２　都立田園調布高校内埋蔵文化財発掘調査報告書」，p. 133－149，都立学校遺跡調査会.
中根秀二・馬場健司（1995）周溝内における埋葬位置について．北区埋蔵文化財調査報告第16集「豊島馬場遺跡（本文編）」，p. 314－325，東京都北区教育委員会生涯学習推進課.
中野益男（1993）脂肪酸分析法.「第四紀試料研究法２　研究対象別分析法」，p. 388－403，東京大学出版会.
中野益男（1995）脂肪酸分析の現状と課題．考古学ジャーナル，386，p. 2－8.
日本粘土学会編（1987)「粘土ハンドブック　第二版」．1289p.，技報堂出版.
農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖.
パリノ・サーヴェイ株式会社（1999）豊島馬場遺跡の自然科学分析．北区埋蔵文化財調査報告第25集「豊島馬場遺跡Ⅱ」，p. 312－331，東京都北区教育委員会生涯学習推進課.
ペドロジスト懇談会編（1984)「土壌調査ハンドブック」．156p.，博友社.
山形県埋蔵文化財センター（1994）山形県埋蔵文化財センター調査報告書第８集「木原遺跡第２次発掘調査報告書」，37p.．

表１　分析試料の一覧

採取地点		層位	分析項目							備考
			^{14}C	D	P	PO	WS	リン	X線	
SU1	北ベルト	F2								
		F3				●				
SU2	北西ベルト	F1								
		F2								
	南ベルト	F2								
		F3				●				
SU5	西ベルト	F								
SU1	RP76	土器内覆土								
SU58	RP156	甕棺内覆土						●	●	赤色物質・人骨出土
SK12		F	●							人骨出土，^{14}Cは炭化物を測定
SK13		F						●		
SK14		F	●					●		人骨出土，^{14}Cは骨を測定
SK15		F						●		SK14と重複
SK16		F						●		
SK59		F1								
		F2						●		
SK60		F						●		
SK75		F						●		
SG17	北トレンチ	F1								
		F2								
		地山		●	●					古墳時代の地山
	南トレンチ	F1		●	●	●				
		F2								
		F3		●	●	●				
		F4	●	●	●	●				^{14}Cは土壌を測定
井戸枠							●			

凡例）^{14}C：放射性炭素年代測定（AMS）　D：珪藻分析　P：花粉分析　PO：植物珪酸体分析
WS：樹種および種実遺体同定　リン：リン分析　X線：X線回折分析

表２　放射性炭素年代測定結果

地点	採取層位	質	測定重量	測定年代	δ13C（‰）	同位体補正年代	測定番号
SK12	F層	炭化物	0.19g	330 ± 30	-28.83 ± 1.02	300 ± 30	IAAA-10737
SK14	F層	骨	5.50g	4540 ± 70	-51.26 ± 1.14	4320 ± 70	IAAA-10738
SG17南トレンチ	F４層	暗灰色砂中の有機物	447.41g	1500 ± 30	-29.74 ± 0.93	1460 ± 30	IAAA-10739

注．(1) 年代値：1,950年を基点とした値。
(2) 誤差：標準偏差（ONE SIGMA）に相当する年代
(3) δ^{13}C：試料炭素の^{13}C／^{12}C原子比を質量分析器で測定し、標準にPDBを用いて同様に算出した値

表３　珪藻分析結果（１）

種　　類	生態性			環境	SG17			
					北Tr.	南Tr.		
	塩分	pH	流水	指標種	地山	F1	F3	F4
Actinocyclus ingens Rattray	Euh				-	1	-	-
Cyclotella meneghiniana Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	l-ph	L, S	-	-	1	-
Fragilaria brevistriata Grunow	Ogh-Meh	al-il	l-ph	U	-	-	1	-
Gomphonema pseudoaugur Lange-Bertalot	Ogh-Meh	al-il	ind	S	-	-	1	-
Nitzschia obtusa var. scalpelliformis Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	S	-	-	-	4
Nitzschia palea (Kuetz.)W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	-	-	-	46
Rhopalodia gibberula (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind		-	17	1	1
Achnanthes convergens H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	r-ph	T	-	-	13	-
Achnanthes japonica H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-bi	J, T	-	-	1	-
Achnanthes lanceolata (Breb.)Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K, T	-	-	2	-
Achnanthes marginulata Grunow	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	1	-
Achnanthes minutissima Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	5	-
Achnanthes oestrupii (Cl.)Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	1	-
Achnanthes spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	1
Actinella brasiliensis Grunow	Ogh-ind	ac-il	l-bi	O	-	1	1	-
Amphora affinis Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	13	1	-
Amphora normanii Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	1
Amphora ovalis (Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	1	-	-
Aulacoseira alpigena (Grun.)Krammer	Ogh-hob	ac-il	l-bi	N, U	-	-	1	-
Aulacoseira ambigua (Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	N	-	-	4	-
Aulacoseira italica var. valida (Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	-	1	-
Caloneis bacillum (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	1	1
Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	-	7	-	-
Ceratoneis arcus var. hattoriana Meister	Ogh-ind	ind	r-bi	J	-	-	1	-
Ceratoneis arcus var. recta (Cl.)Krasske	Ogh-ind	ind	r-bi	T	-	-	5	-
Cocconeis placentula (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	2	6	2
Cocconeis placentula var. euglypta (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	1	-	-
Cymbella cistula (Ehr.)Kirchner	Ogh-ind	al-il	l-ph	O, T	-	-	-	1
Cymbella cuspidata Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind		-	2	-	-
Cymbella gracilis (Ehr.)Kuetzing	Ogh-ind	ind	l-ph	T	-	-	1	-
Cymbella heteropleura Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind		-	1	-	-
Cymbella heteropleura var. minor Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	1	-	-
Cymbella japonica Reichelt	Ogh-unk	unk	unk	T	-	2	1	4
Cymbella minuta Hilse ex Rabh.	Ogh-ind	ind	r-ph	K, T	-	-	2	-
Cymbella naviculiformis Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	O	-	1	1	-
Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	4	-
Cymbella sinuata Gregory	Ogh-ind	ind	r-ph	K, T	-	-	1	1
Cymbella tumida (Breb. ex Kuetz.)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	-	1	1
Cymbella tumida var. gracilis Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	-	1	-
Cymbella turgidula var. nipponica Skvortzow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	-	2	3	1
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	5	-	-
Diatoma hyemals var. mesodon (Ehr.)Kirchener	Ogh-ind	al-il	r-bi	K, T	-	3	8	1
Diatomella balfouriana (W.Smith)Grevil	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	1	-
Diploneis ovalis (Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	1	-
Eunotia bilunaris (Ehr.)Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	4	6	-
Eunotia duplicoraphis H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	2	-
Eunotia formica Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-bi		-	-	1	-
Eunotia implicata Noepel & Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	1	-
Eunotia incisa W.Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	-	1	-
Eunotia meisteri Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	1	-
Eunotia monodon var. asiatica Skvortzow	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	1	-
Eunotia naegelii Migula	Ogh-hob	ac-il	ind		-	1	-	-
Eunotia pectinalis var. minor (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	2	12	-
Eunotia praerupta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB, O, T	-	-	1	-
Eunotia praerupta var. bidens Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB, O	-	1	-	-
Eunotia praerupta var. curta Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph	RB	-	-	1	-
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	3	1	-
Fragilaria capucina Desmazieres	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	2	-
Fragilaria capucina var. gracilis (Oestr.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	T	-	-	11	-
Fragilaria capucina var. rumpens (Kuetz.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	-	1	-
Fragilaria construens fo. venter (Ehr.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	-	-	1	-
Fragilaria leptostauron (Ehr.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	-	1	-
Fragilaria pinnata var. lancettula (Schum.)Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	-	1	-
Fragilaria ulna (Nitzsch)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		1	2	6	2
Fragilaria vaucheriae (Kuetz.)Petersen	Ogh-ind	al-il	r-ph	K, T	-	1	18	2
Fragilaria spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	1	-	1
Frustulia rhomboides (Ehr.)De Toni	Ogh-hob	ac-il	l-ph	P	-	-	1	-
Frustulia rhomboides var. amphipleuroides (Grun.)De Toni	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	1	-
Frustulia vulgaris (Thwait.)De Toni	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	3	-
Frustulia weinholdii Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	1	-
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	1	1	-
Gomphonema angustatum (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	2	-	-
Gomphonema angustum Agardh	Ogh-ind	al-il	ind		-	1	-	-
Gomphonema clevei Fricke	Ogh-ind	al-bi	r-ph	T	-	2	1	1
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O, U	-	1	1	-
Gomphonema helveticum Brun	Ogh-unk	ind	r-ph	T	-	-	9	-
Gomphonema olivaceum var. minutissimum Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	3	-
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	-	15	14	1

表３　珪藻分析結果（２）

種　　類	生態性			環境				
	塩分	pH	流水	指標種	地山	F1	F3	F4
Gomphonema parvulum var. lagenula (Kuetzing)Frenguelli	Ogh-ind	ind	r-ph	S	-	-	2	-
Gomphonema pumilum (Grun.)Reichardt & Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		-	1	1	-
Gomphonema quadripunctatum (Oestrup.)Wislouch	Ogh-ind	al-bi	r-ph	K,T	-	-	1	-
Gomphonema sumatorense Fricke	Ogh-ind	ind	r-bi	J	1	13	1	4
Gomphonema truncatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	T	-	-	1	-
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		3	1	-	1
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	-	12	-	3
Meridion circulae Agardh	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	-	-	3	-
Meridion circulae var. constrictum (Ralfs)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	-	14	3	-
Navicula ariiensis Okuno	Ogh-unk	unk	unk		-	1	-	-
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	-	3	-	-
Navicula contenta fo. biceps (Arnott)Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	-	2	-	-
Navicula elginensis (Greg.)Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	-	2	-	-
Navicula mobiliensis var. minor Patrick	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	3	-
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	-	31	2	2
Navicula placenta Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	RI	-	-	1	-
Navicula radiosa Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	1	-
Navicula venerablis Hohn & Hellerman	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	-	1	-
Navicula viridula var. rostellata (Kuetz.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	-	-	-	1
Navicula spp.	Ogh unk	unk	unk		1	-	-	-
Neidium ampliatum (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		-	2	1	-
Neidium bisulcatum (Lagerst.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	RI	-	-	2	1
Neidium iridis (Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-bi	O	-	1	-	-
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	-	-	4	-
Nitzschia denticula (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RA,U	-	-	1	-
Nitzschia intermedia Hantzsch ex Cleve et Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		-	-	-	1
Nitzschia nana Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RB,S	1	-	-	6
Nitzschia tubicola Grunow	Ogh-unk	unk	unk		-	-	-	2
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	-	1	-	-
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	1	-	-
Pinnularia divergens W.Smith	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	1	-
Pinnularia mesolepta (Ehr.)W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	S	-	-	-	1
Pinnularia nodosa Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	1	-	-	-
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	1	-	3
Pinnularia stomatophora var. triundulata (Font.)Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind		-	-	1	-
Pinnularia substomatophora Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		-	-	1	-
Pinnularia viridis (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	-	2	-	1
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	13	-	-
Stauroneis obtusa Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	1
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	1	1	-
Stauroneis tenera Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	1	-	-
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	-	-
Surirella angusta Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	-	-	1	4
Surirella ovata var. pinnata (W.Smith)Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	1	-
Tabellaria flocculosa (Roth)Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-bi	T	-	1	17	3
海水生種合計					0	1	0	0
海水～汽水生種合計					0	0	0	0
汽水生種合計					0	0	0	0
淡水～汽水生種合計					0	17	4	51
淡水生種合計					11	184	224	55
珪藻化石総数					11	202	228	106

凡例

H.R ：塩分濃度に対する適応性
- Euh ：海水生種
- Ogh-Meh ：淡水－汽水生種
- Ogh-ind ：貧塩不定性種
- Ogh-hob ：貧塩嫌塩性種
- Ogh-unk ：貧塩不明種

pH：水素イオン濃度に対する適応性
- al-bi ：真アルカリ性種
- al-il ：好アルカリ性種
- ind ：pH 不定性種
- ac-il ：好酸性種
- unk ：pH 不明種

C.R ：流水に対する適応性
- l-bi ：真止水性種
- l-ph ：好止水性種
- ind ：流水不定性種
- r-ph ：好流水性種
- r-bi ：真流水性種
- unk ：流水不明種

環境指標種群

J:上流性河川指標種,K:中～下流性河川指標種,L:最下流性河川指標種,N:湖沼沼沢湿地指標種,
O:沼沢湿地付着生種, P:高層湿原指標種（以上は安藤, 1990）
S:好汚濁性種, U:広域適応性種, T:好清水性種（以上は Asai, K. & Watanabe, T., 1986）
R:陸生珪藻（RA:A 群, RB:B 群, RI 群、伊藤・堀内, 1991）

表４　花粉分析結果

種　　類	北Tr.	SG17 南Tr.		
試料番号	地山	F1	F3	F4
木本花粉				
モミ属	2	3	1	-
ツガ属	1	-	3	-
トウヒ属	2	-	1	-
マツ属単維管束亜属	1	8	5	-
マツ属複維管束亜属	10	14	7	-
マツ属（不明）	9	18	11	-
コウヤマキ属	-	2	1	-
スギ属	33	39	46	2
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	8	2	5	-
ヤナギ属	2	3	11	-
クルミ属	11	24	32	-
クマシデ属－アサダ属	11	8	13	1
カバノキ属	2	3	8	-
ハンノキ属	16	47	32	-
ブナ属	74	40	32	-
コナラ属コナラ亜属	36	41	51	2
コナラ属アカガシ亜属	2	2	1	-
クリ属	-	2	-	-
ニレ属－ケヤキ属	4	7	15	-
エノキ属－ムクノキ属	1	-	1	-
モチノキ属	-	-	1	-
ニシキギ属	1	-	-	-
カエデ属	-	-	1	-
トチノキ属	2	-	13	-
ブドウ属	-	-	2	-
ノブドウ属	1	-	-	-
シナノキ属	-	-	1	-
ウコギ科	-	-	1	-
イボタノキ属	-	1	-	-
トネリコ属	23	-	2	-
ガマズミ属	1	1	4	-
草本花粉				
ガマ属	2	7	-	-
サジオモダカ属	-	1	-	-
オモダカ属	1	2	-	-
イネ科	45	125	28	3
カヤツリグサ科	16	133	33	-
イボクサ属	-	1	-	-
ミズアオイ属	2	-	-	-
クワ科	2	2	2	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	4	1	2	-
アカザ科	2	-	-	-
ナデシコ科	1	-	-	-
コオホネ属	-	-	1	-
カラマツソウ属	-	1	6	-
キンポウゲ科	1	-	-	-
ツリフネソウ属	1	1	-	-
ヨモギ属	69	41	28	3
キク亜科	3	2	1	1
タンポポ亜科	-	1	1	-
不明花粉	8	16	17	-
シダ類胞子				
ヒカゲノカズラ属	-	-	-	1
ゼンマイ属	9	-	1	-
サンショウモ	1	-	-	-
他のシダ類胞子	76	109	49	8
合　計				
木本花粉	253	265	301	5
草本花粉	149	318	102	7
不明花粉	8	16	17	0
シダ類胞子	86	109	50	9
総計（不明を除く）	488	692	453	21

表５　植物珪酸体分析結果

種　　類	SU1 北Tr.	SU2 南Tr.	SG17 南Tr.		
試料番号	F3	F3	F1	F3	F4
イネ科葉部短細胞珪酸体					
イネ族イネ属	21	1	-	-	-
タケ亜科クマザサ属	14	13	-	-	-
タケ亜科	47	45	3	11	-
ヨシ属	20	27	236	5	-
ウシクサ族ススキ属	19	32	4	1	-
イチゴツナギ亜科	8	7	1	-	-
不明キビ型	61	69	11	10	-
不明ヒゲシバ型	22	21	6	2	-
不明ダンチク型	19	28	1	3	-
イネ科葉身機動細胞珪酸体					
イネ族イネ属	2	1	-	-	-
タケ亜科クマザサ属	29	28	-	-	2
タケ亜科	36	39	3	-	-
ヨシ属	-	6	101	7	-
ウシクサ族	5	13	-	-	-
シバ属	2	-	-	-	-
不明	36	25	8	5	-
合　計					
イネ科葉部短細胞珪酸体	231	243	262	32	0
イネ科葉身機動細胞珪酸体	110	112	112	12	2
総　計	341	355	374	44	2
組　織　片					
イネ属穎珪酸体	2	-	-	-	-
イネ属短細胞列	5	-	-	-	-

表６　リン分析結果

採取地点	層位	土性	土色	P_2O_5 (mg/g)	備考
SK13	F	LiC	10YR3/3　暗褐	0.79	
SK14	F	LiC	10YR3/2　黒褐	5.70	人骨出土
SK15	F	LiC	10YR3/2　黒褐	1.16	SK14と重複
SK16	F	LiC	10YR4/4　にぶい黄褐	0.72	
SK59	F2	LiC	10YR3/2　黒褐	0.75	
SK60	F	LiC	10YR3/2　黒褐	0.90	
SK75	F	LiC	10YR3/2　黒褐	0.99	
SU58（RP156）	甕棺内覆土	LiC	10YR3/4　暗褐	1.54	赤色物質・人骨出土

注１）土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。

注２）土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性による。

LiC･･･軽埴土（粘土25～45%、シルト0～45%、砂10～55%）

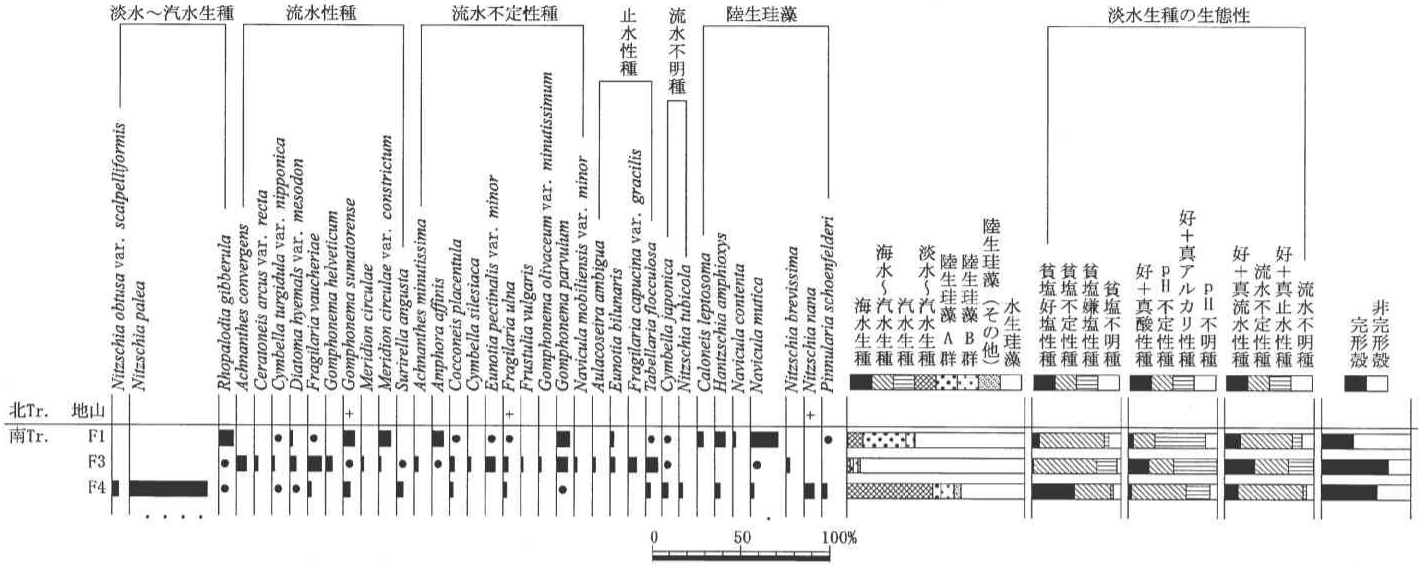


図１　主要珪藻化石群集の層位分布

各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。なお、●は１％未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

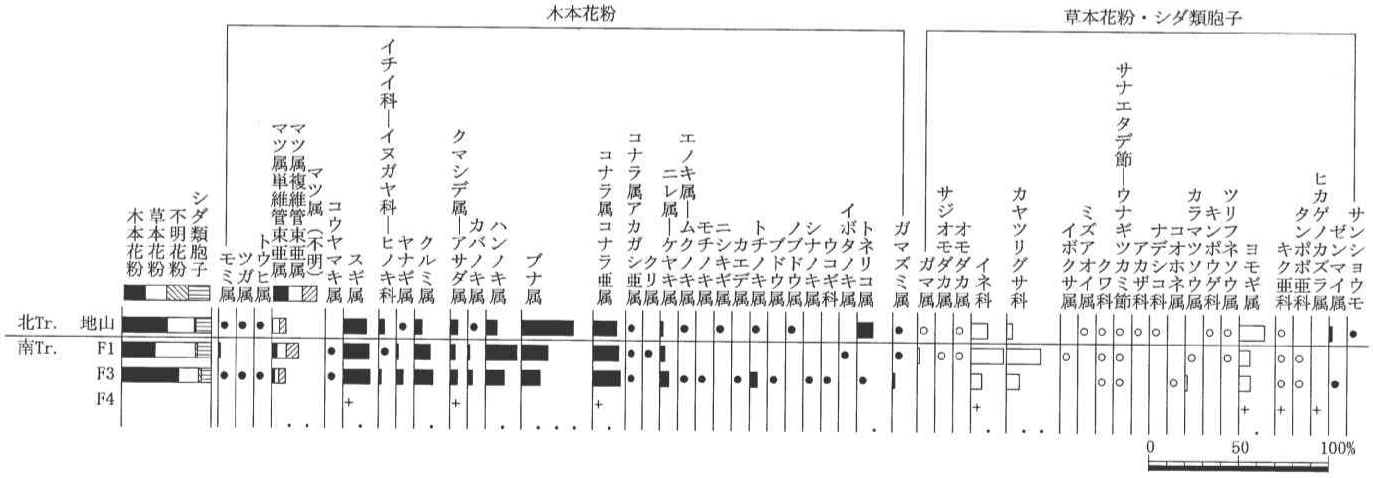


図２　主要花粉化石群集の層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は１％未満、＋は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

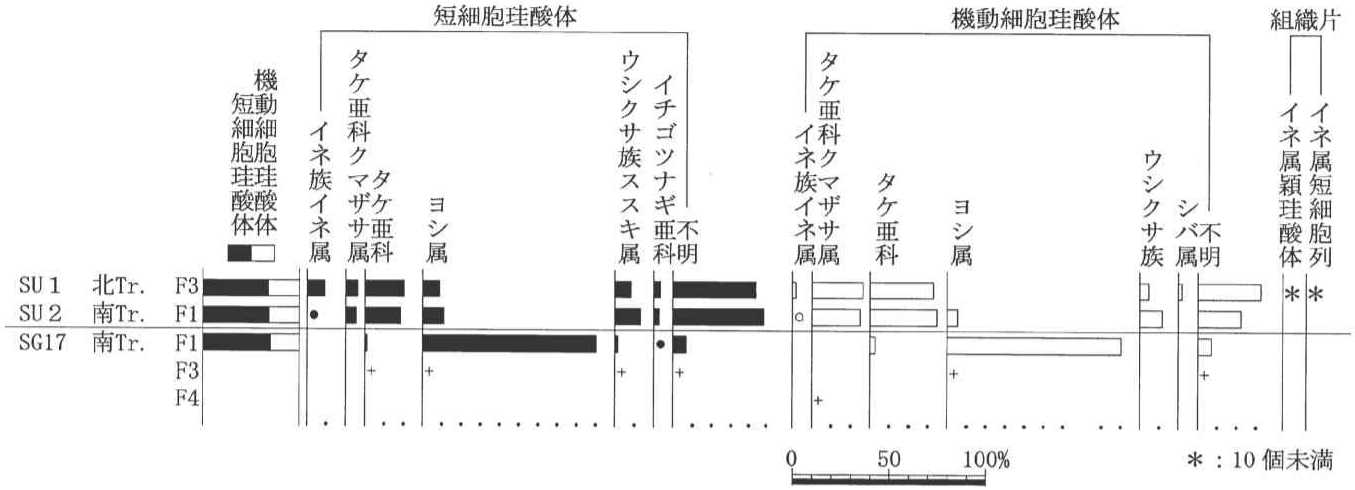


図３　植物珪酸体群集と組織片の産状
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は１％未満の種類を示す。また、組織片の産状を検出個数により＊の記号で示す。

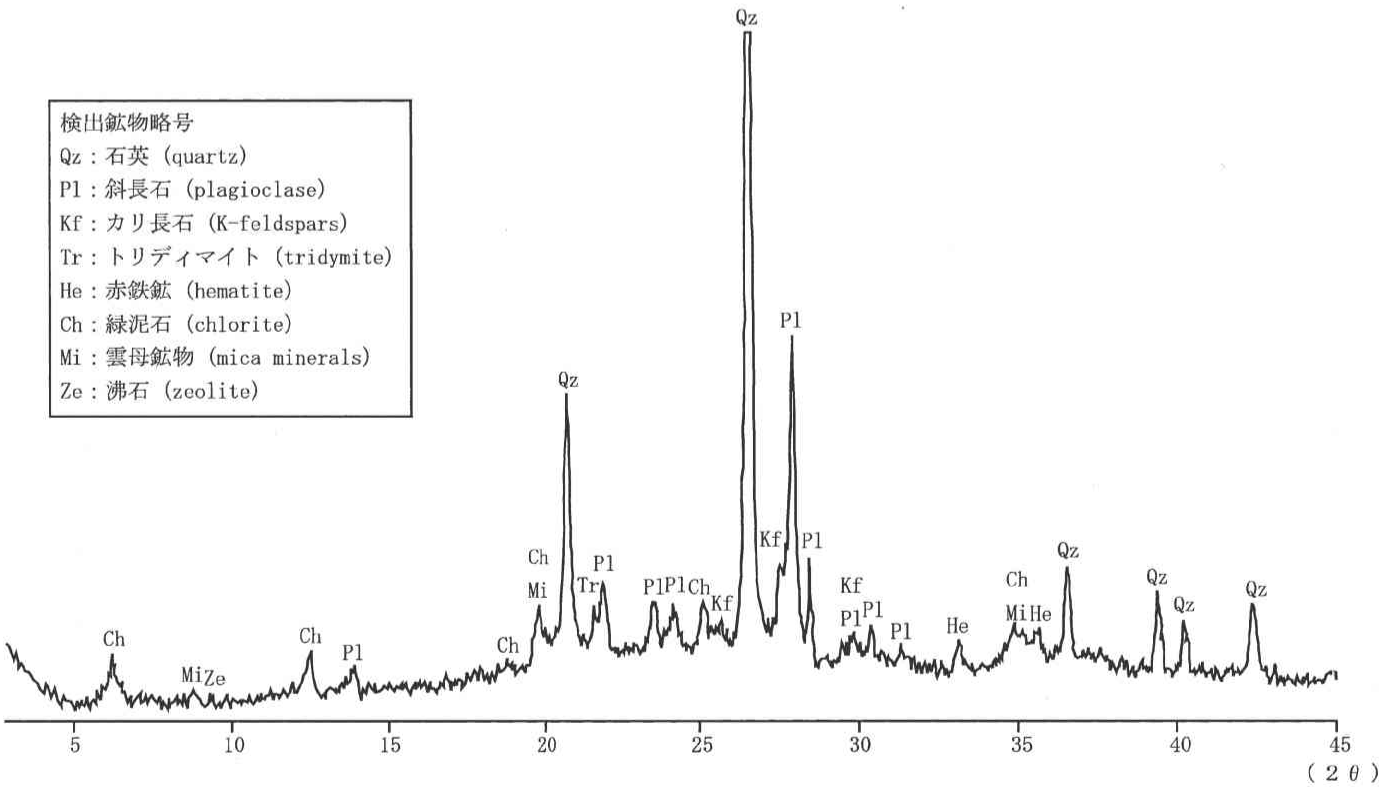
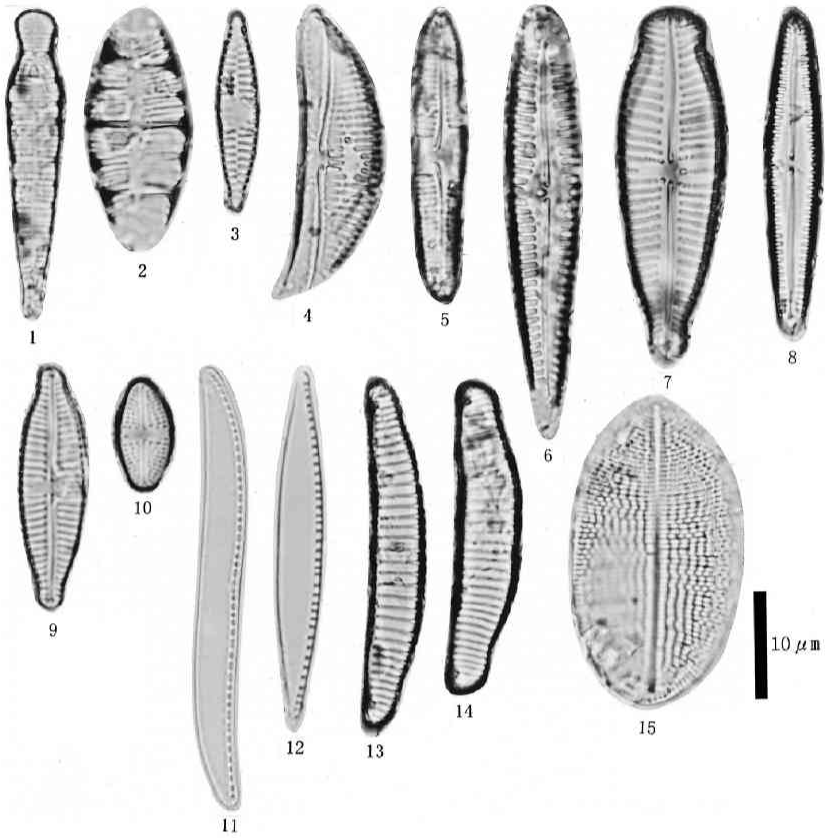


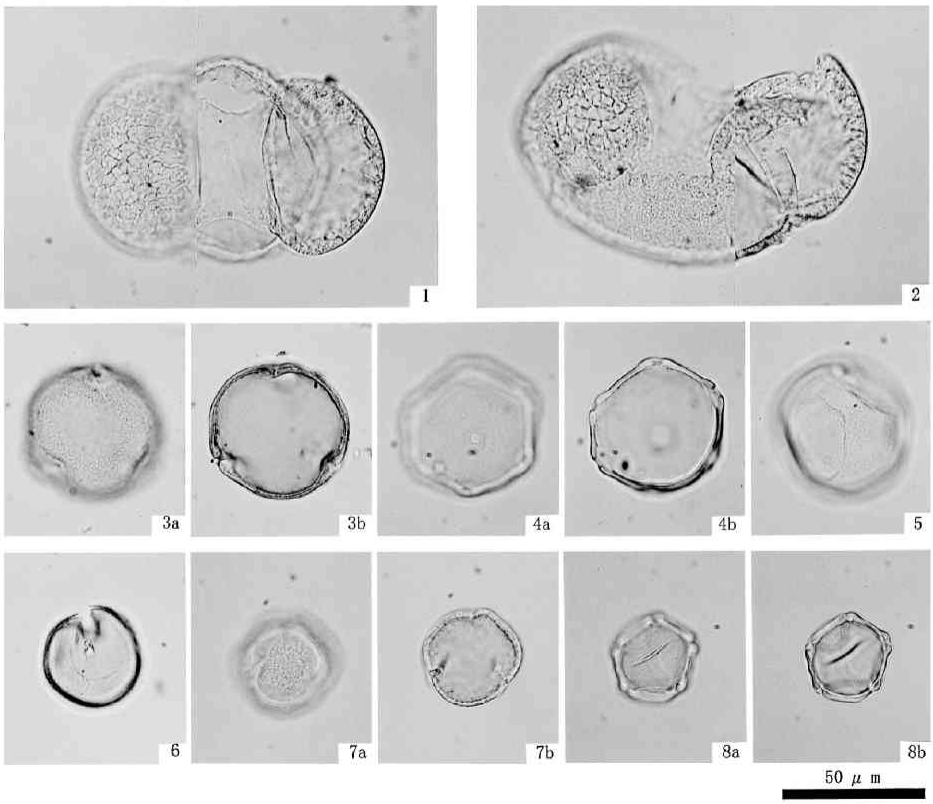
図４　赤色顔料のＸ線回折

図版１　珪藻化石



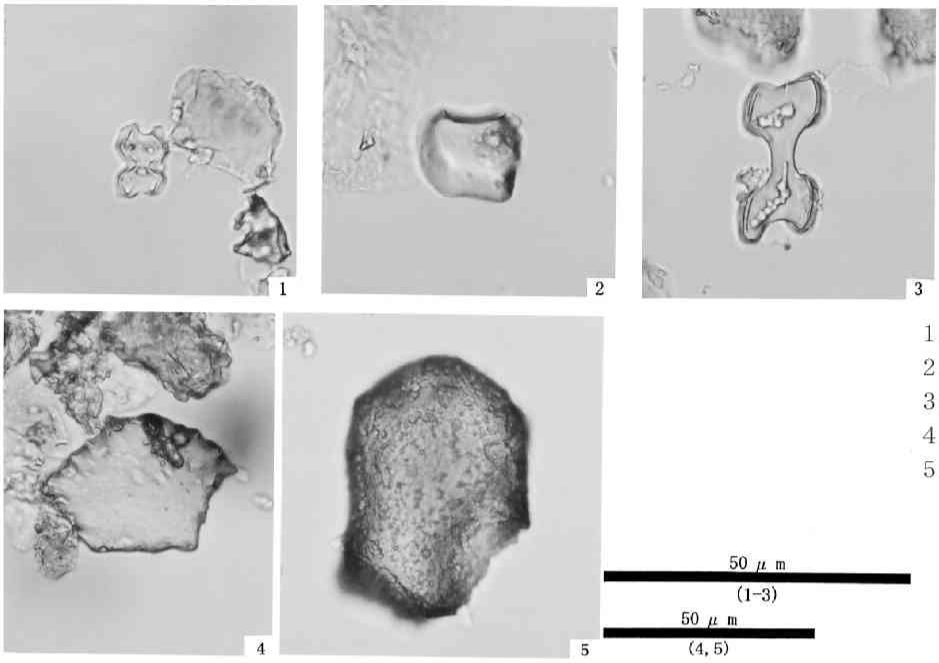
1. *Meridion sirculae var. constrictum* (Ralfs)V. Heurck(SG17南トレンチ;F1)
2. *Diatoma hyemals var. mesodon* (Ehr.)Kirchener(SG17南トレンチ;F1)
3. *Fragilaria vaucheriae* (Kuetz.)Petersen(SG17南トレンチ;F3)
4. *Amphora affinis* Kuetzing (SG17南トレンチ;F1)
5. *Galoneis leptosoma* Krammer & Lange-Bertalot (SG17南トレンチ;F1)
6. *Gomphonema sumatorense* Fricke (SG17南トレンチ;F1)
7. *Gomphonema helveticum* Brun (SG17南トレンチ;F3)
8. *Gomphonema clevei* Fricke (SG17南トレンチ;F3)
9. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (SG17南トレンチ;F1)
10. *Navicula mutica* Kuetzing (SG17南トレンチ;F1)
11. *Nitzschia nana* Grunow (SG17南トレンチ;F4)
12. *Nitzschia palea* (Kuetz.)W. Smith (SG17南トレンチ;F4)
13. *Eunotia duplicoraphis* H. Kobayashi (SG17南トレンチ;F3)
14. *Eunotia pectinalis var. minor* (Kuetz.)Rabenhorst (SG17南トレンチ;F3)
15. *Coconeis placentula* (Ehr.)Cleve (SG17南トレンチ;F1)

図版２　花粉化石



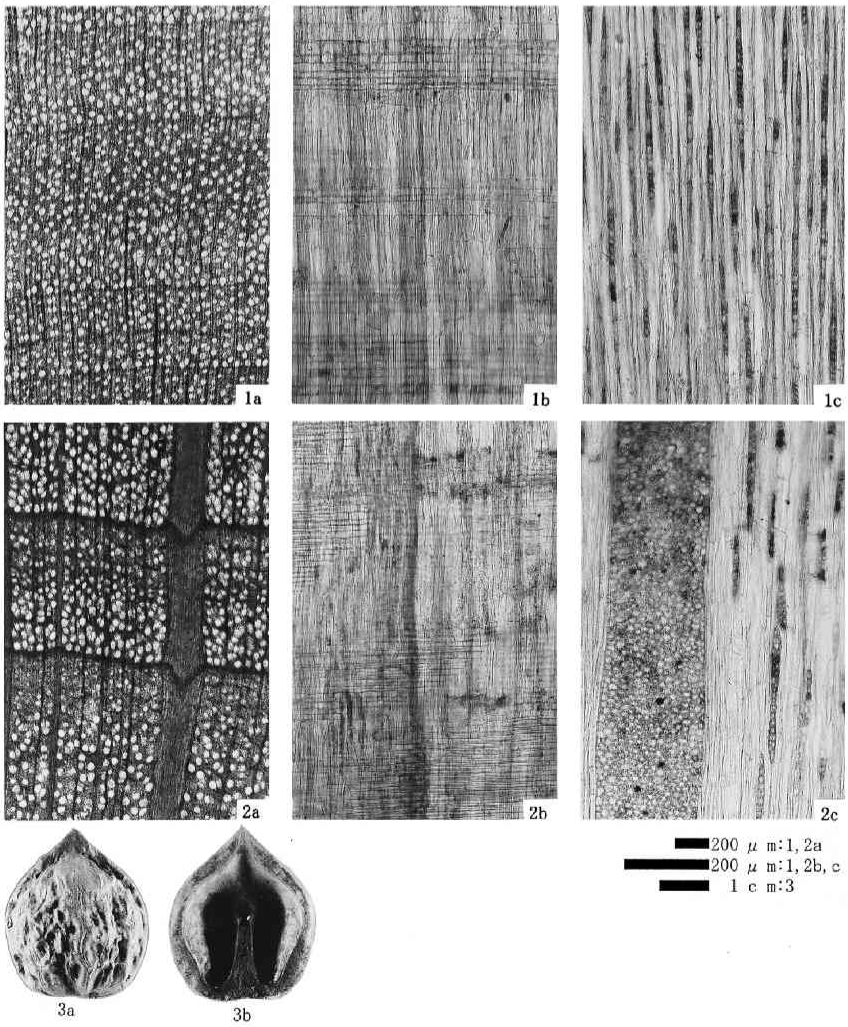
1．マツ属複維管束亜属（SG17南トレンチ;F3）
2．マツ属単維管束亜属（SG17南トレンチ;F3）
3．ブナ属（SG17北トレンチ;地山）
4．クルミ属（SG17南トレンチ;F3）
5．イネ科（SG17南トレンチ;F3）
6．スギ属(SG17北トレンチ;地山)
7．コナラ属コナラ亜種（SG17南トレンチ;F3）
8．ハンノキ属（SG17南トレンチ;F3）

図版３　植物珪酸体



1．イネ属短細胞珪酸体(SU1北ベルト;F3)
2．ヨシ属短細胞珪酸体(SG17南トレンチ;F1)
3．ススキ属短細胞珪酸体(SU1北ベルト;F3)
4．クマザサ属機動細胞珪酸体(SU1北ベルト;F3)
5．ヨシ属機動細胞珪酸体(SG17南トレンチ;F1)

図版４　木材・種実遺体



1．ブナ属(井戸枠試料) a:木口，b:柾目，c:板目
2．サカキ(井戸枠試料) a:木口，b:柾目，c:板目
3．オニグルミ(井戸枠試料)

附篇　　米沢市 北小屋屋敷遺跡の立地環境

阿子島　功

１．米沢市北小屋屋敷遺跡とその位置

北小屋屋敷遺跡は、米沢市の北端の窪田町窪田にある。最上川(松川)をへだてて、その東北約１㎞に高畠町のJR糠ノ目駅がある。この遺跡の位置は、米沢盆地のほぼ中央にあたり、最上川(松川)の左岸(西岸)の氾濫原のなかの微高地を占める。北小屋屋敷遺跡は、地割から一辺約90ｍの中世の方形館跡として遺跡登録されていたが、平成13年に県営圃場整備事業にともなう緊急発掘調査が行われて、古墳時代中後期の方形古墳群、中～近世の館・屋敷跡であることがわかった（山形県埋蔵文化財センター,2001.7現地説明会資料）。発掘調査区の広さは4700㎡、発見された古墳は５基である（写真１）。

２．米沢市北小屋屋敷遺跡とその周辺の地形

北小屋屋敷遺跡の周辺は、米沢盆地中央部で最上川(松川)、鬼面川、天王川などが合流するところであり、それぞれの川にそった自然堤防とその間の後背湿地とが交互に配置している(図１)。東側の低地は天王川や和田川の扇状地が終わって手指状の自然堤防がのびてきているところであり、最上川の側刻によって形成された崖は、最上川の東側ではとくに明瞭である。これは天王川や和田川の扇状地がおわってもしばらくの区間は地表の傾斜があって、これを最上川が側方侵食したためである。一方、最上川の蛇行帯の西側ではこの側刻崖が比高１ｍ程度とやや不明瞭ではあるが、南より北へ連なる微高地（館・三軒屋・上町・宮町・共栄の微高地）の東側を縁どっている。低地面のこれらの起伏・高度関係は1ｍ間隔等高線図(図４)にも、よく表われている。

北小屋屋敷遺跡は、最上川西岸の幅約0.5㎞ほどの蛇行帯低地のなかの旧河道に縁どられた中州状の微高地上にある。付近の微高地上に古墳や遺物包含地が点在している（図３の米沢市域に加筆　●印は古墳時代・奈良平安時代遺跡、□中世遺跡である)。

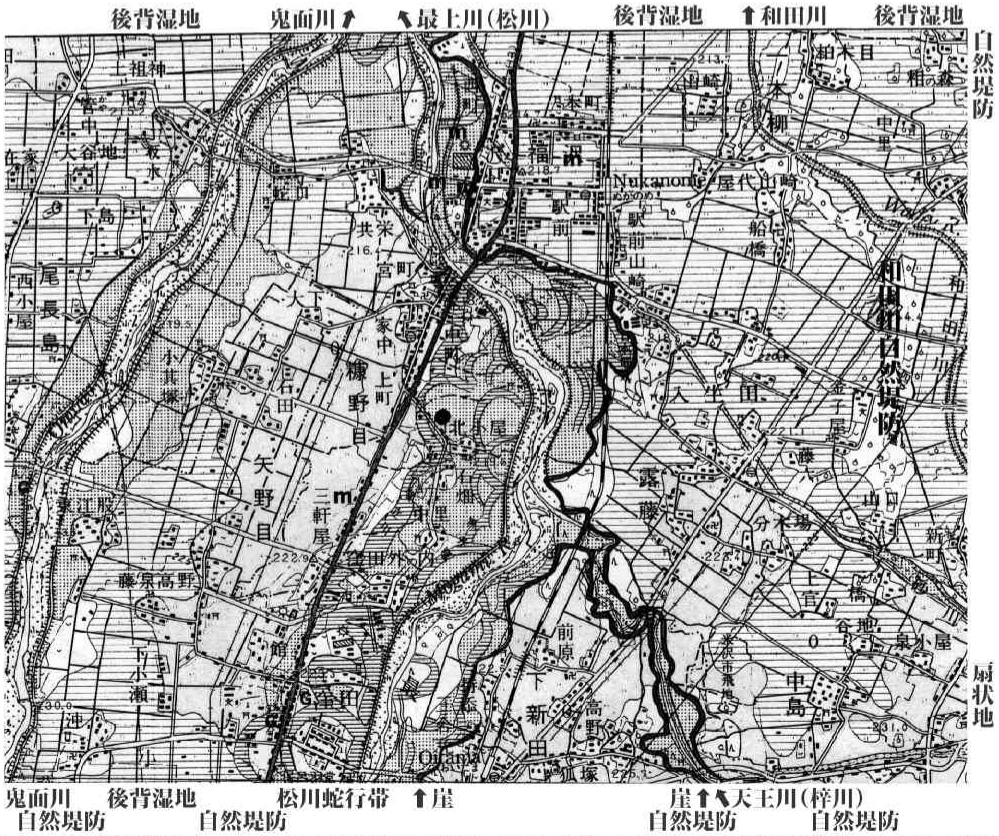


図１　北小屋屋敷遺跡(●)とその周辺の微地形(1:50,000地形分類図「米沢・関」1985より)

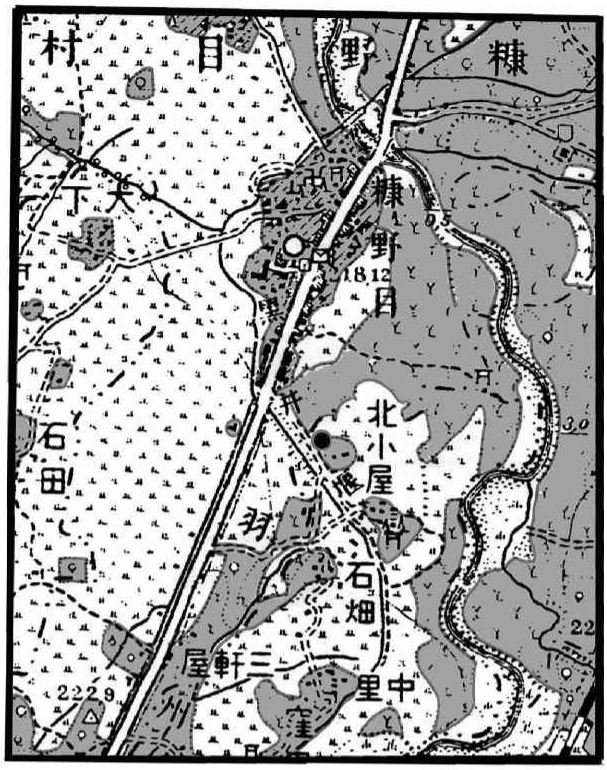


図２　M31測　1:50,000図の微高地　○は役所記号

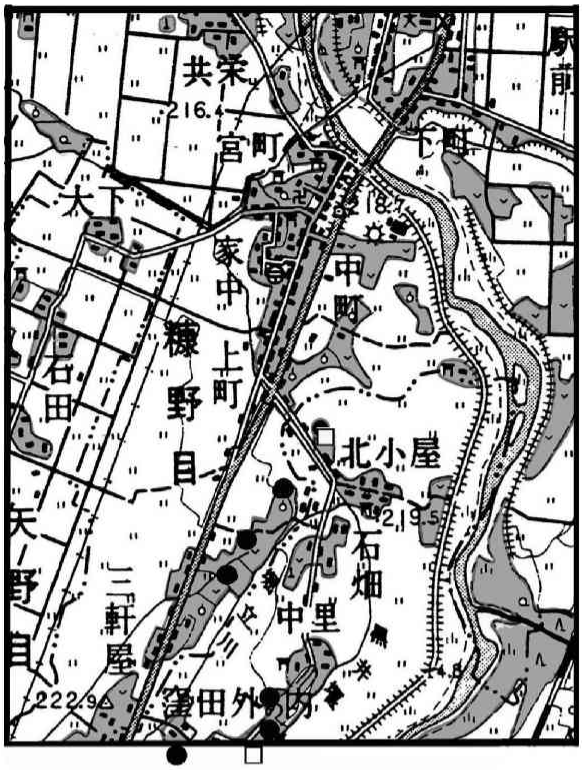


図３　S49編　1:50,000図の微高地と遺跡(●□)

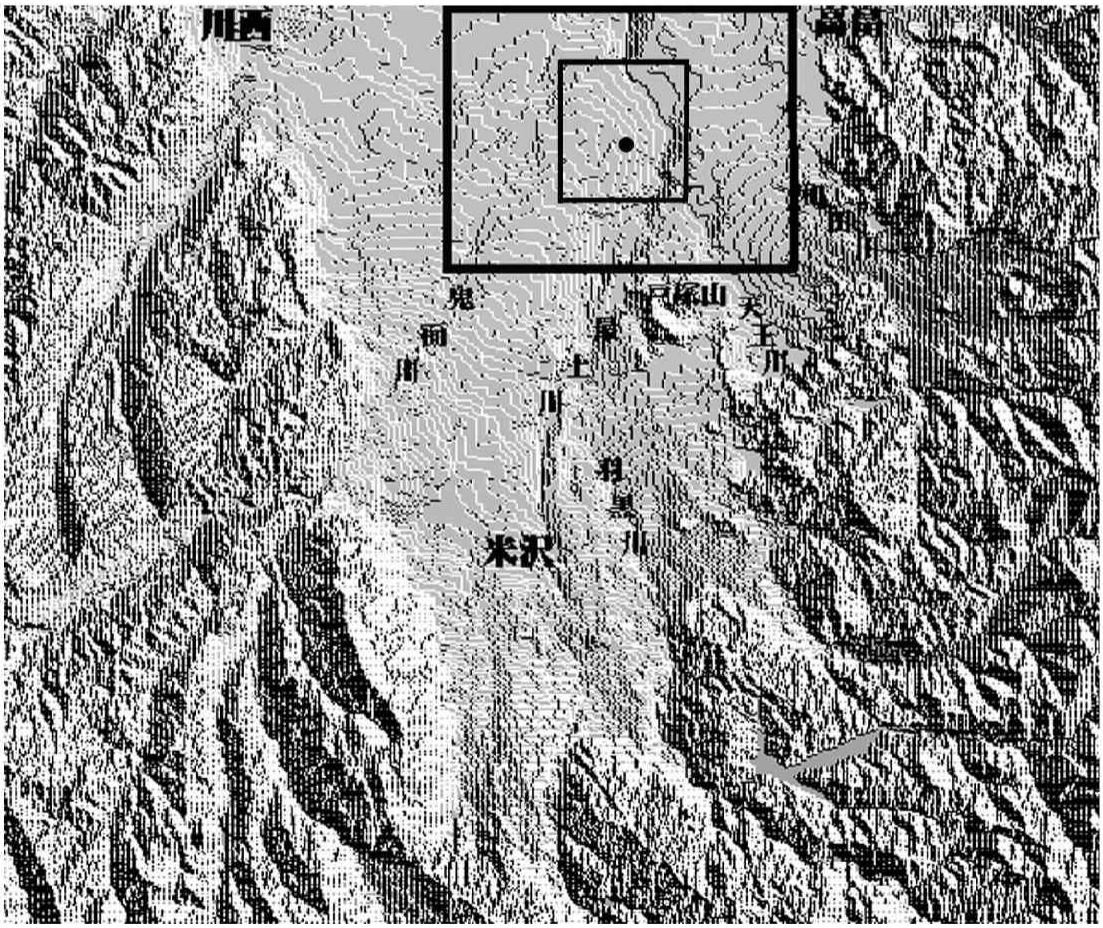


図４　1:50,000米沢図幅範囲の地勢(1m間隔等高線による)。図1,2,3の範囲をそれぞれ記入。
●　北小屋屋敷遺跡

３．米沢市北小屋屋敷遺跡付近の微地形と土地利用

(字)北小屋の微高地を縁取る旧河道にそって黒井堰（黒井半四郎の建議で寛政7＝1794年に完成)、堀立川、市町境界などが走っている。図２は明治31年測　1:50,000地形図の土地利用から微高地を塗色したものであり、図３は昭和49年編集　1:50,000地形図の土地利用から微高地を塗色したものである。総じてM31年図には桑畑が多かったが、S49年図までに水田に変えられている部分がある。水田に変えられた部分の平面形は弧形が多いので、旧河道の低みに

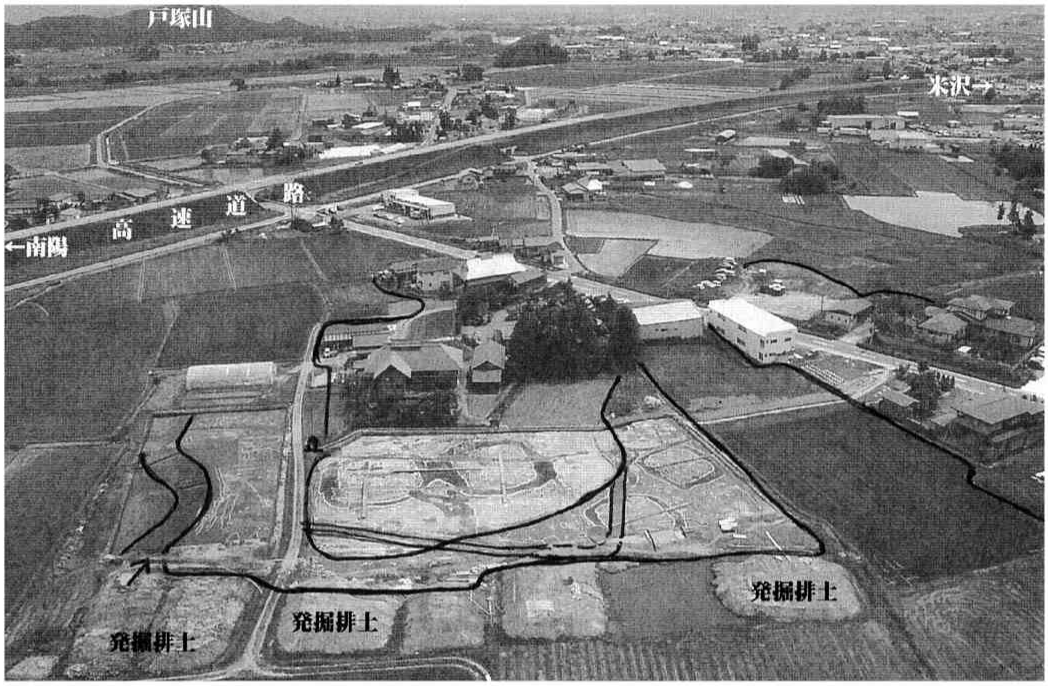


写真１　北上空よりみた北小屋屋敷遺跡　くくり線は微高地の中心と外縁を示す。
Ａ区で直交する溝と、Ｂ区の旧河道を記入。

写真２　発掘区Ａ区の垂直写真。上が南。

写真３　北小屋屋敷遺跡の北西側の旧河道低地とその前方の微高地

微高地頂部の砂礫の地山層

写真４　北小屋屋敷遺跡のＡ区南東部分

写真５　Ａ区中央～東北部分

写真６　Ａ区全景。手前が北側の落ち込み。地とその前方の微高地

そって水田へと転換されたのであろう。この微高地上の発掘区Ａ区の現況は水田であったが、聞き取りによれば数10年前に打ち込み井戸(現存)にたよって水田に転換したという。

４．米沢市北小屋屋敷遺跡の発掘区の微地形と堆積土層

Ａ区の中央～南東部分(方形墳1･2･3の部分)が最も高く、北側より0.5m程度高い。西へは緩く低くなり発掘区の西外側では1段低い水路・水田となっている。東側のＢ区はＡ区の最も高い部分より0.5mほど低く、その中央に幅5～10mの河道跡が検出された。写真６は発掘完了後に雨水がたまった状況であり微起伏がよく現われている。

遺構の地山層は、Ａ区の最も高い部分では、厚さ0.2～0.3mの(礫まじり)中粒砂層とその下位の砂礫層(層厚数10cm以上、下限不明、礫径最大は0.1m)である。上位の中粒砂層は北側と北西側の低みにむかって厚くなっている。写真２(完掘状態)の明るい(乾燥している)部分は砂礫層が浅く露出する部分、暗い(湿った)部分は中粒砂層が厚い部分である。すなわち、この微高地は中州状の砂礫堆であり、古墳時代中後期には墓域となっていた。

東側の河道の時期は古墳時代中～後期である。河道の地表下約2mのＦ4層の有機質の^{14}C年代が，約1,460±年前であった(附篇.理化学分析の項)。旧河道の黒くみえる埋積層Ｆ1層は最大厚さ0.3mである。珪藻分析によれば－2m付近は流水、最上部のＦ1層は乾いてきた状態であった。旧河道の岸はＦ1層だけが明瞭で、Ｆ4層の西側の立ちあがりはわからなかった。

砂礫堆の頂部は、中～近世に削平・整地されて、溝で区画された館・屋敷内になった（東の区画はＢ区の河道跡を含むことはなくＡ・Ｂ区境界の農道・水路部分の精査が必要、南の区画は現況築山の盛り土部分付近であろうか)。頂部における古墳時代と中近世の生活面に高度差はほとんど認められず、現在までの堆積もあまりない（両時期の遺構確認面は同一水準で、耕作土の下限付近にある)。微地形は^{14}C年代で約1500年前には約2.5mの比高があったが、土器年代の1600－1500年前にはすでに起伏が小さくなって、現在の起伏がほとんど成立していた。

図　　版

調査区全景完掘状況（↑上：合成写真）

図版２

調査区遠景（↑N）

A区完掘状況（↑S）

A区近景（↑E）

A区南壁西側土層断面（↑NE）

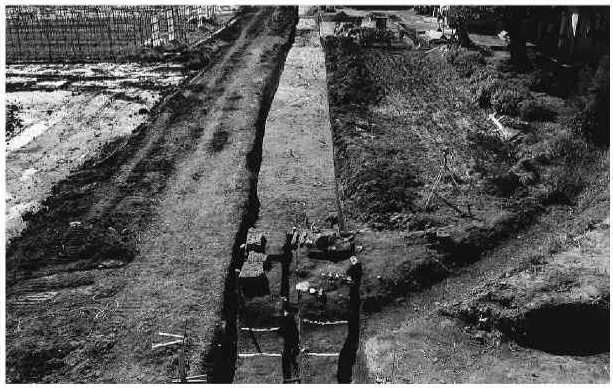
A区南壁東側土層断面（↑NW）

A区東壁土層断面（↑W）

B区遺構検出状況（↑N）

B区完掘状況（↑N）

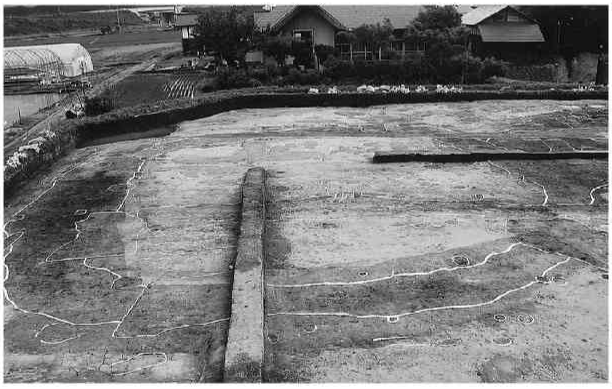
B区北壁土層断面（↑SW）



C区遺構検出状況（↑N）

図版４

SU1・2周溝墓完掘状況（↑S）



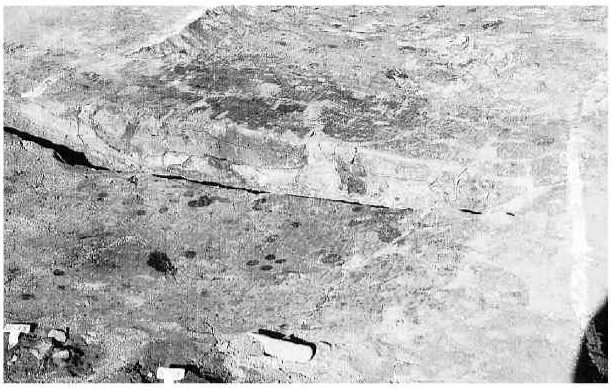
SU1周溝墓検出状況（↑N）

SU2周溝墓検出状況（↑N）

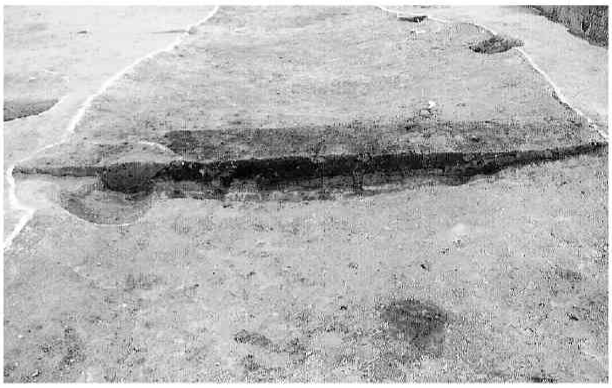
SU1周溝墓完掘状況（↑W）

SU2周溝墓精査状況（↑N）

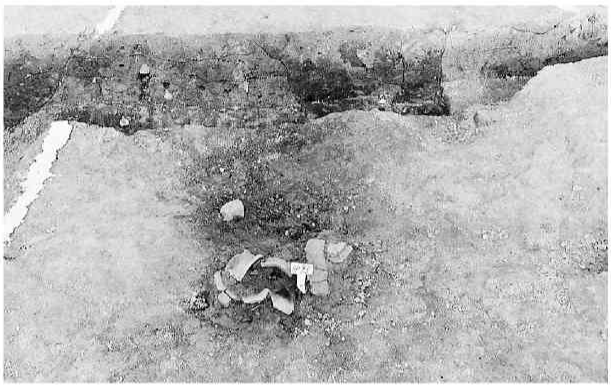
SU2周溝西土層断面（↑S）



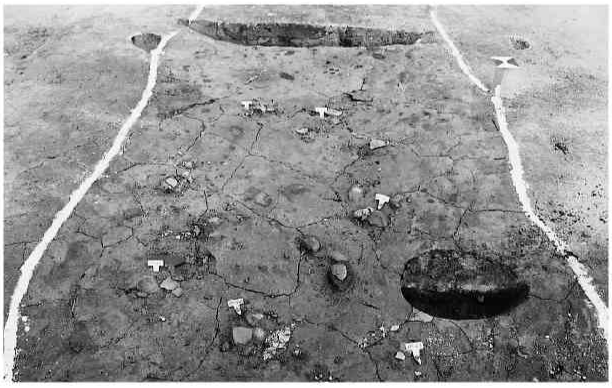
SU1周溝北土層断面（↑W）



SU1周溝東土層断面（↑N）



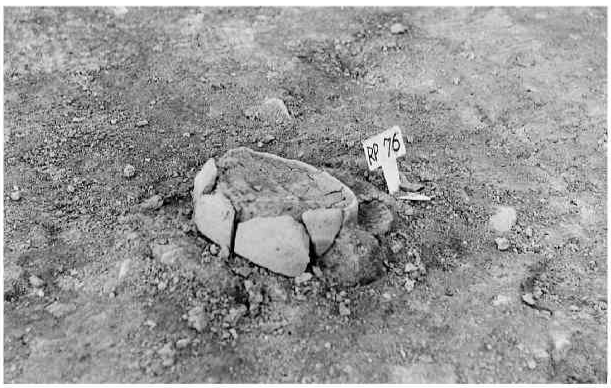
SU1周溝南土層断面（↑W）



SU1周溝遺物出土状況（↑S）

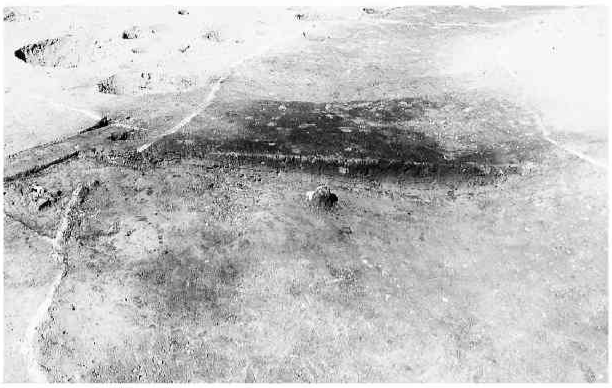
SU1周溝遺物（RP141・142）出土状況（↑S）

SU1周溝遺物（RP209）出土状況（↑S）

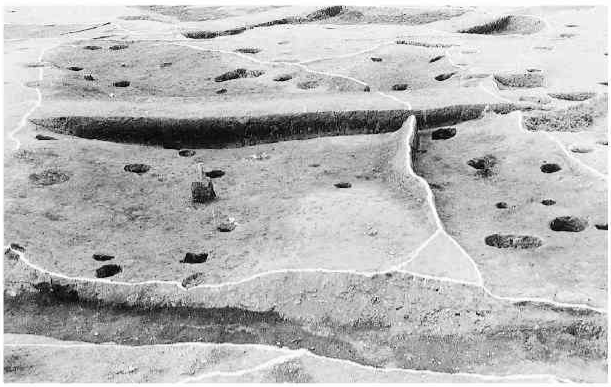


SU1周溝遺物（RP76）出土状況（↑S）

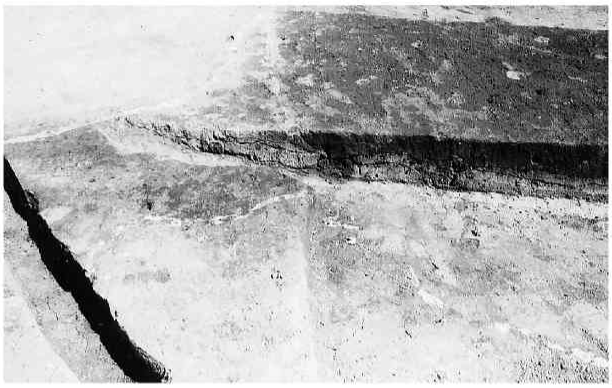
図版６



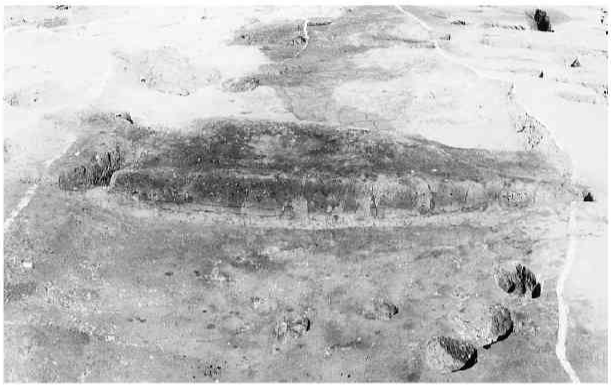
SU2周溝北西・SU3周溝土層断面（↑S）



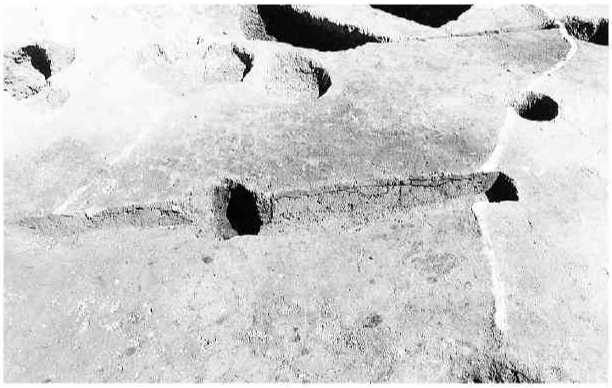
SU1周溝西・SU2周溝東土層断面（↑SW）



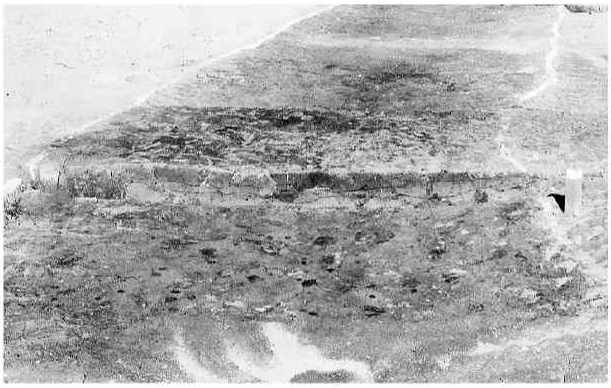
SU2周溝東・SU3周溝土層断面（↑S）



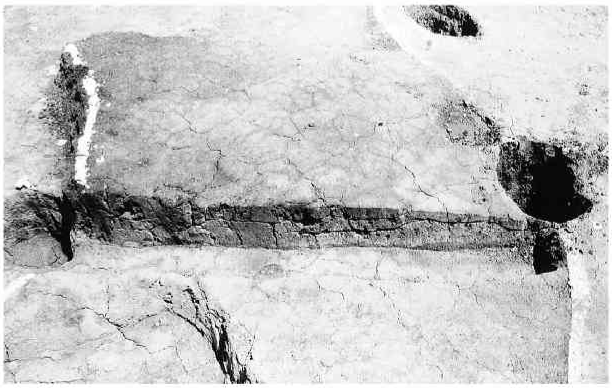
SU2周溝南土層断面（↑W）



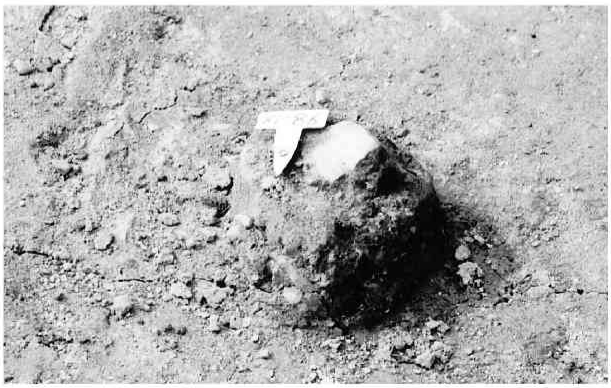
SU2周溝南西土層断面（↑W）



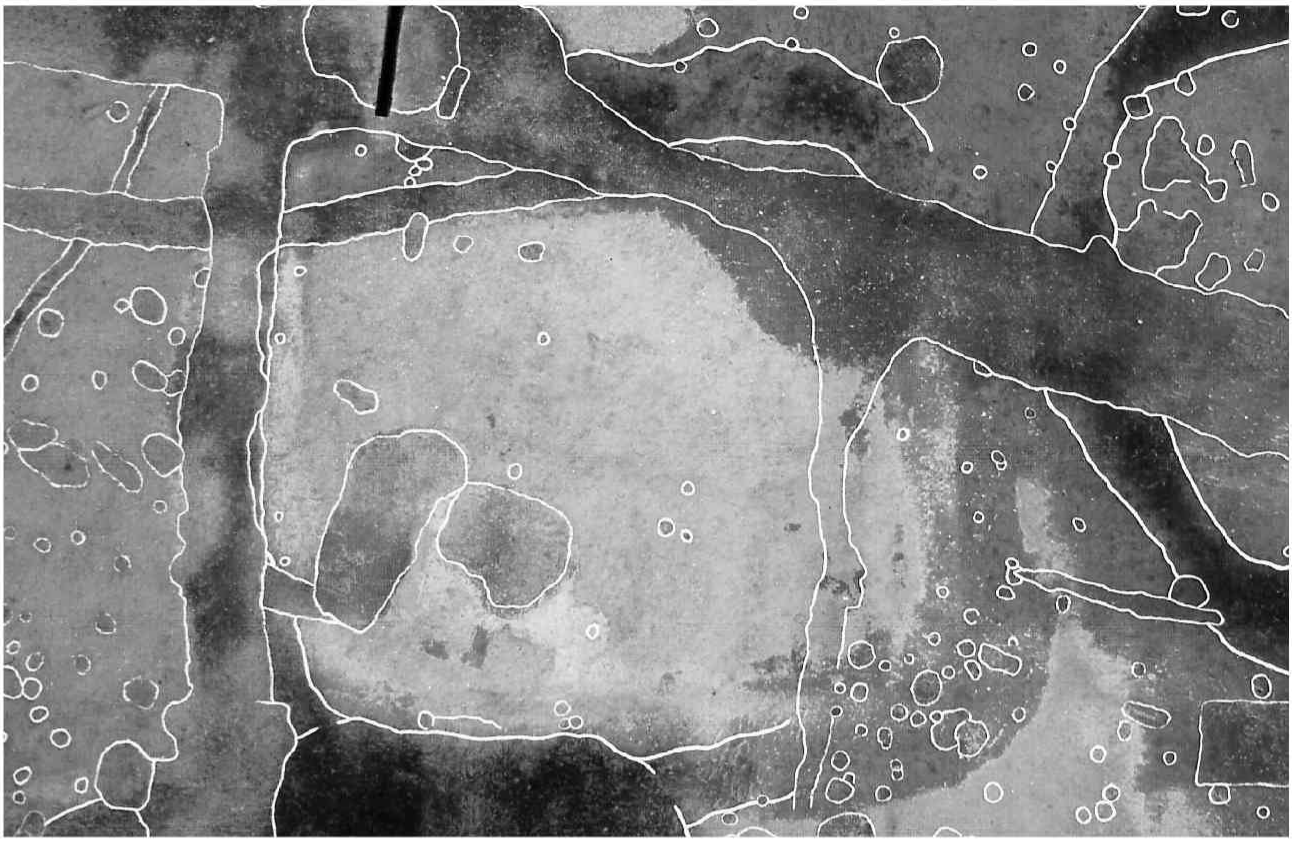
SU2周溝北土層断面（↑S）



SU2周溝北東土層断面（↑W）



SU2周溝遺物（RP86）出土状況（↑S）

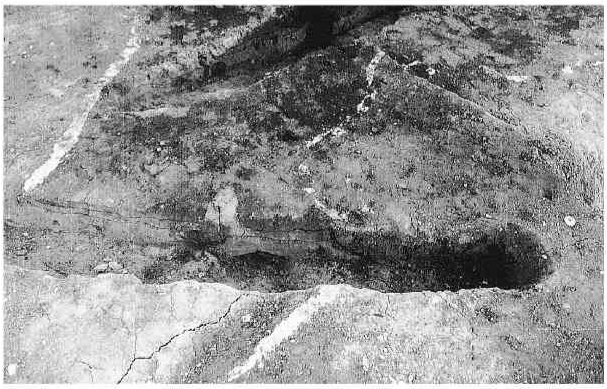


SU3周溝墓検出状況（↑上）

SU2・3周溝検出状況（↑W）

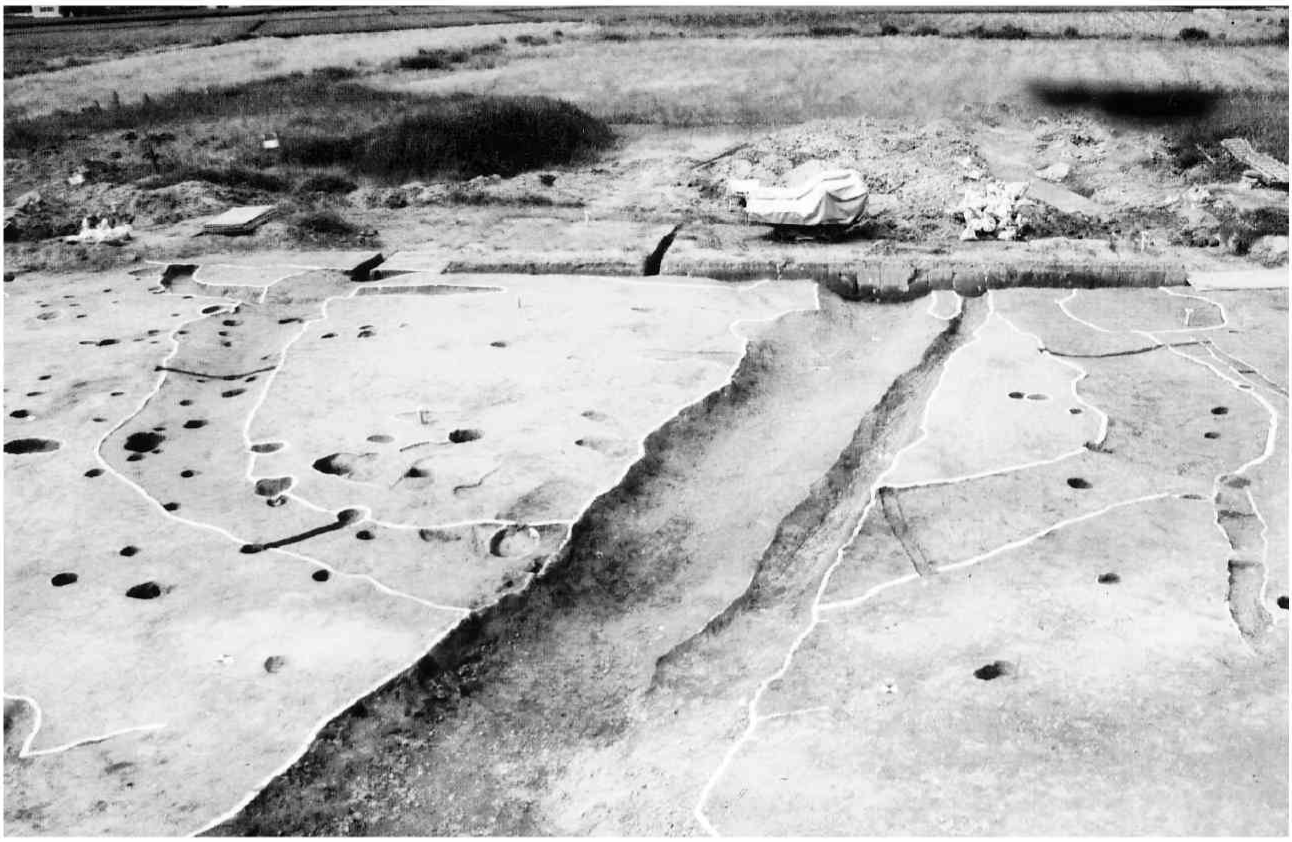
SU3周溝遺物(RP190)出土状況（↑S）

SU3周溝西土層断面（↑S）



SU3周溝北東土層断面（↑W）

図版８

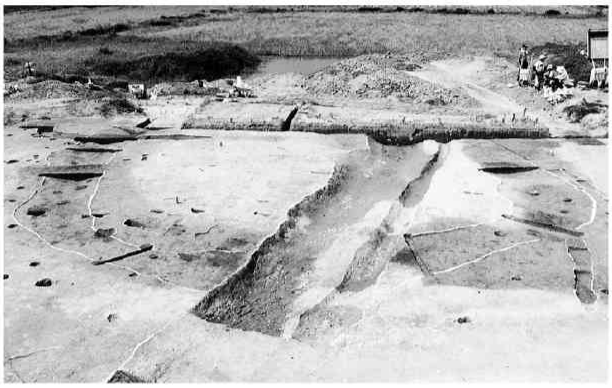


SU4周溝墓完掘状況（↑S）

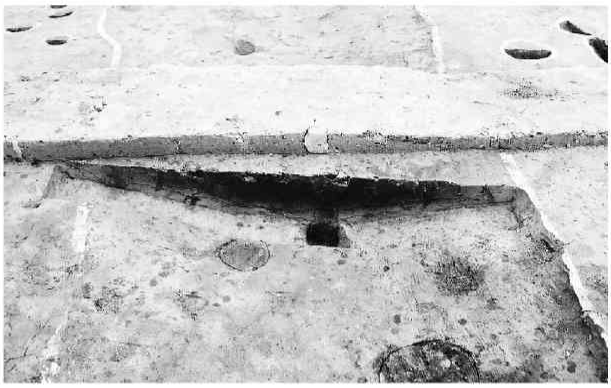
SU5周溝墓完掘状況（↑E）

SU4周溝墓検出状況（↑上）

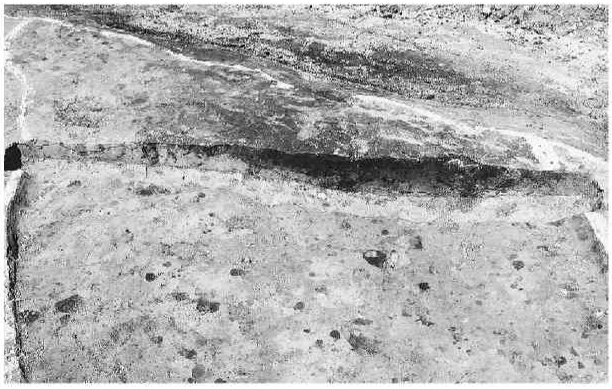
SU4周溝墓検出状況（↑S）



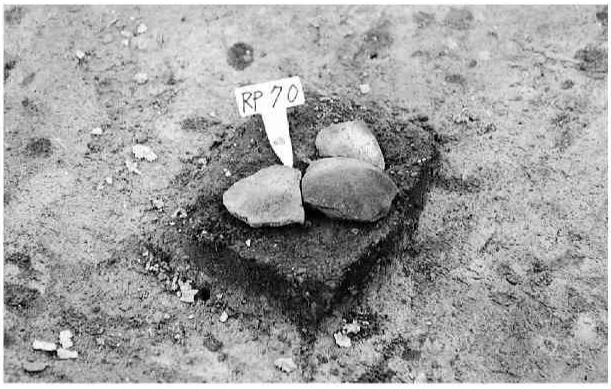
SU4周溝墓精査状況（↑S）



SU4周溝西土層断面（↑S）



SU4周溝南土層断面（↑NE）



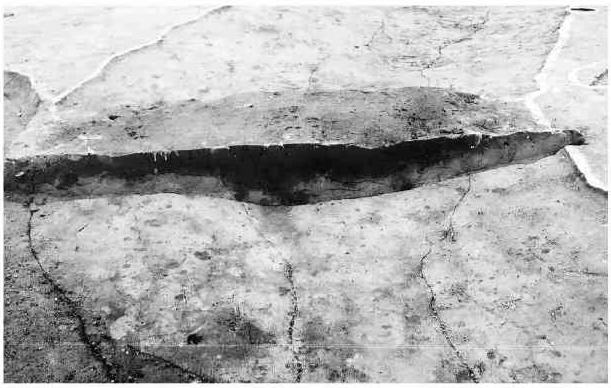
SU4周溝遺物（RP70）出土状況（↑W）

SU5周溝墓検出状況（↑上）

SU5周溝墓検出状況（↑S）

図版10

SU5周溝墓完掘状況（↑S）

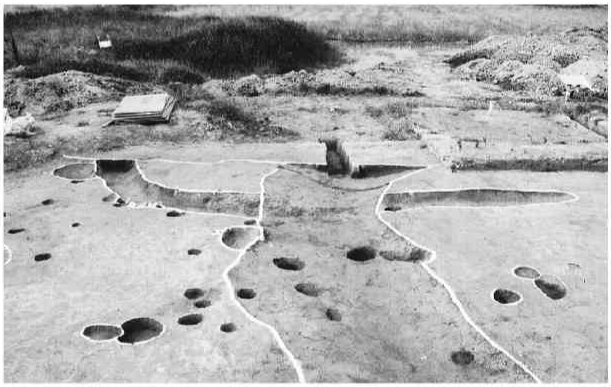


SU5周溝北西土層断面（↑SW）

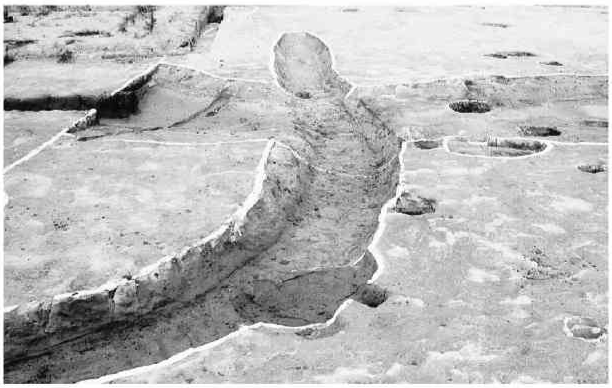
SU5周溝南東土層断面（↑S）

SU5周溝・SD9溝跡土層断面（↑N）

SU5周溝遺物(RP13)出土状況（↑S）



SU58周溝墓完掘状況（↑S）

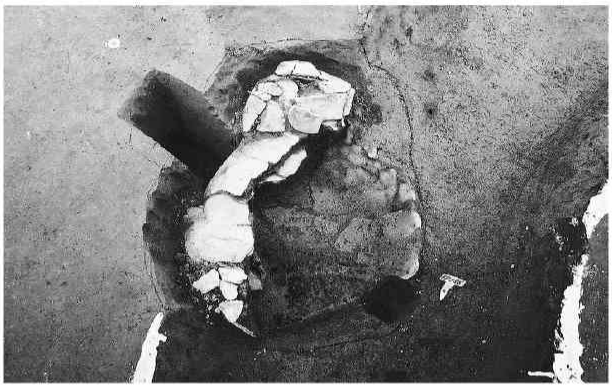


SU58周溝墓完掘状況（↑W）

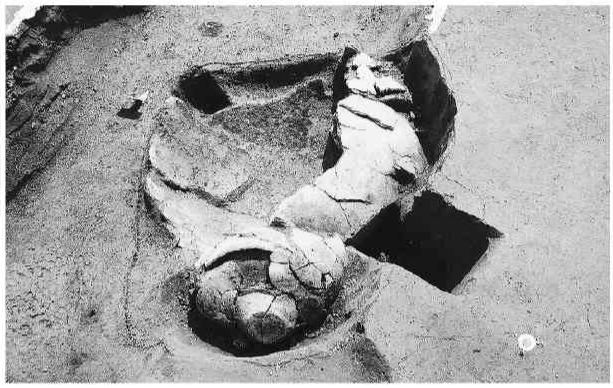
SU58周溝墓土層断面（↑W）

SU156土器棺墓土層断面（↑S）

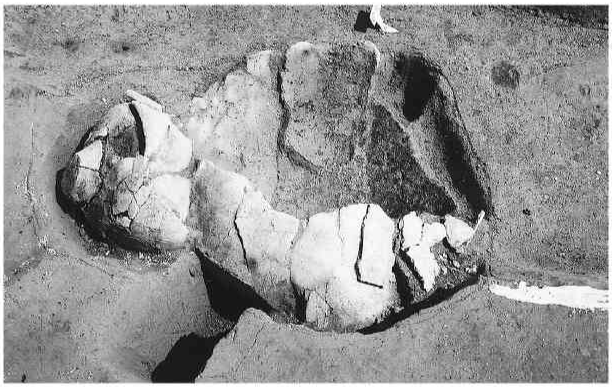
同左出土状況（↑NW）



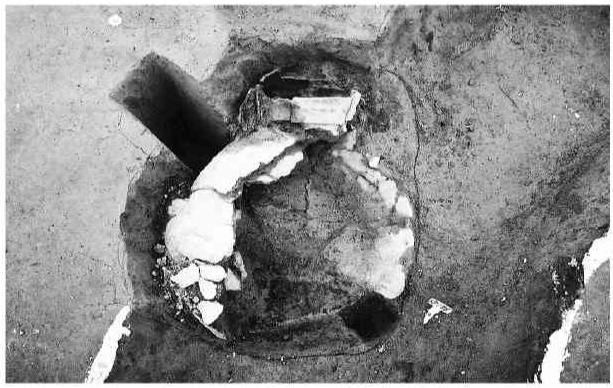
同上完掘状況（↑S）



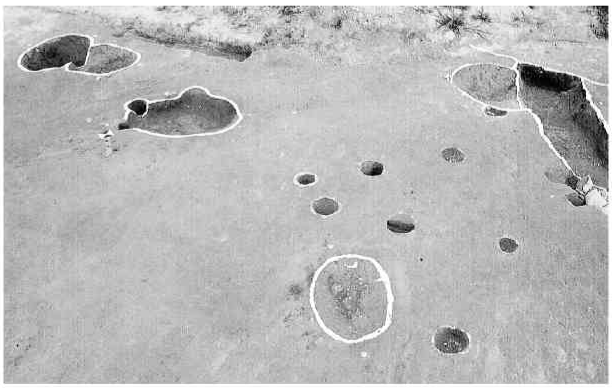
同上蓋出土状況（↑N）



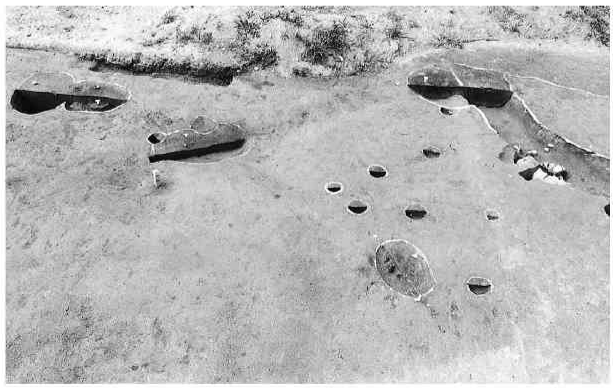
同上完掘状況（↑W）



同上蓋外し状況（↑S）

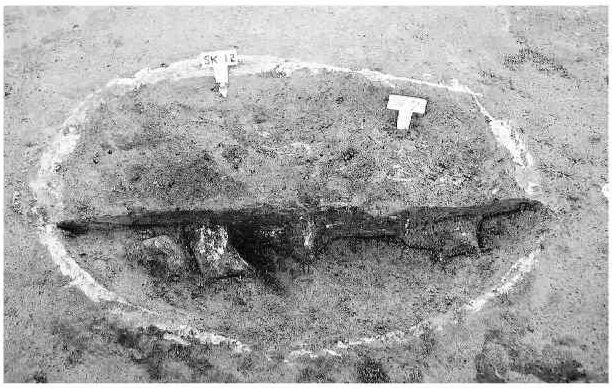


SK12～15・59土坑墓群完掘状況（↑S）

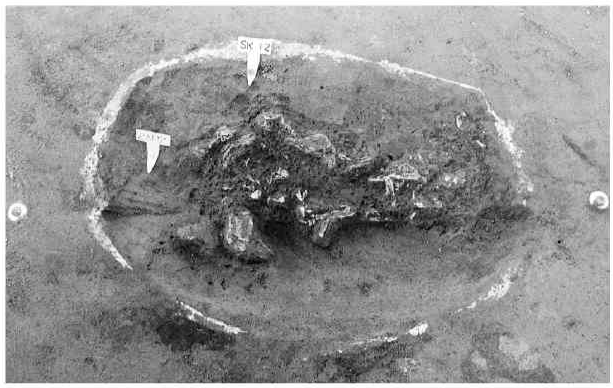


同左精査状況（↑S）

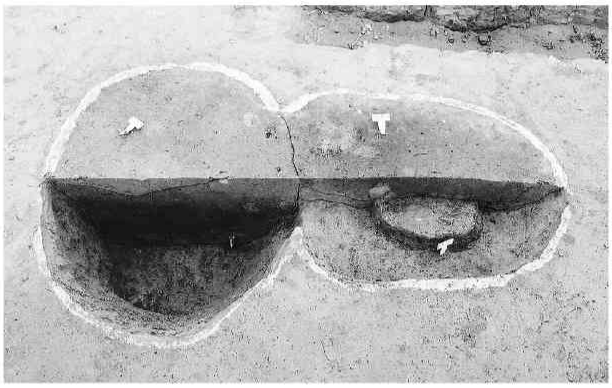
図版12



SK12土坑墓土層断面（↑W）

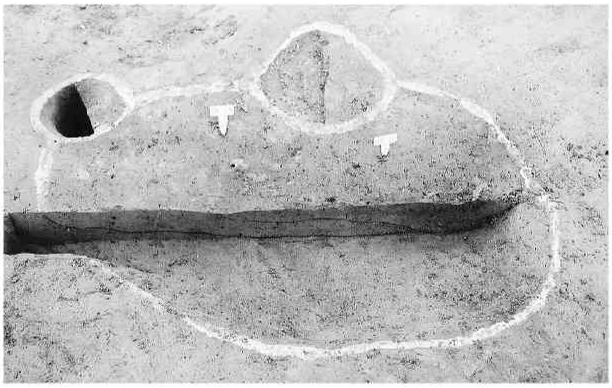


同左人骨片出土状況（↑W）

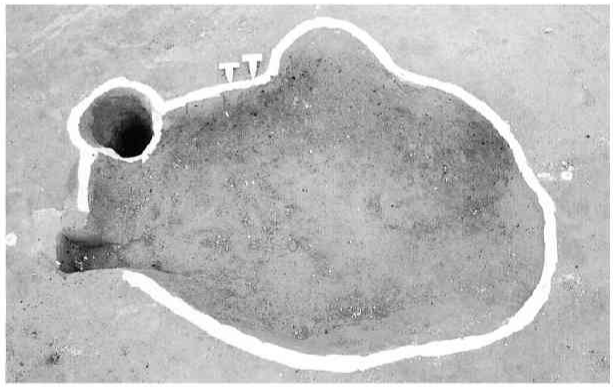


SK14・15土坑墓土層断面（↑S）

SK14人骨片・土師器片出土状況（↑S）

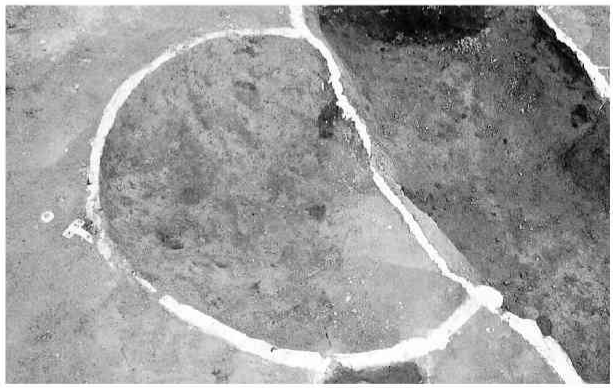


SK13土坑墓土層断面（↑S）



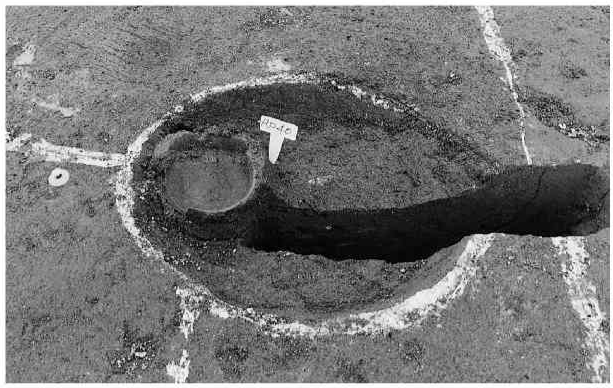
SK13土坑墓完掘状況（↑S）

SU59土坑墓・SU58周溝墓土層断面（↑S）

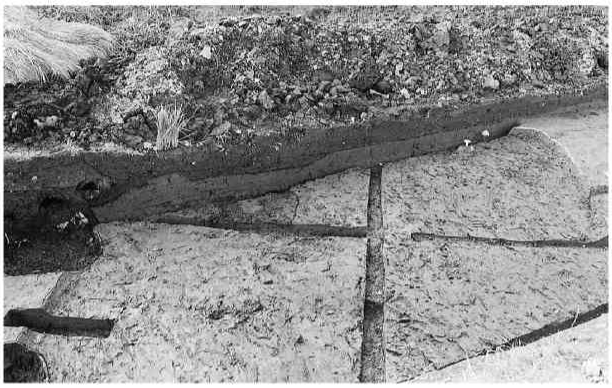


SK59土坑墓完掘状況（↑S）

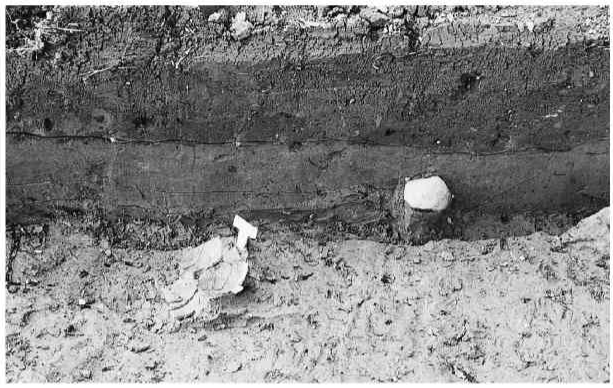
ST503竪穴住居跡貼床土土層断面（↑W）



同左EK1遺物(RP540)出土状況（↑NE）

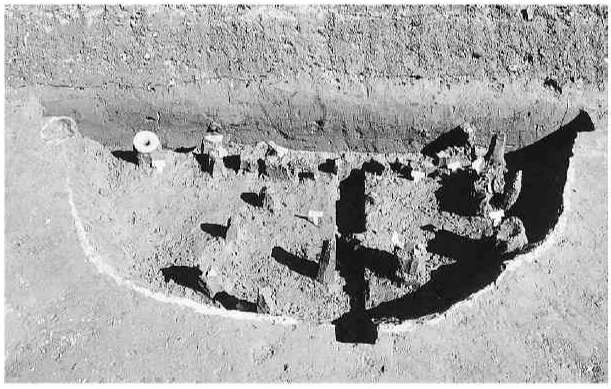


ST504竪穴住居跡完掘状況（↑SE）



同左遺物(RP553)出土状況（↑E）

ST506竪穴住居跡遺物出土状況（↑S）



SK505土坑跡遺物出土状況（↑E）

SK509土坑跡遺物(RP584･585)出土状況（↑SW）

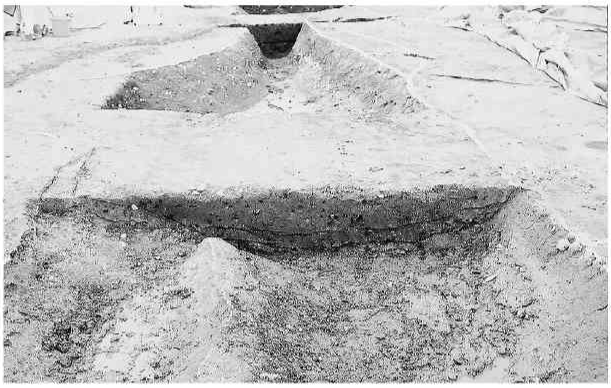
SX73溝状遺構遺物出土状況（↑W）

図版14

SD11・46堀跡・SB600・601掘立柱建物跡完掘状況（↑上）

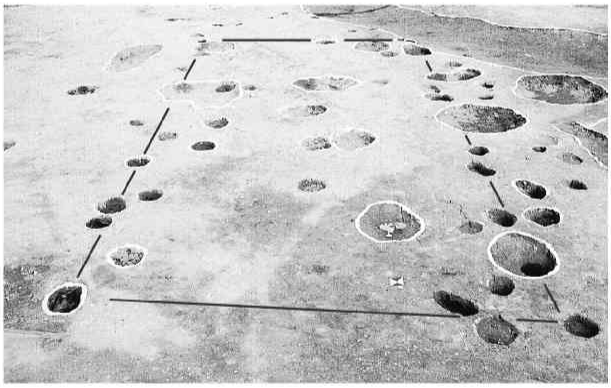
SD46堀跡完掘状況（↑S）

SD11堀跡完掘状況（↑W）



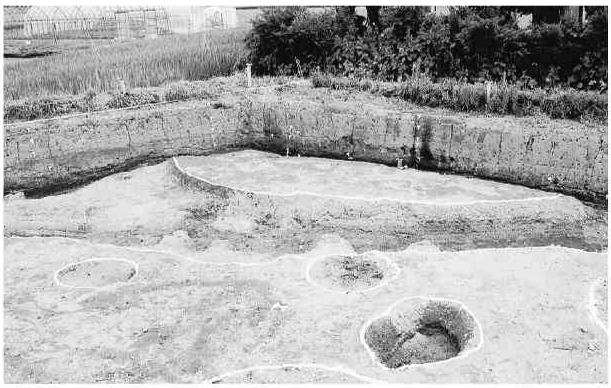
SD46堀跡北半土層断面（↑N）

SD46下層遺物（RP192）出土状況（↑N）



SB600建物跡完掘状況（↑N）

SB601a建物跡完掘状況（↑上）

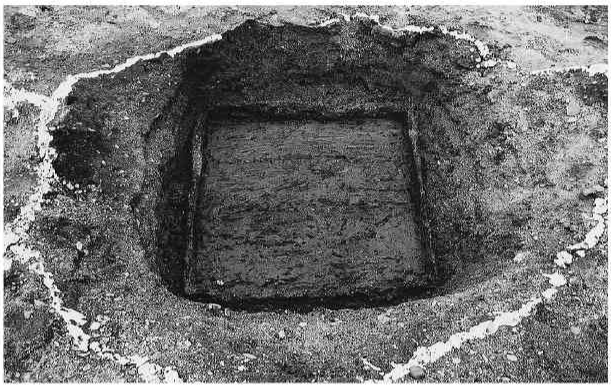


SD50溝跡完掘状況（↑NW）

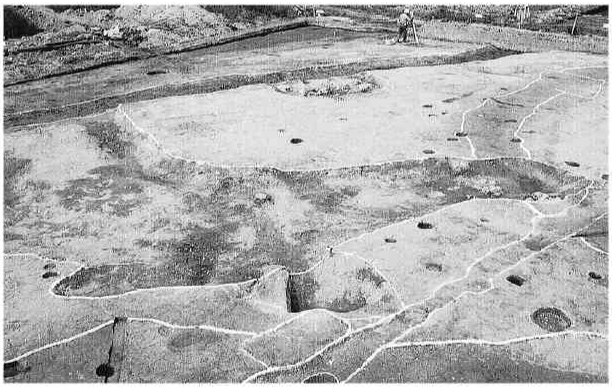
SD50溝跡土層断面（↑W）

SD50溝跡遺物(RP105)出土状況（↑N）

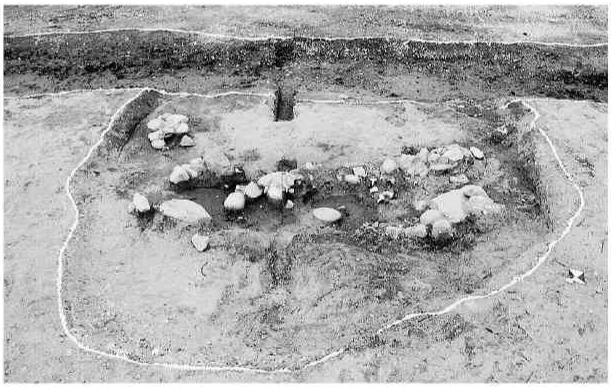
SE39・40・42井戸跡群完掘状況（↑S）



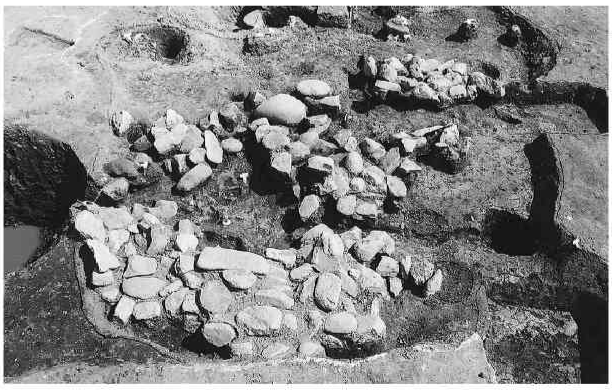
SE39井戸枠出土状況（↑S）



SX33溝状遺構完掘状況（↑SW）



SX51落ち込み状遺構完掘状況（↑S）



SE23井戸跡精査状況（↑S）

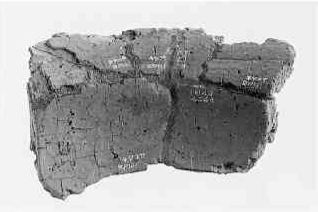
C区厨子型板碑近景（↑E）

1

2

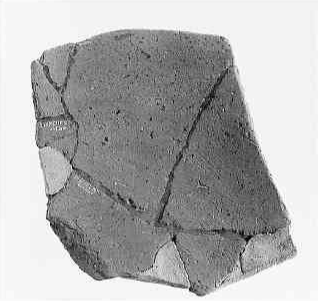
3

4

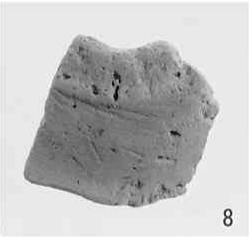


5

6

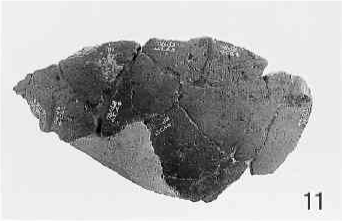


7


8

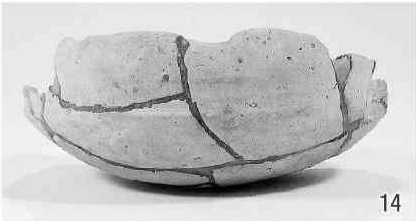
9

10


11

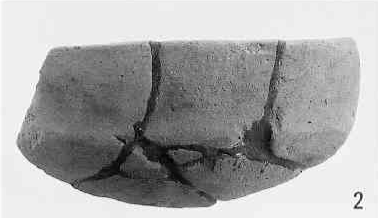
12

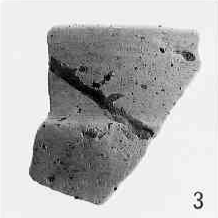
13

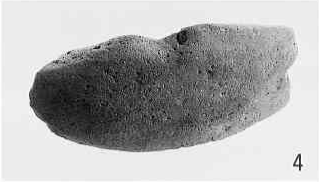

14

出土遺物（１）

1


2

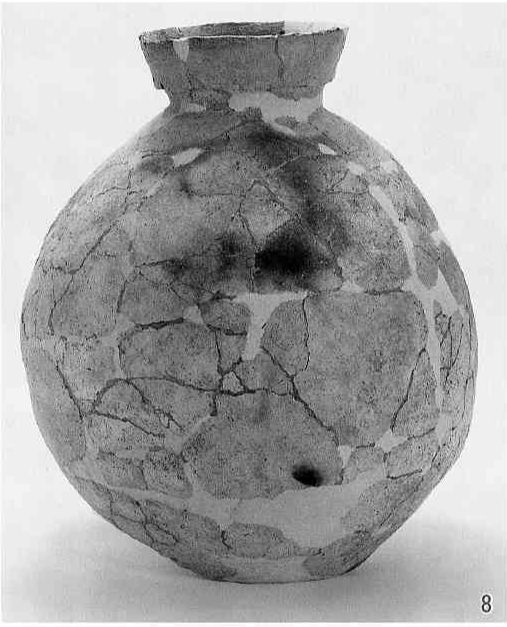

3


4

5

6

7

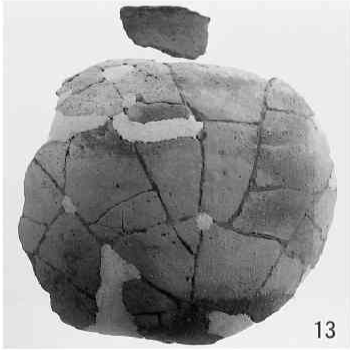

8

9

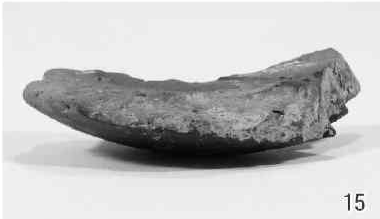
10

11

12

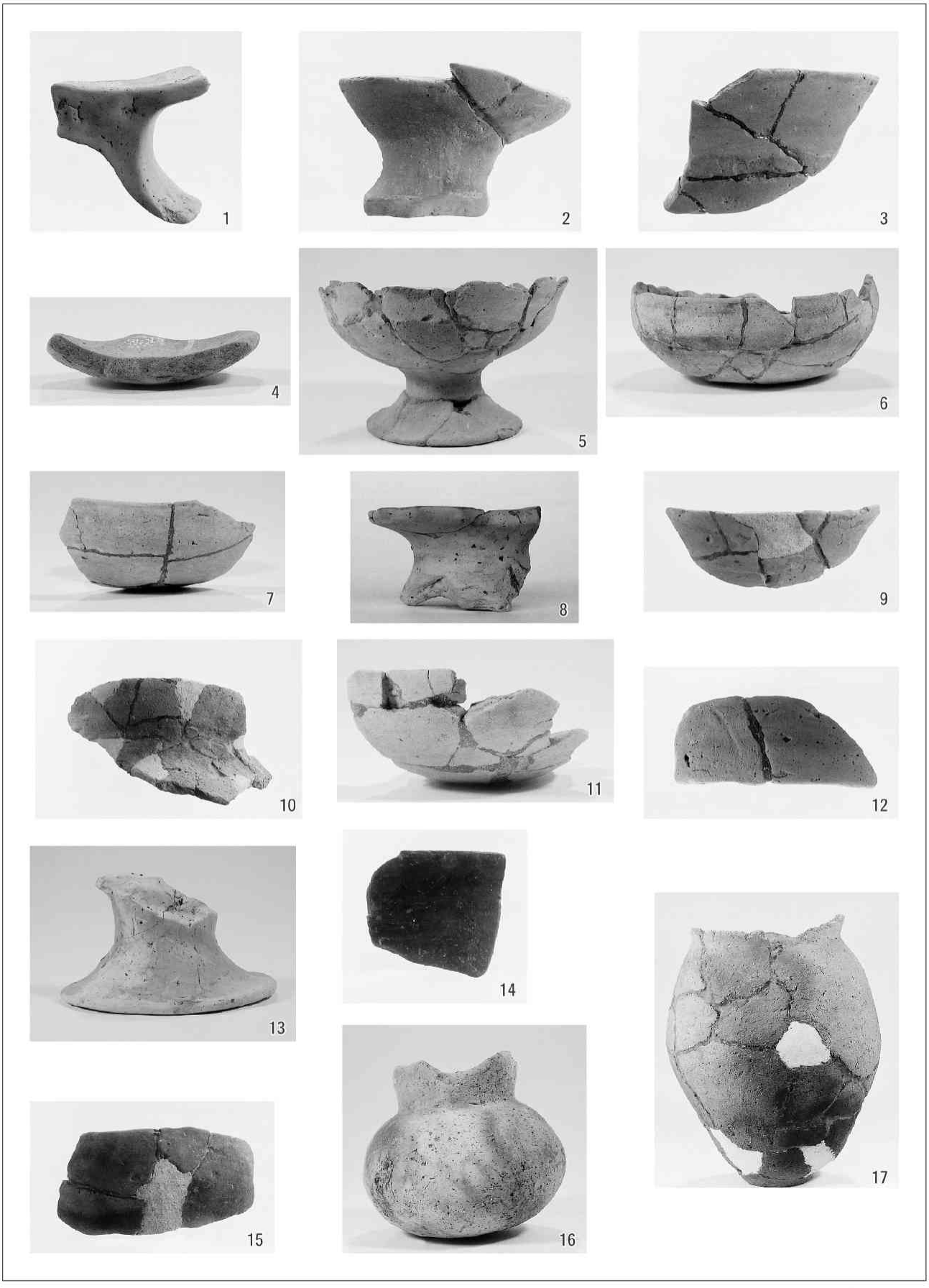

13

14

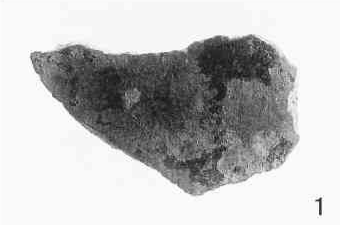

15

16

出土遺物（２）



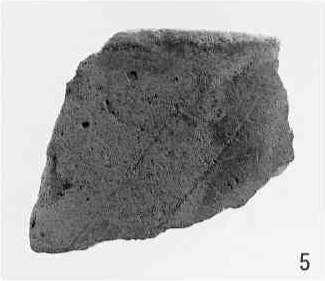
出土遺物（３）


1

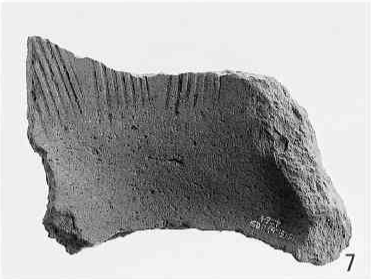
2

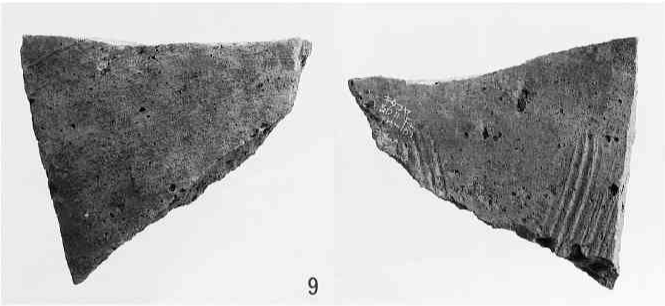
3

4

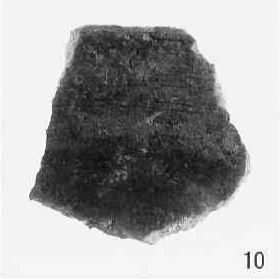

5

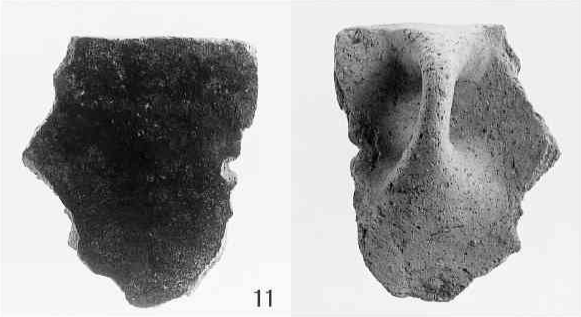
6


7

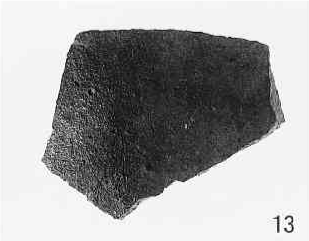

9

8


10

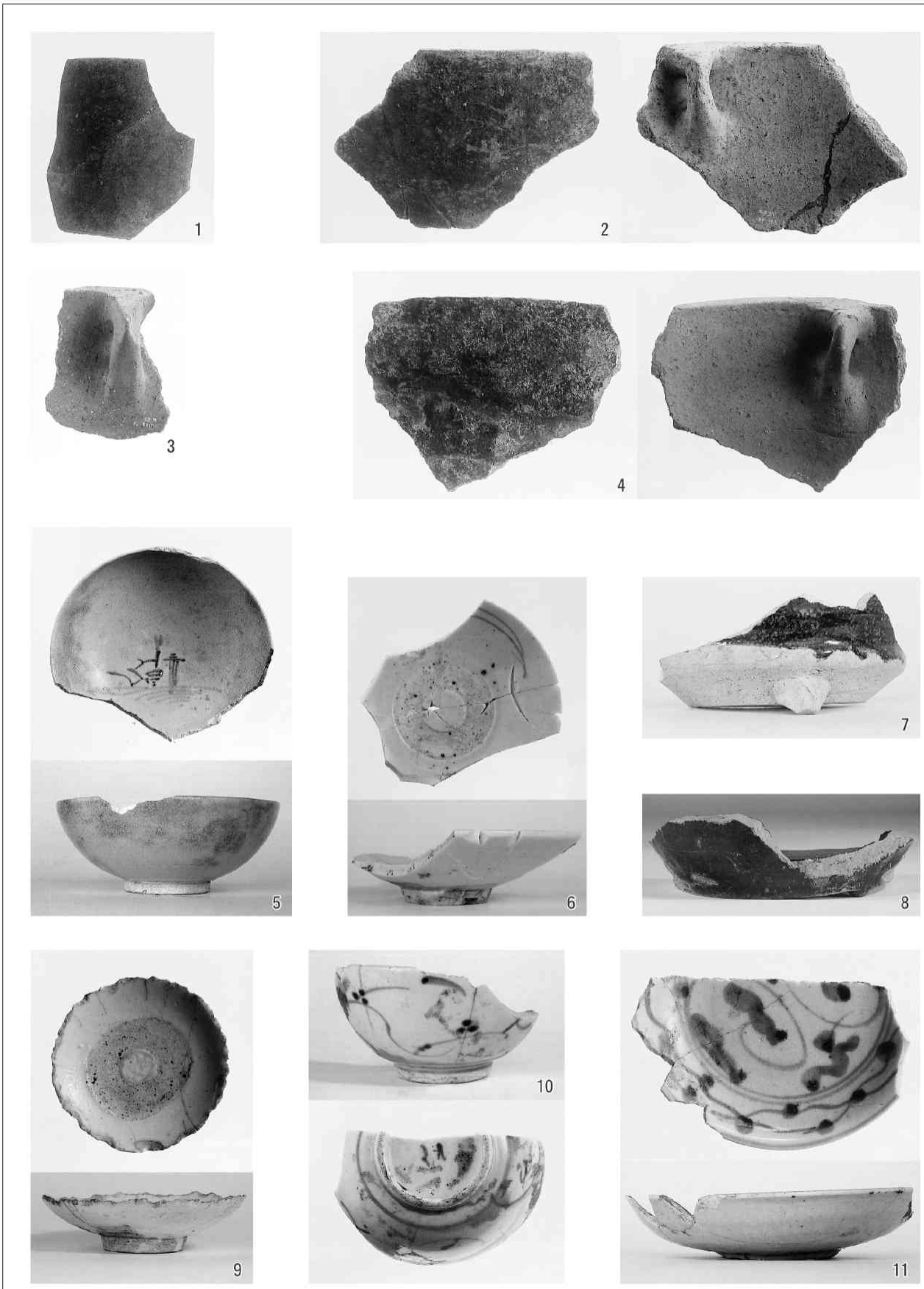

11

12

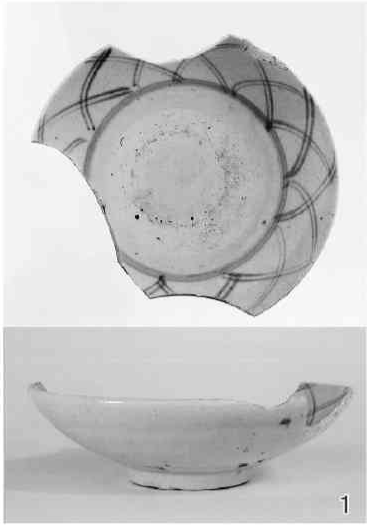

13

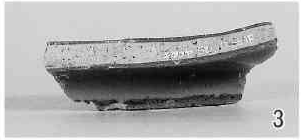
14

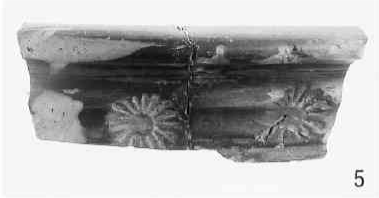
出土遺物（４）

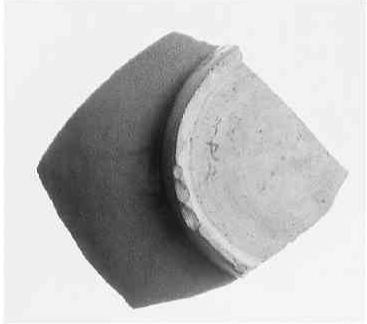


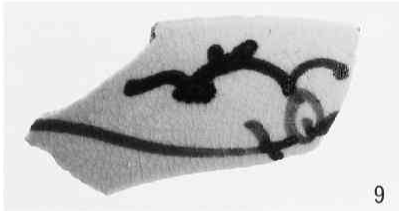
出土遺物（５）

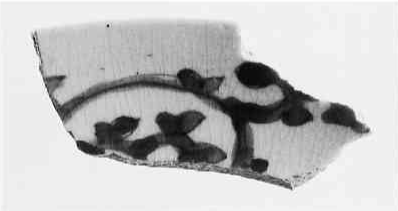


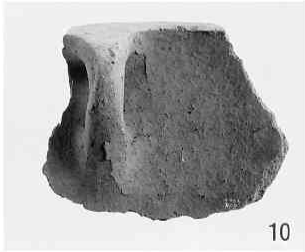


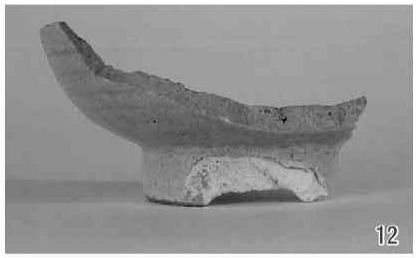


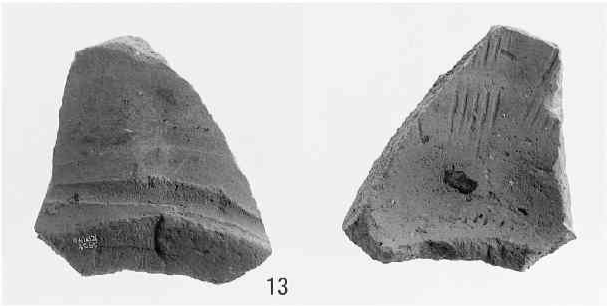






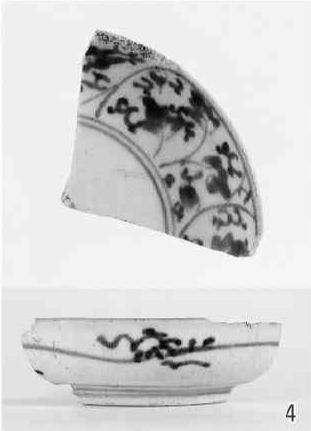


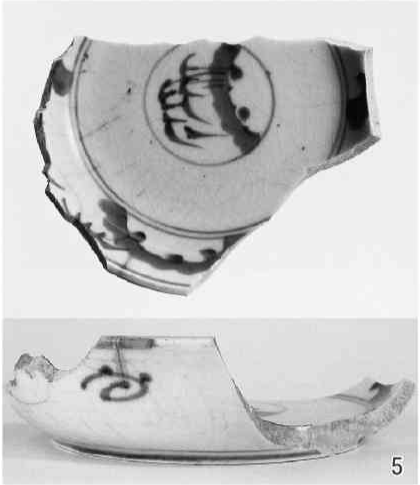


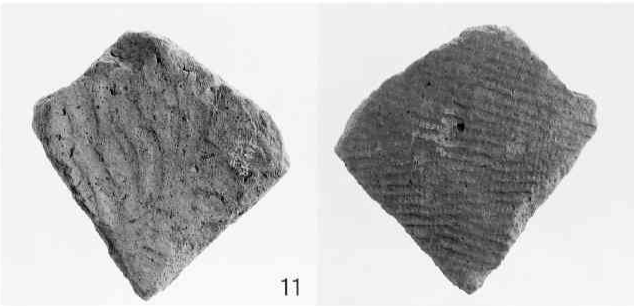


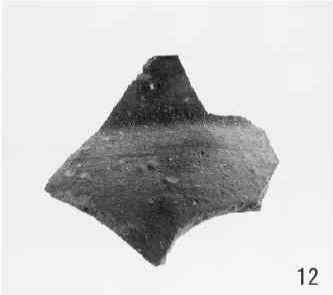
出土遺物（６）

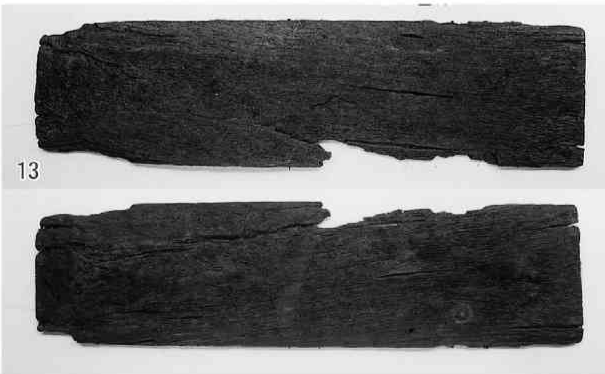
図版22

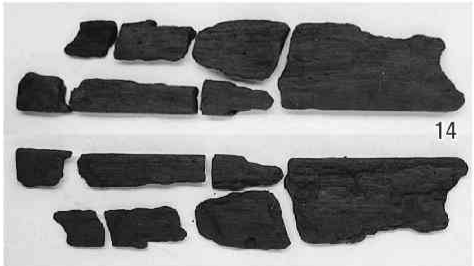












出土遺物（７）

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第103集

北小屋屋敷遺跡発掘調査報告書

2002年３月25日発行

発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161
山形県上山市弁天二丁目15番１号
電話　023-672-5301
印刷　株式会社アサヒ印刷